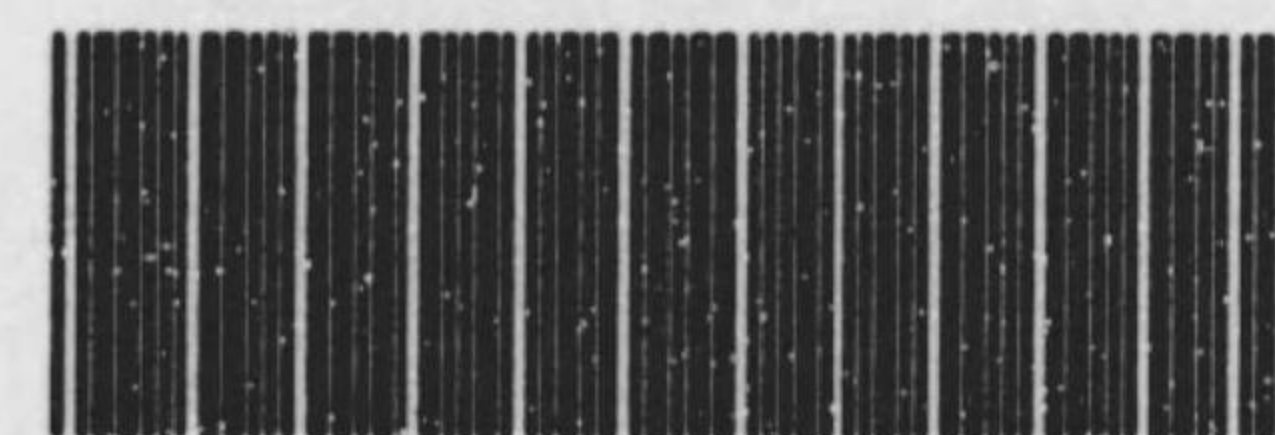


679
136



* 0051931000 *

0051931-000

679-136

大学教授評判記

報知新聞社編輯局・編

河出書房

昭和10

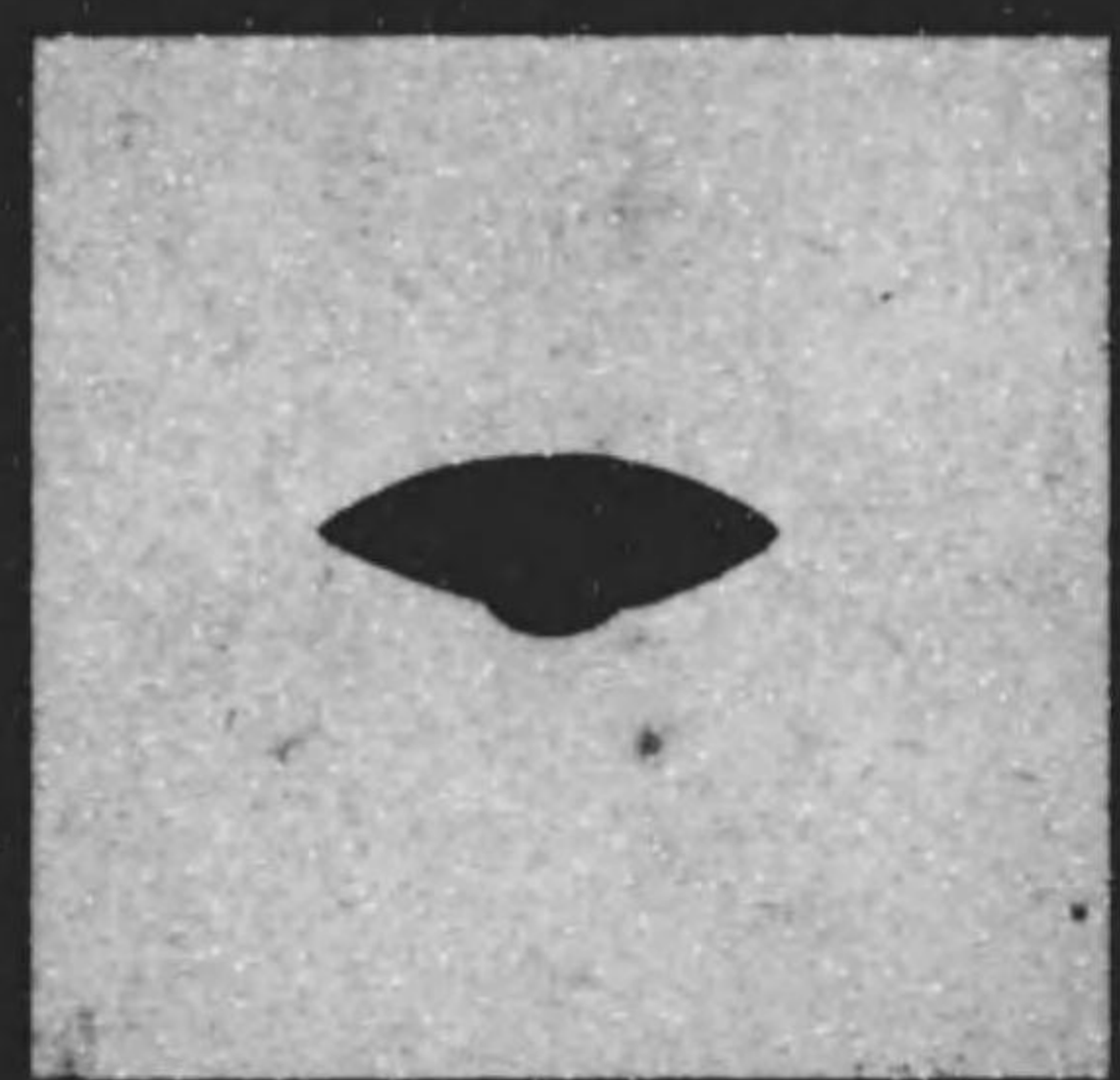
AHN



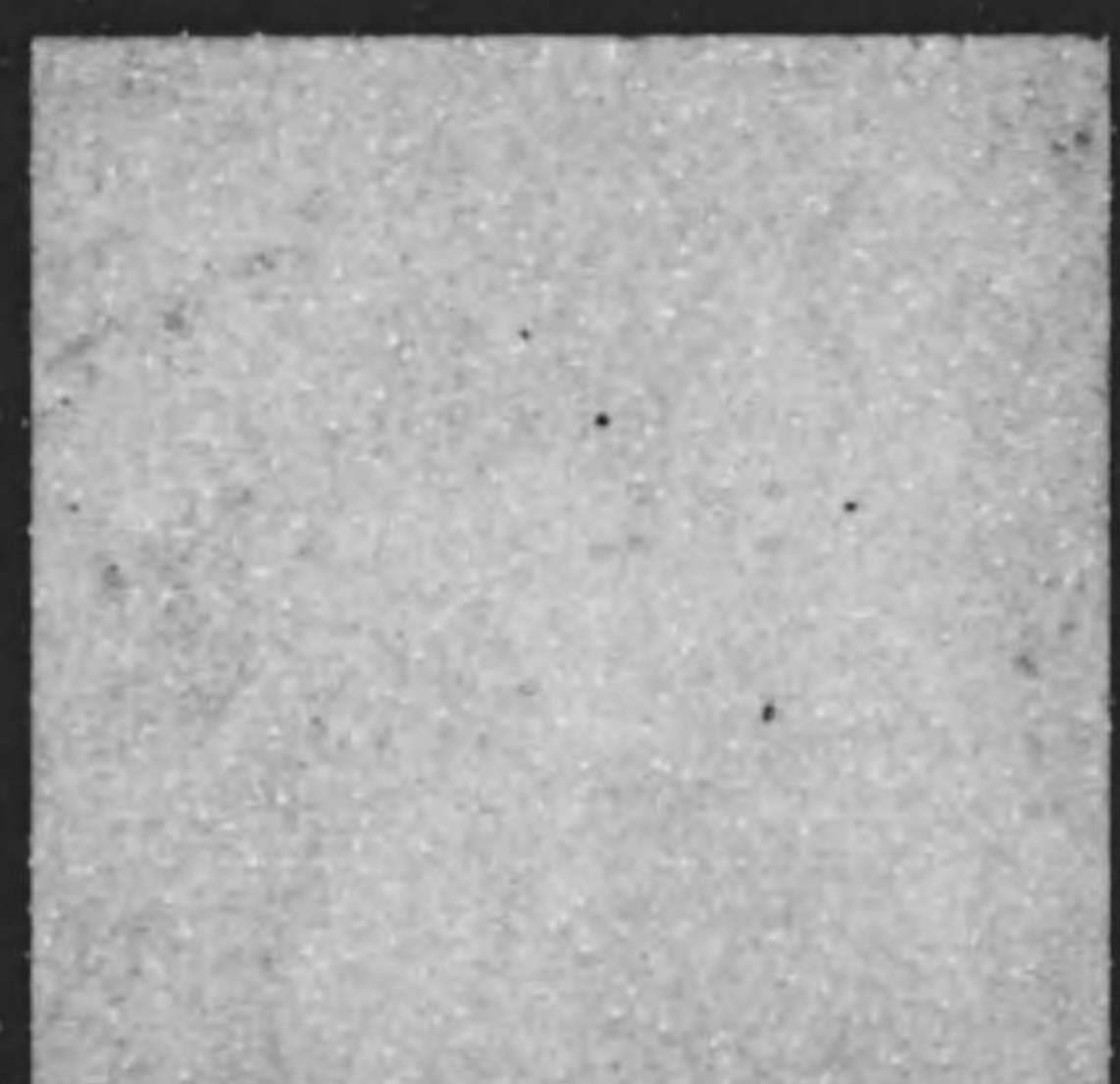
大 教 評

學 授 判

記

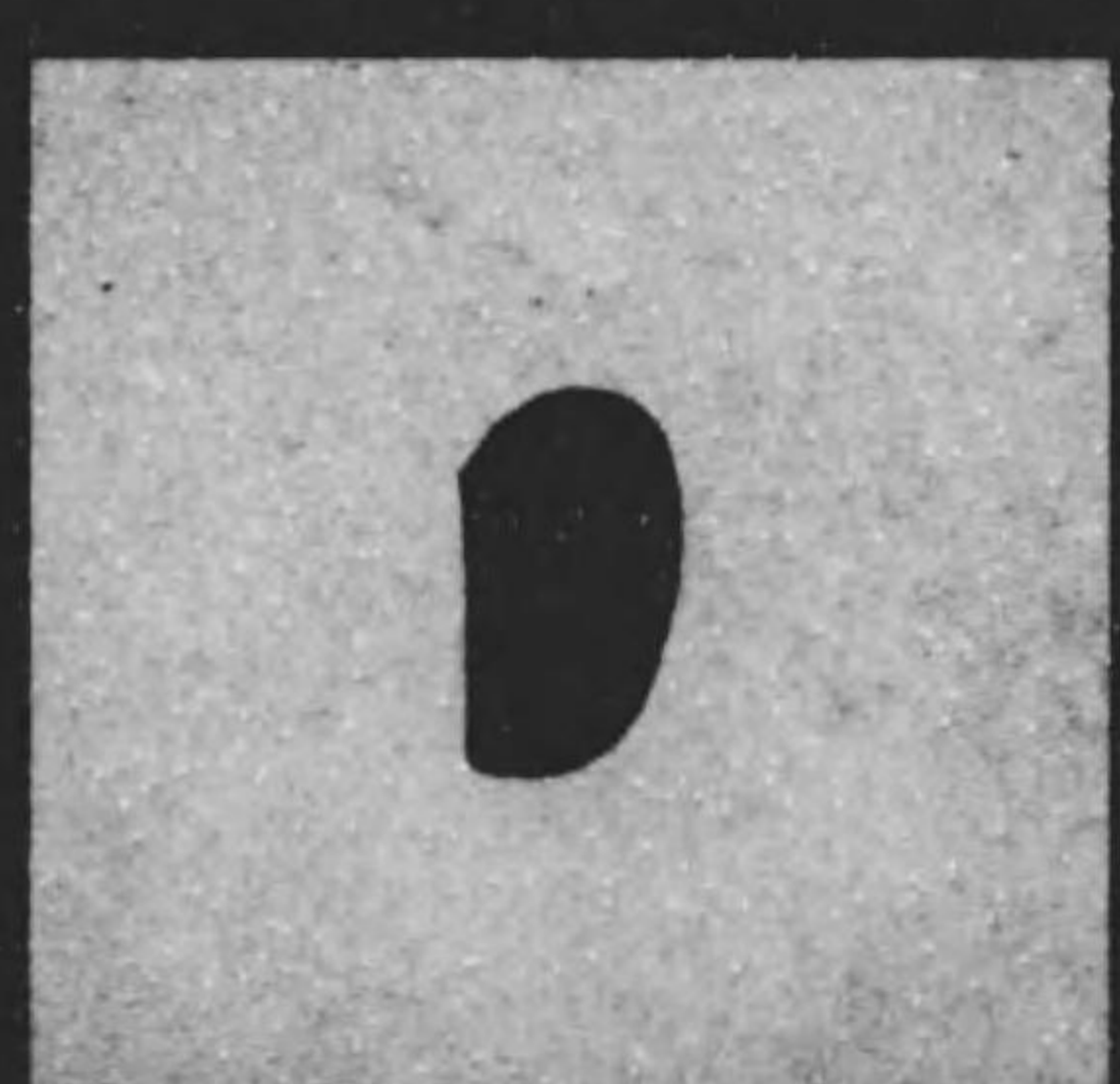


報知新聞社
編輯局



社
編

東河
京書出
房書行 護



97

100

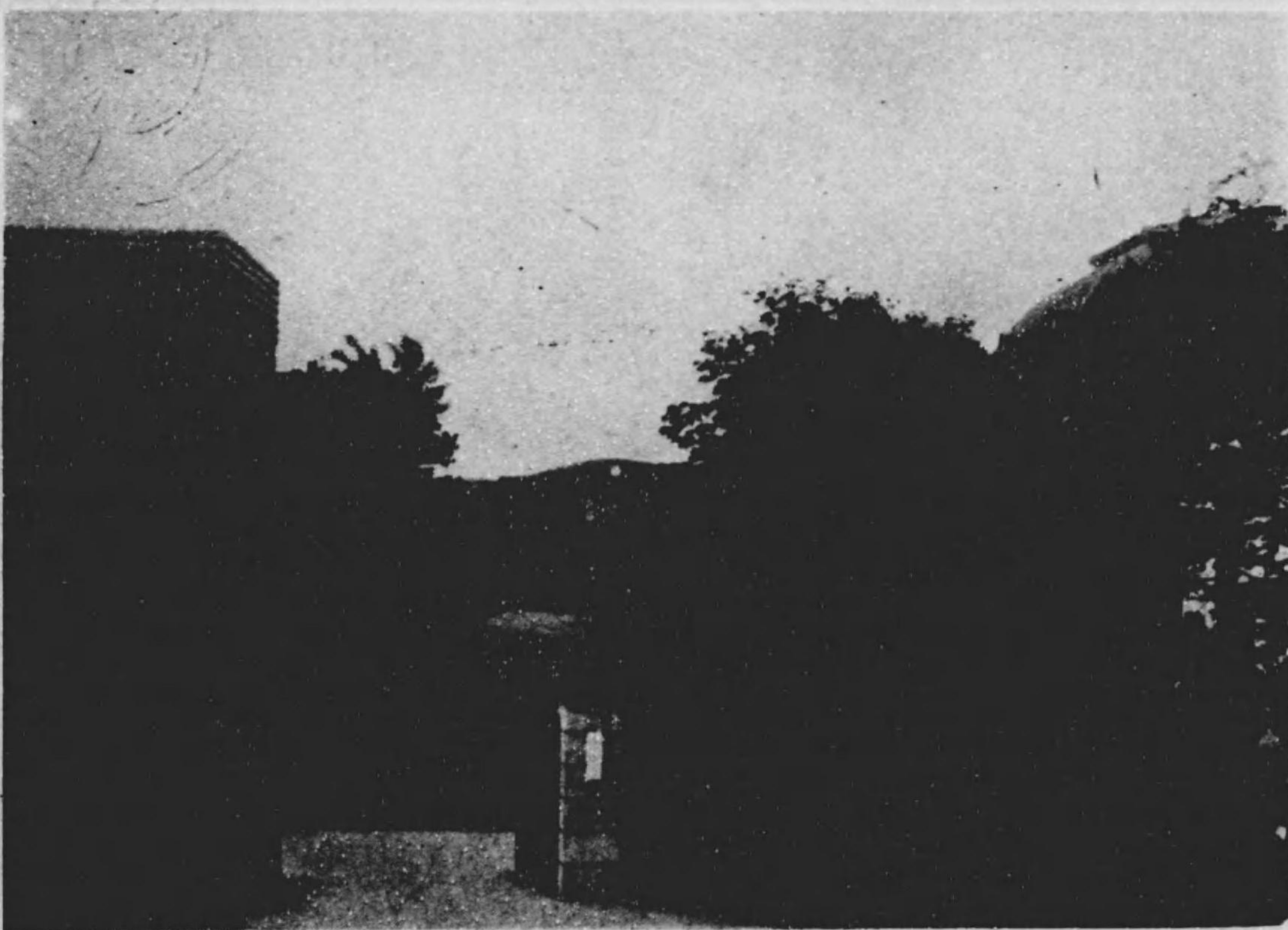
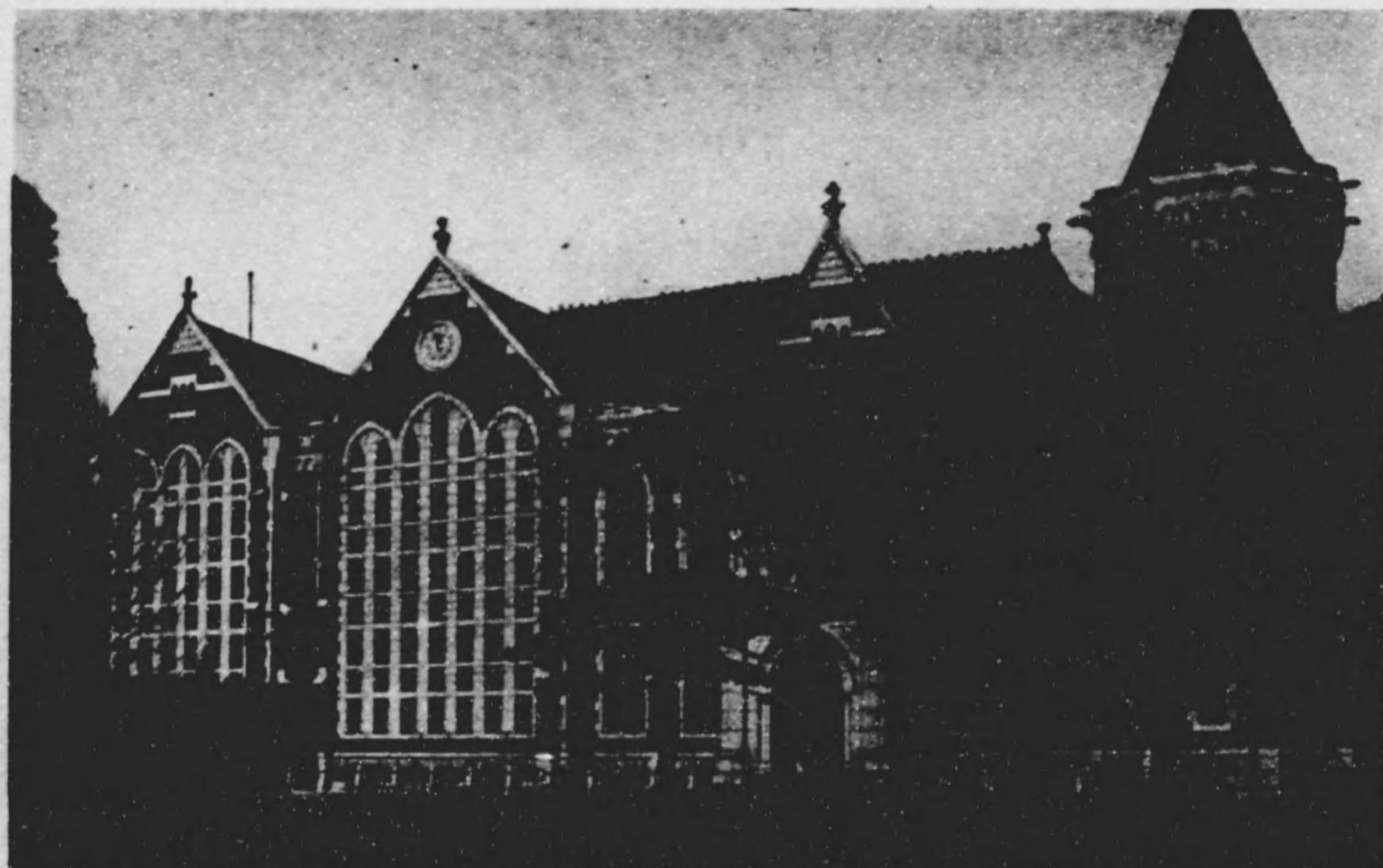


編輯局編

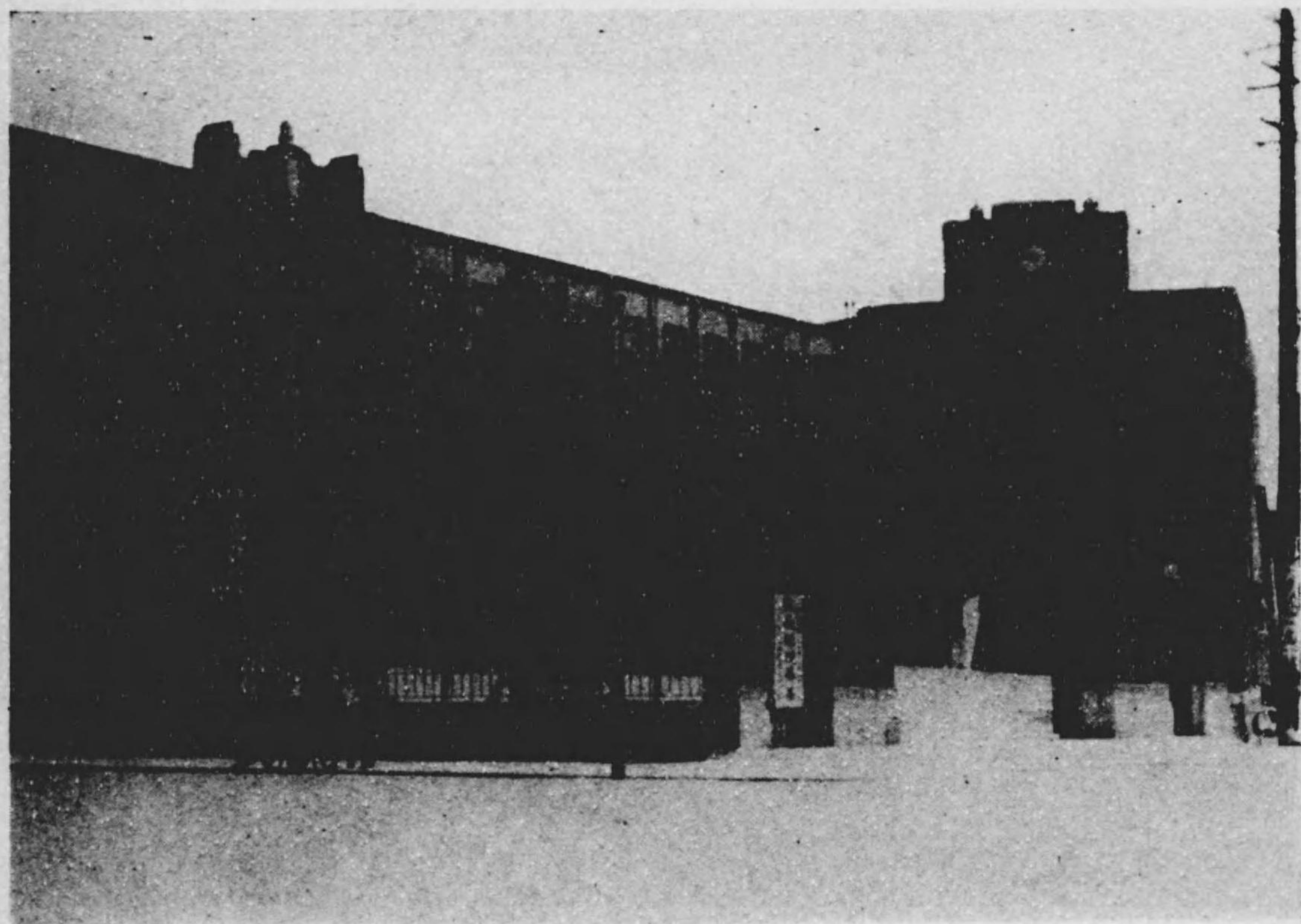
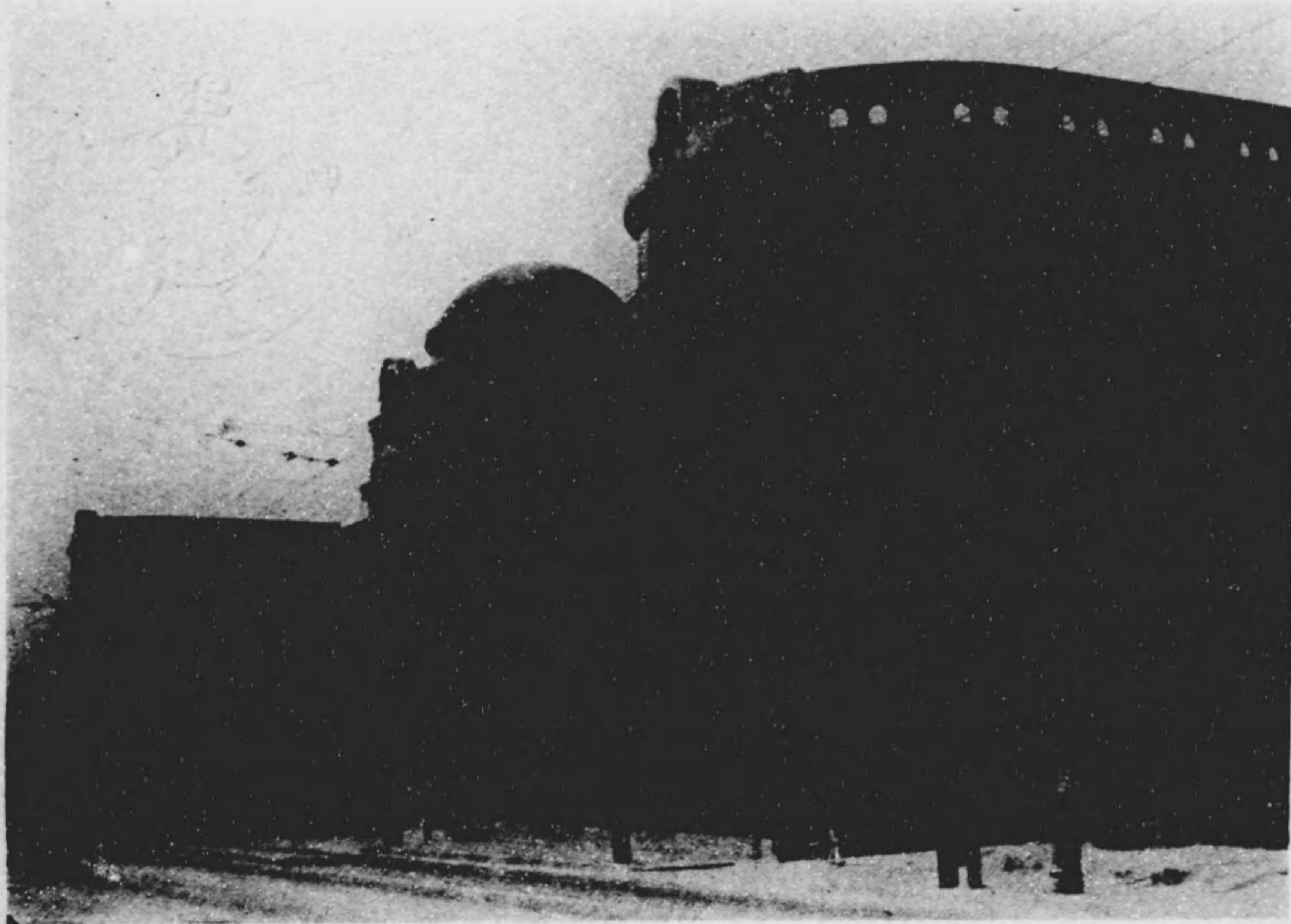
教授評判記

東京河出書房

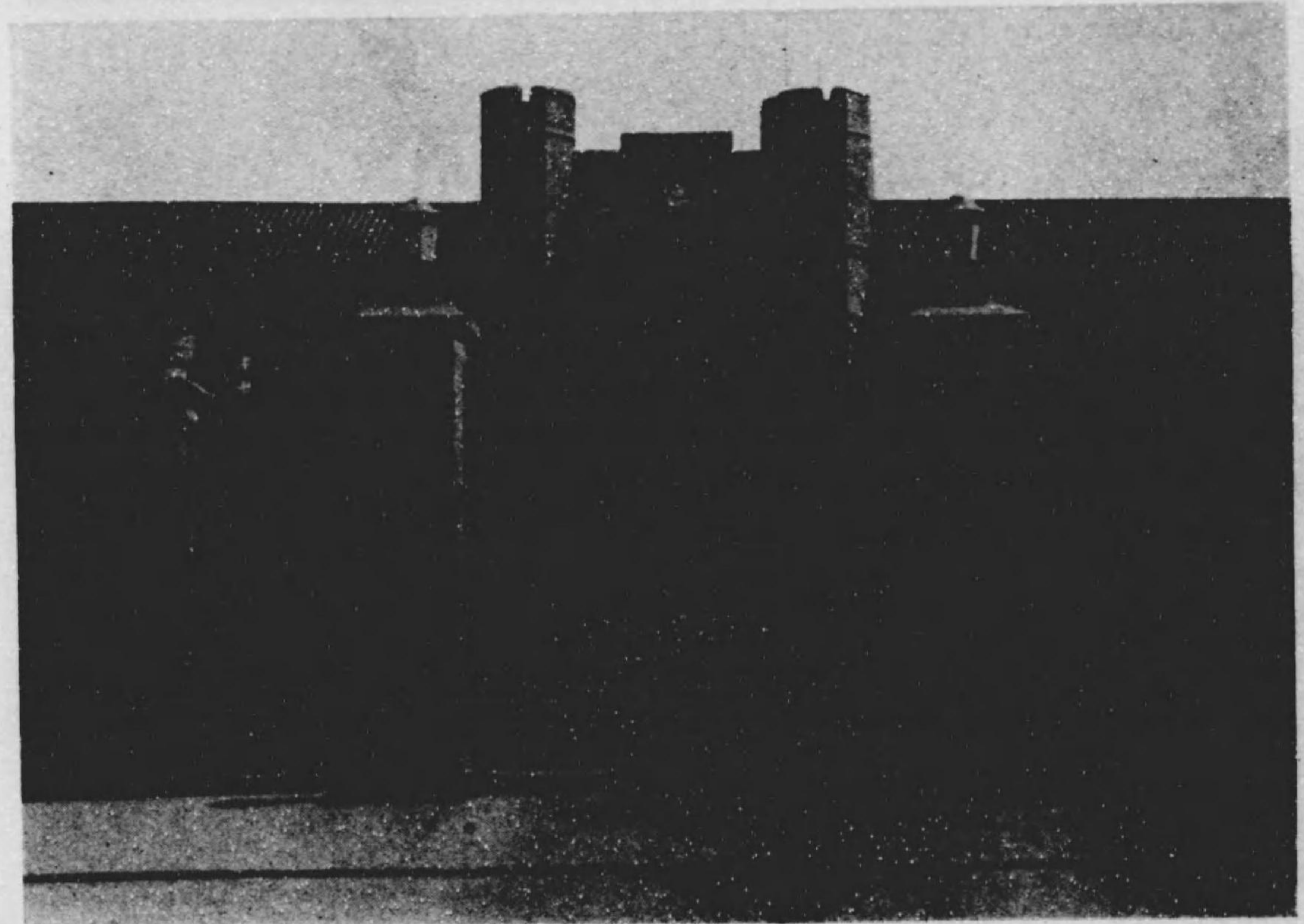
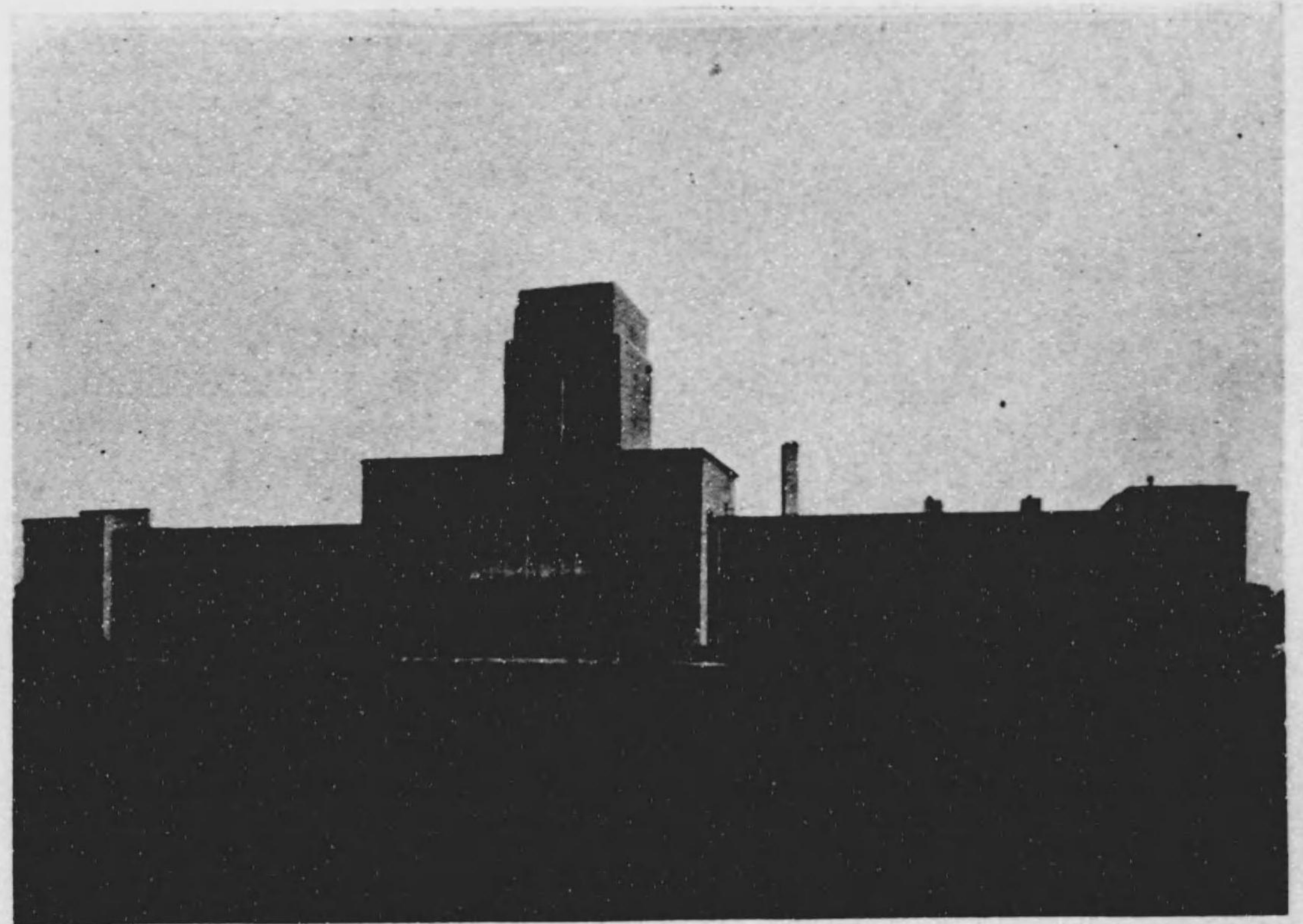




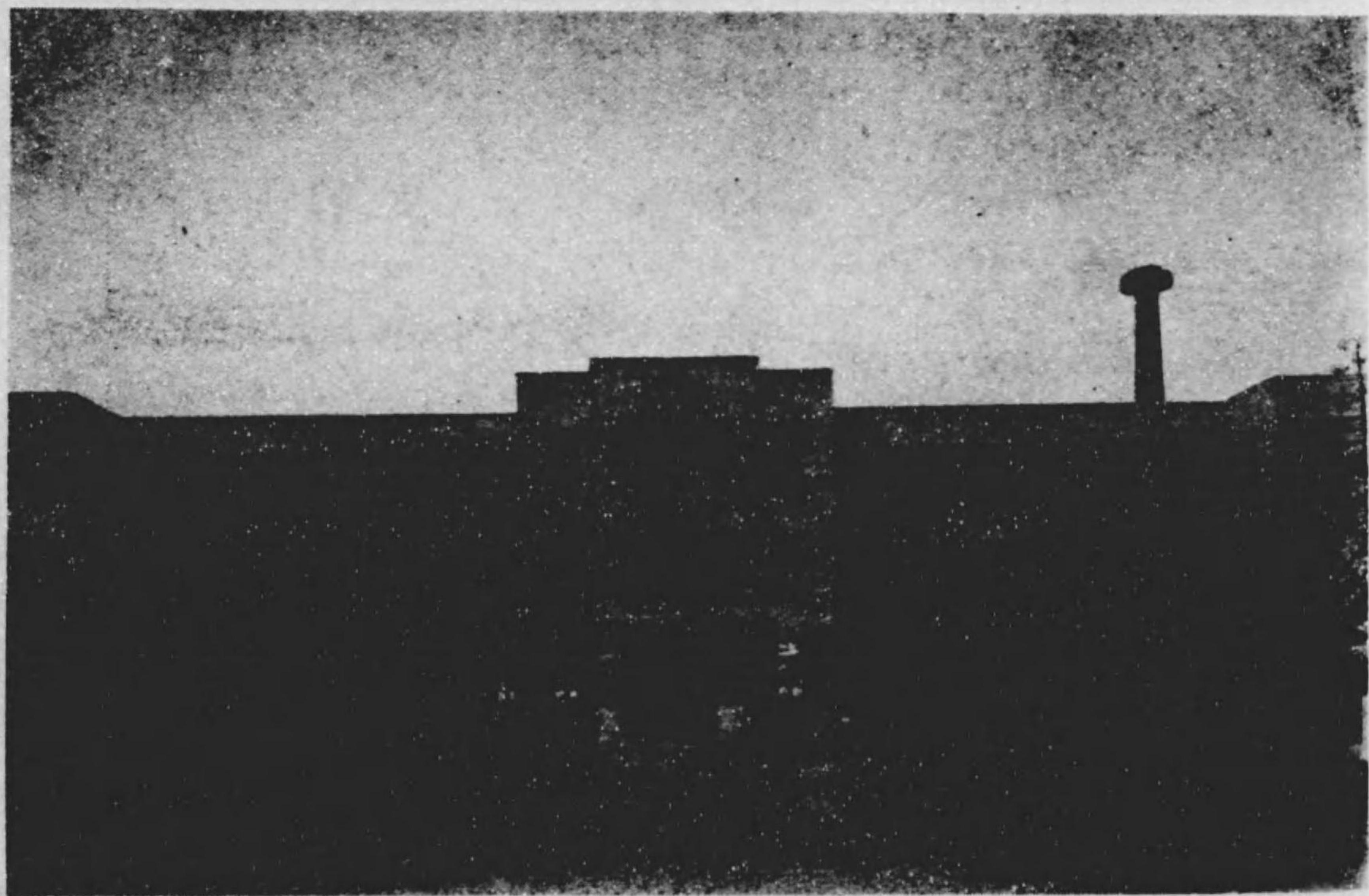
(上) 慶應義塾大學圖書館 (下) 大正大學



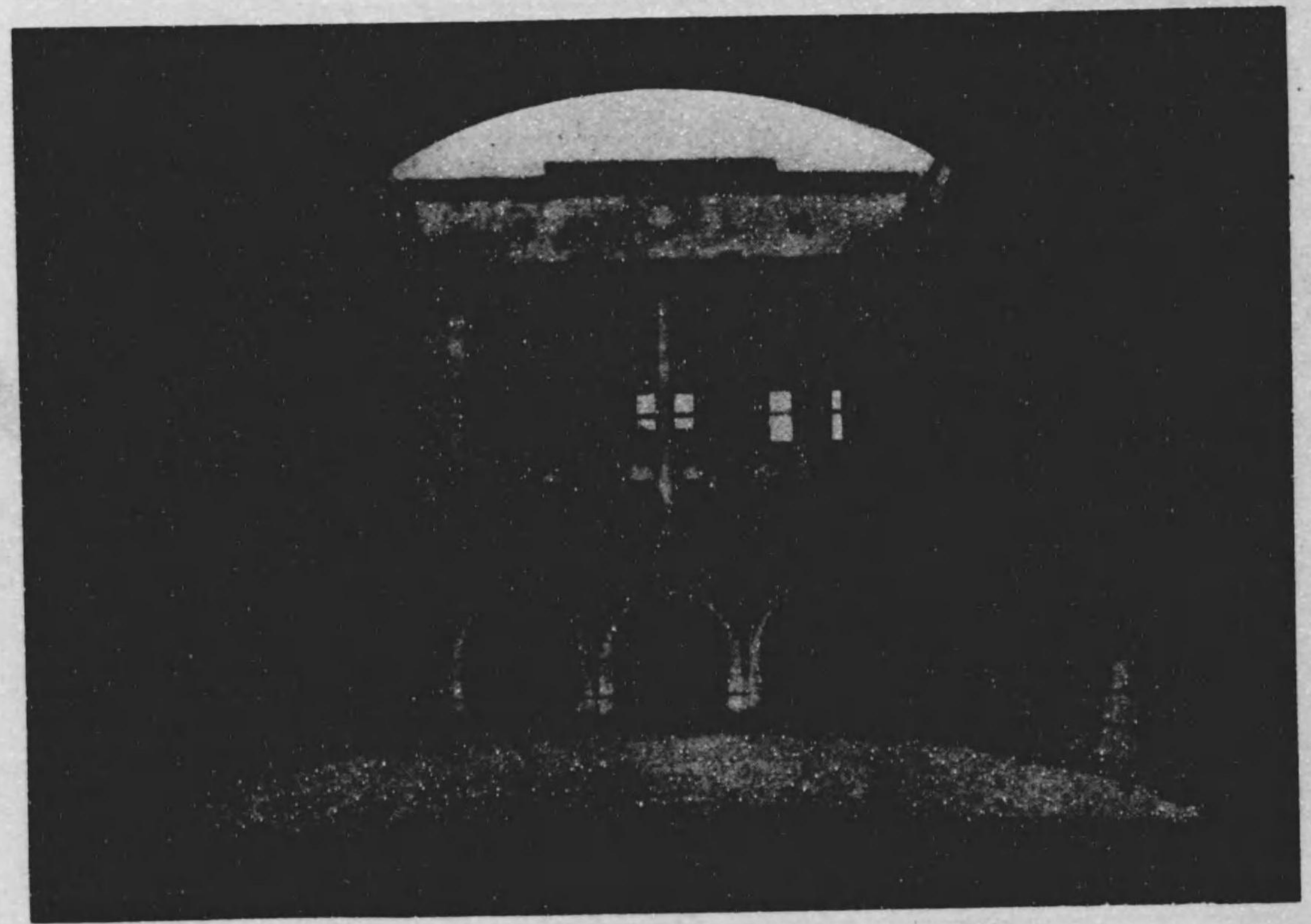
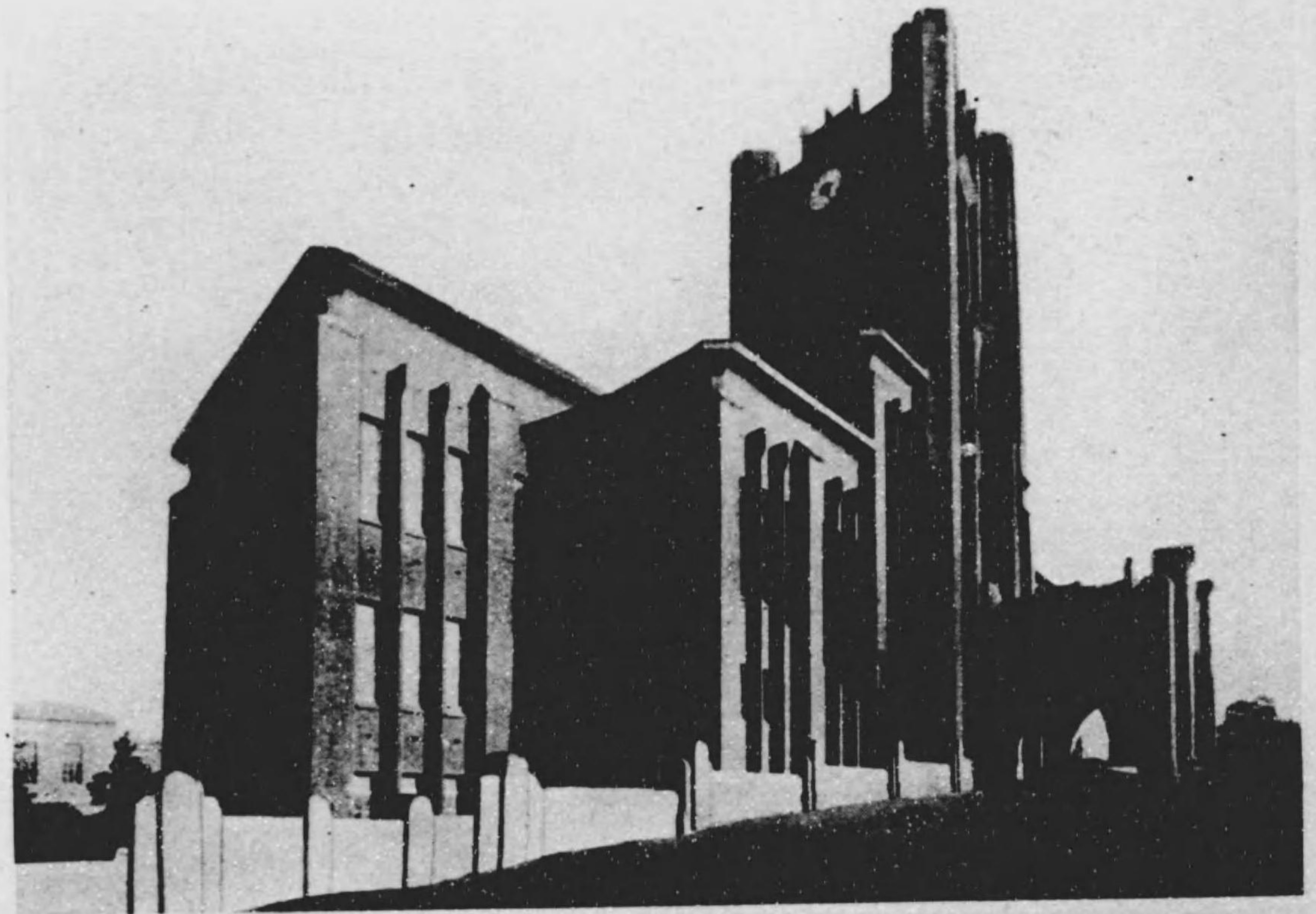
(上) 明治大學 (下) 中央大學



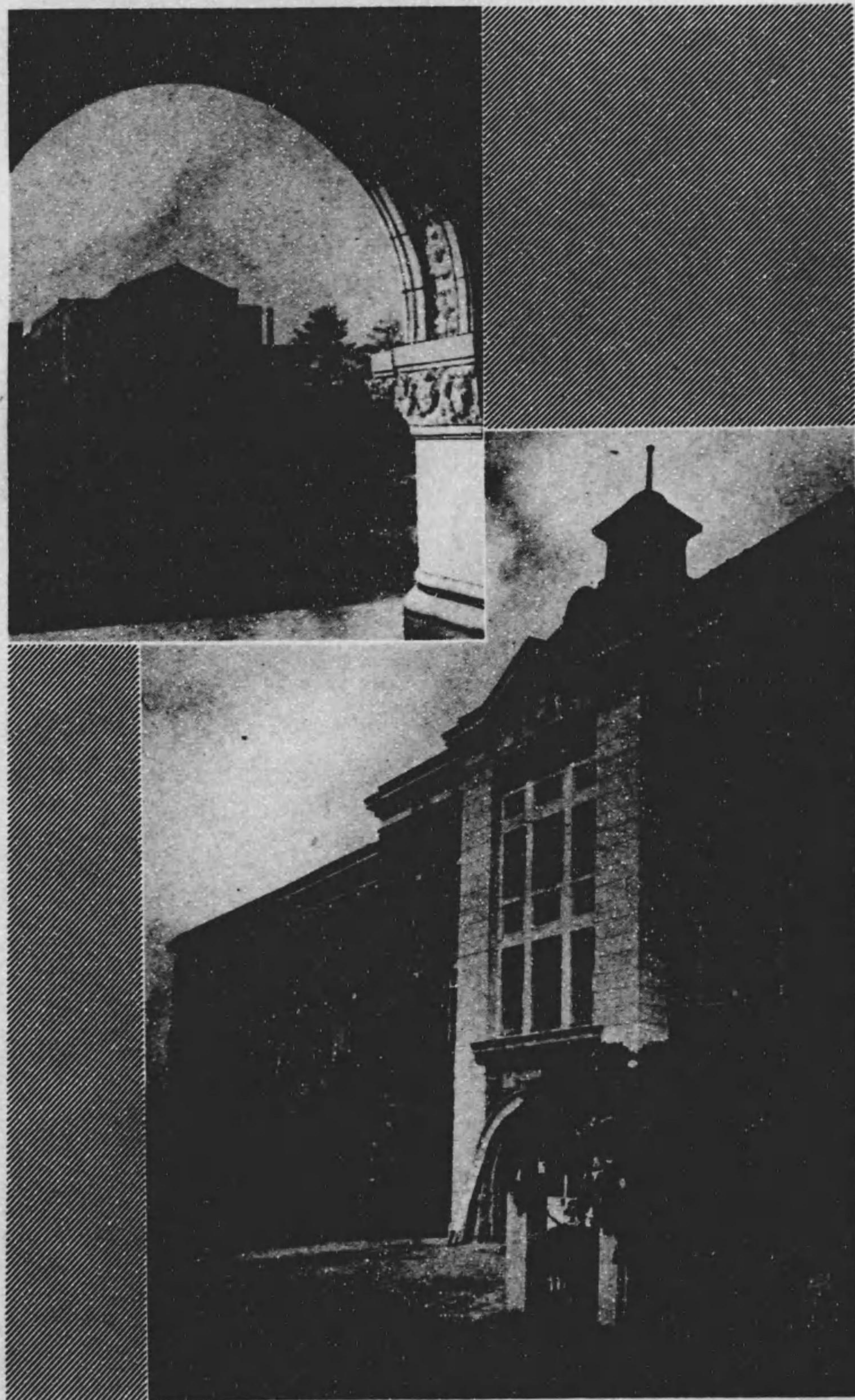
(上) 東京工業大學 (下) 立教大學



(上) 早稻田大學講堂 (下) 專修大學



(上) 東京帝國大學安田講堂 (下) 日本大學



(上) 東京商科大学 (下) 法政大学

はしがき

學問の獨立と、研究の自由が、その時代に攻勢を保つてゐる社會的風潮から歪曲される度に、「大學の顛落」が叫ばれて來た。今日もまたそれが叫ばれてゐる。そして、この眞理探究の法域を護る人々こそ、常に、否、永遠に教授と學生でなければならぬ。

大學の傳統と、精神もまた教授と、學生の母校愛によつて創造され、やがてそれが各々校風となつて行つゝある。

『大學教授評判記』は、大學の理論的指導者に対する世評の關知せぬ部分、その他、有名無名の教授達を俎上にのせて凡ゆる角度から見た學生諸氏の偽らざる報告書である。全篇を通じて、講壇と家庭に於ける教授の横顔から發散するユーモアの中に、師弟の密接な聯關を通して、今日の大學の相貌を覗くことが出来る。

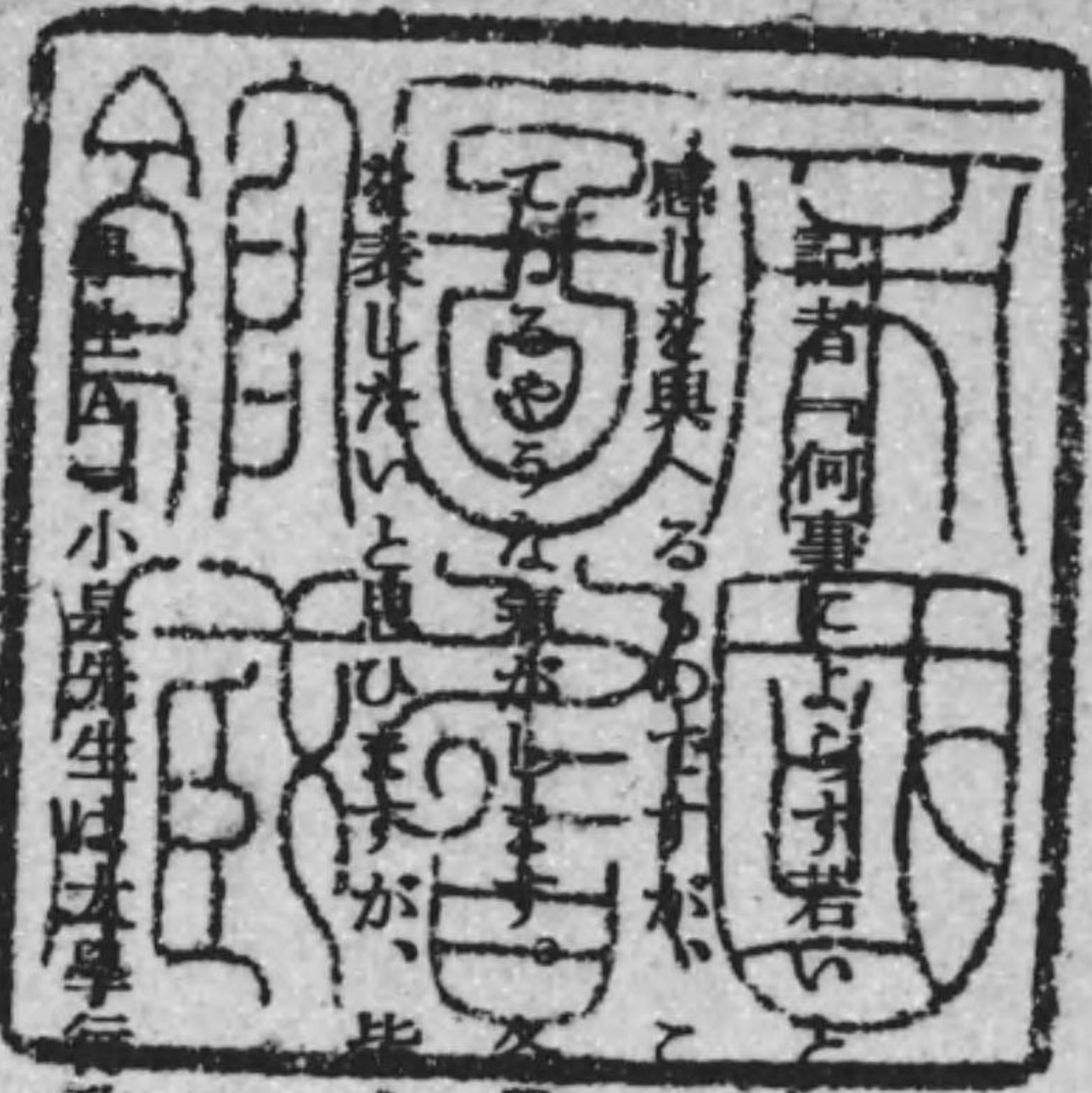
従つて本書は大學生並びにその先輩をして一層大學への認識を深からしめ、又將來大學に進まんとする學生及びその父兄には良き「大學の手引」となるものである

679-176

目次

慶應義塾大學	一
大正大學	三
東京工業大學	五
立教大學	九
明治大學	二七
中央大學	二七
東京帝國大學	二七
日本大學	二九
早稻田大學	三三
專修大學	三七
東京商科大學	三七
法政大學	三九

慶應義塾大學



記者「何事によらず若いといふことは、なんとなく新鮮、明朗、躍動する生命といったやうな感じを與へるものですが、この意味において若き總長を持つ慶應義塾は洋々たる前途にかゝやいへば、やうな事が出来ます。本學部の教授のプロフィールを語つて頂く前に、まづ小泉新總長に敬意を表したいと思ひますが、皆さんの忌憚ない御意見を拜聴したい」

すが、なんとしても人格的に全塾から尊敬されてゐますネ』

B「男振りがよくつて、妙にオツトリ構へてゐるあたりは、金持のお坊ちゃんといった應揚さがあつて……小泉さんが學生から慕はれてゐるのは、まあ一と口にいふと

塾タイプを代表してゐるといふ點ですね

學說に心服するといふよりも、たゞわけもなく先生が學生に與へる感觸に酔つ拂つて盲目的崇拜をしてるといつた方が當つてゐるかも知れない』

C「高橋（誠一郎）さんや三邊（金藏）さんは點が辛いが、先生のは甘いからなほ好きす。先生にしてみると學生なんてどうせ頭が悪くつてどうにも仕様がないといふ考へからするんだらう」
D「それでも研究会などではとデエいちめ方をするぞ。弟子を連れて来てチャン／＼突つ込むもんだから、たまつたもんぢやねえよ」

B「先生の芝居好きは有名だ。あれで堂々たる劇評も書くし、昔は高橋、三邊さんとも芝居をやつて大向ふをうならしたものださうだ。兎に角、博識多才だね。木曜會を今でもやつてゐるが、これはあらゆる方面に活動してゐる卒業生が来て、色々なことを話すのをヂツと聞いてゐて、すぐそれを講義の生きた材料に應用するんださうだ」

A「先生は塾では唯一の財閥だ。總長になるまでは、教授と圖書館長との

傳給四冊本十冊をつくり圖書館へ寄附し

てゐたのだから豪勢なもんさ」

C「結構な御身分だなア。」

E「だが教室では大森義太郎氏を、大森君などはねと高くをさまつて相手にせぬが、これは僕達にはせると少し問題だよ。」

記者「小泉さんはこれ位にして、經濟學部に話題の方向轉換と行きませう。部長の高橋誠一郎さんは？」

經濟部

學生F「専門は經濟學史だが、先生の歌麿の研究は有名だ。この研究でも博識になれるといはれてるほどで、すこぶるの劇通、先生の劇評と來たら専門家もタジ／＼といふことだね」

G「それに持つて生れた白晰聰明の男子、肺が弱ゆゑで獨歩義を標榜してゐるが、もうソロ／＼五十の聲を聞かうといふのにあの若さだ。終始一貫、洋服を着ないといふのが建前で、いつでも黒紋付、縞の着物、白足袋にフェルトといふいでたち、君見ずや先生のあの瀟洒たる姿といふ處さ。だから女子大ではいつも満員の盛況、とてもぢやねえがもてるさうだ」

H「講義はまた流麗な美文句調、途中ところ／＼ユーモアを入れて學生をトロリとさせるあたり、實にうまいもんだなア」

C「しかし終ひには

御自分もその名譽子に辭つて時間と空間

を超越してしまふんだから愉快さ』

E「それにまた博覽強記、經濟學に關する原書はどんなものでも初版を持つてゐて、何ページの何行目に何があるかを記憶してゐる。若し違つてゐると、それはミスプリントだといつた按配だから驚くよ』

I「だが點の辛いのは玉に瑾といふもんだ』

J「大いにこの點同感——とに角問題を二題出して兩方共書かねば落してしまふ、一旦書いたものを消したりすると絶対に受けぬ。試験場へ入つた途端に、お氣に召さぬ方は出て下さいと來るんだからやりきれぬ。それかといつて再試験に廻されると、もつと辛いと來てるんだからたまらねえなア』

H「小泉さんとは良いコントラストだ。小泉さんは外は固いが中はやはらかい。高橋さんは外がやはらかくて中味は固いといふが、けだし適評だ』

記者「氣賀さんの名も大分古いもんだが——』

B「あゝあの農業政策の勘重先生ですか？どうも先生の講義は眠くつていけねえ。

十年一日の如く發展の軌道上を低調

して、徒に學生をして惰眠を催さしめてゐるだけだ』

C「だがフイリボドサの浩澁な經濟政策を翻譯して當時の學界を賑はした華やかなる頃もあつたんだ』

D「先生の前で農民を百姓なぞとかりそめにもいつちや眼玉の飛出る程どやされるぞ。なぜつて君先生は大地主なんだよ』

E「これ即ち農業政策原理といふものかねえ』

F「試験だけは樂だね。統計によつて今年はどんな問題が出るかを豫見出来るからね』

G「しかし今年はどうした風の吹き廻しか、スツカリ模様替へをして面食はしたぢやないか。君だつてその被害者の一人だらう。先生も仲々罪なことをするよ』

H「試験で面食つた話をすれば、交通政策の増井幸雄先生のも、今年は山が外れたよ。僕などは大正七年からの統計をとつてみたが、先生が心境の變化をしたものだからベシヤンコさ』

I「先生の交通政策と來たら、——飛行機は汽車よりも早い。

汽車は軌道を走る故なりといふんだから

物すしや』

J「しかし日本交通學界の權威なんだぜ」

K「統計學の横山雅雄先生は、都々逸を書けば及第させるといふ専らのはさだ」

A「まさか、僕の知つてゐる範圍では出缺席はとて嚴重で、二度缺席するとどんなに成績がよくとも落第ださうだ。桑原々々さ。」

B「處で經營經濟學の向井鹿松先生はどうだね」

C「あまりパツとしないなア。ムツツリ屋で、學校へ來ても馬鹿に眠さうな顔をしてるよ」

D「産業の合理化を叫んだ時代には大した人氣だつた。今ちや純理論といふよりも街頭經濟學者といつた感じだ」

記者「奇行、篤行、風貌、愛妻家とか、またその他の點で人氣教授といへば？」

J「ありますとも、前經濟學部長で會計の三邊金藏先生はその尤なるものですよ。先生ほど重寶な人はゐない。」

經濟學史統計會計なんでも御座れといふ

のだから鬼に金棒です」

K「風采からいつても、またやること、なすことが親分だといふ感じだ。だが人が良くつて、

世話すきで、學生をて家へ連れつて御馳走をしたり、お嬢さんの世話なぞは自分の息子にでももらふやうに熱心。どんな小さな會合でも出席して、學生の面倒を見るなぞ、全く學生の良いお父つさんといつた工合だ」

A「全く學者といふよりも、善良な教育家といつた方がピッタリ當はまるやうだ」

B「先生は禁酒會の會長でありながら、酒を飲むんだからうれしいネ。それでも家では夫人がクリスマスチャンなものだから外で飲むんだ。とに角とらはれない大きいスケールの持主だ」

C「先生は土方をして苦學したといふ話しぢやないか」

D「そんなことはあるまい。あまり人相がパツとしないからさういふんだよ」

E「處が先生、この風采が禪して、あたり大學教授も」

殺人事件の被害者となつて刑事から逃げ

られたといふ面白いエピソードがあるんだ。例の英國宣教師のキャンベル夫妻が輕井澤で強盜に殺された時さ。先生が小泉、高橋兩氏と共に輕井澤に避暑に行つたが、どうも面白くないから伊香保に廻らうといふ譯で事件のあつた朝早く三人で出發した。當局の捜査神經に觸れたのはどうもあの三人組が怪しい。殊にその中にゐる人相の悪いのが怪しいといふので、各所に手が廻つた。

それとも知らず先生が楽しい旅を終へて邸へ歸ると、邸の周圍を印半天の男がウロウロしてゐて、先生の顔を見るや否や御用だと來たもんだ。面食つた先生が譯を聞くとキャンベル殺しの犯人に挙げられてゐたことがわかり、人面買濟も甚だしいとイキリ立つたが後の祭さ……これは先生の直話だから間違ひないだらう」

F「財政學の高城仙次郎先生はちよつと變り者で、ノントウさんの尊稱を奉つてるが、答案を見ないで良い點をくれるからすきさ」

G「あだ名で通る塾の三ケンと行かうぜ」

H「まづノムケンの野村兼太郎先生は將來を囑望されてる新人。砂をかむやうなああの商業史の講義を實に鮮かにやつてのける。出身は日本橋人形町。」

教師屋の菓子でそのまた夫人が薩瀧の娘さん

お菓子を持つてくと、おれの處は菓子屋だから果物でも持つて來いといふ譯で、代りに出されたお菓子が持參の菓子より立派だからテレるね」

I「保險論のソノケン事團乾治先生は、どもりで聞いちやをれんが濃厚、篤實は大いに買ふべしだ」

J「キンケン（NO勤儉）の金原賢之助先生は、堀江さんの後継者と目される若手の人氣教授、學生時代に書いた答案が一字一句も違はなかつたといふからスゲエもんだ。専門の貨幣、銀行では金箔付の賣れつ兒さ」

K「社會學の加田哲二事本名忠臣先生はそのスピード著述で有名だが、およそ糊と鉄だね。蔵書一萬數千冊、インフレ時代にドイツへ行つて買取めたんださうだ。先方の本屋へ行つてこの棚全部を賣つてくれと切り出して賣子を驚かしたなんざあ矢張り先生らしいね」

A「都市經濟論の奥井俊太郎先生は子福者で有名だ。いま三十幾つで七人か八人の子賣がある加田さんの計算によれば

五十歳までこの調子で行けば十九人半の

生産率があるだらうといふ。先生中々愛妾家だといふ評判だよ」

B「經濟地理の伊藤秀一先生は答案を書きさへすれば皆Aだ。奥さんはシャンだし、名文家だし、至れり盡くせりかね」

C「昨年歸朝した永田清先生は小泉さんの愛弟子で、次の經濟學部を背負つて立つたらう。若手の親分格で男子、今の夫人との結婚ロマンスは我等羨望の的さ」

D「藤林敬三先生ときたら、喧嘩早いので有名（？）だが人間味がある。ドイツ留學中に大きな毛唐の身體によち上つてなぐつたさうだ」

F「或る時、藤林さんが喧嘩してゐるので永田氏が仲に入つたがいきなり相手をなぐりつけたといふ話がある。處がまた永田氏が口論最中に飛入りの藤林さんが譯も聞かずに先方をグワンとのしちまつた事もある。永田さんは藤林氏の方が手が早いといふが藤林先生に聞くと反對で……」

G「一體に經濟の先生は仲がいい。あちら育ちの高城さんのほか全部三田つ兒のせゐもあるでせうが……」

續ひのユニホームで野球園を作つたり

氣の合ふことは傍の見る眼も羨ましい程だ。」

H「ベスト・メンバーは氣賀、加田兩教授が投手で、捕手が柳澤、一壘町田、二壘伊藤（秀一）、三壘奥井、遊撃永田、主將の金原さんや藤林さんが外野に頑張り、監督が園ケンさんだ。毎年神宮球場で本式にサイレンまで鳴らして、早慶戦や慶明戦に熱中しますが、二十幾つアルファ二で明治を一蹴した時の鼻息つたら……最も見物は多くて十人位、だから應援に行くといろ／＼御馳走して呉れます」

K「大森組、奥澤組、鶴沼組と住居もほと固まつて居ます。大ものだけは澁谷方面に散在してますけど……」

法 學 部

M「先生が共通ですから政治科も一緒にやりますが、先づ法學部長の西本辰之助先生の商法といへば法科の(鬼門)で、討死するもの數知れず。ところが去年あたりから俄然落第させなくなつた……然し今までは統計上豫想の出來た試験問題がまるつきり山の當らぬものになつちまつたので、よし悪しです」

N「カンニングは大抵知らん顔して、呉れます。先生の學說上の自信は素晴らしく強いです」

O「板倉卓造さんの政治學にも何千入の學生が泣かされて來たか知れませんが、一年で落第點、翌年また落とされ、いよ／＼三度目の正直だと菓子折持つて頼みに行つたら、今年もまたCをつけてやるぞ！と脅かされた學生があります」

P「それは板倉戰術を知らないからでイガグリ頭に肘の出た紺緋」

井田の下駄でも鳴らしてぶつきら梅に頼

みに行けば必ず上げて呉れるよ』

R「敷島を一日に六つか七つ、必づ教室の入口までくわへて来て、そこで踏み消してから内に入り、教室を一步出ると、トタンにまた火をつける。ならう事なら講義中も吸ひたいんでせうが、地位が地位とて御心中全くお察し申上げます』

S「政治科で板倉さんに生まれたら、うだつの上りつこはないから法科に變る者が多い。人氣はあまりないがこわもてです。法学部の長老だし、塾長候補にも上つたんですが、つまり切れ過ぎるんですね。林毅陸先生なども見やうによつてはその一ロボットといへませう。板倉閣の隠然たる底力は物すごいばかりだ。しかし小泉さんが塾長になつた時は、ちよつと小股をすくはれた形で、先生内心面白くなかつたらしかつた。』

P「年賀状の返事はキチンと呉れるし、就職の挨拶状などを出すと自筆でお祝の手紙をくれるし、キチャウメンなことこの上なしです。息子が經濟の本科三年に居ますが、顔つきもキチャウメンさも、ファイテングの強いところも、親父さんそっくりです』

M「内容はさておき林毅陸先生の講義口調は天下の名調子。甘つたるいといへば甘つたるいが、塾の生んだ第一流雄辯家たるに恥ぢない。先生が塾長をやめて惜しいと思ふのは、塾長とし

てのあの演説が聞けぬことです』

O「早慶戦に勝つて一番喜んだのは林さんだつた。この頃では交詢社理事長も大分板について來たし、三田切つてのゼントルマンです。

身軽になつたと自分ではいつてますが

塾長當時にくらべると、何となしにさびしさうな影が見えますね』

T「銀座などで逢つてお辭儀をすると、面食ふほど丁寧な挨拶を返して呉れる。散歩して、林さんに逢ふと、とても氣持がいいが、板倉さんに會ふと愛憎になる』

R「山崎又次郎教授は豪傑だ。美濃部、佐々木輩の憲法はと頭ごなしに呼び棄です。いはく……實證憲法學を説くのは天下におれ一人だ。たとへば京都から東京に向ふとして、おれの學説はとつくに東京へ着いて居る、美濃部などはまだ静岡あたりでうろついて居るんだ……といつた獨立自尊ぶり、勿論試験だつて先生の説を書かぬきや、一點だつて呉れやしません』

P「經濟の學生が受けに來ると君は點を取るために受けるんだらうと冗談いふほど自分でも點の甘いことを御存じです。いはゆる山崎憲法をたゝへれば大抵Aです。近頃白足袋で悠然と登校しますが

圖の分け方をや奇怪を極めたもので

普通七三といつてますが、先生のは九一と稱すべきものです。及川恒忠先生とは斷金の交はりを續けてます」

R「淺井清氏と小池隆一氏、法學部の人氣の雙壁です。淺井さんは助手時代に熱海へ旅行に行つたところ、板倉さんがタバコの火をつけろといつたとかで、おれは給仕ぢやないぞとばかりなぐりかゝつたといふ氣骨稜々の先生です。その點を買つて神様のやうにいふ學生もある代り一部に反感もあります。全般的には小池さんでせう」

S「淺井さんはその後體育會の理事になつたり、今では板倉閣の人です。ケルゼンの焼き直しと悪口をたゝかれますが、兎に角新カント派法理學では「權威として威張つてます」

N「經濟學部は塾出身の年長教授が二年交代で部長になるが、法學部には中堅以上に三田ッ兒が少い。小池、淺井、それから及川恒忠教授ぐらいですから、及川さんも經濟に居たら塾ッ兒の幅が利いたらうに、今は割合不遇です。楨先生より先に高等部長になる筈だつたのが、オジヤンになつたといふ事です」

N「御當人はしかし至つてほがらかで、支那研究に熱中しています。専門の支那法制史を初め文

學、美術まで至らざるなく

支那のことなら知らぬことはないと大層

の御自慢」

S「姪がミス・ニツボンになつた……及川さんの妹が福岡の後藤材木店に嫁入りし、その娘が後藤桂子さんですが、當選した時は大した喜びでした。及川さん自身も好男子ですが子供がな。い。そのせいかな新聞學會の會長をしてゐても學會の連中などすこぶる可愛がつて呉れます」

T「楨智雄教授にはオックスフォード出身が鼻の頭にぶら下つて居るだけそれだけ英國臭い」

U「しかし先生が監督に來ると、カンニングは絶對出來ぬし、登山家楨有恒氏を弟に、鹽水港の楨哲氏を兄に持ち、バックは申し分ないし、兎に角切れる男でせう。自分でも教授よりは理事として學内行政の仕事に主力をそゝいで居るらしう」

O「政治哲學の潮田江次教授はあまり人氣がないやうです。この間も教室に、失禮なことを白墨で落書してあつた。個人的にはすこぶるいゝ人ですが……」

N「塾の先生は概して金持ちで常識的で、社交がうまい。

美人の奥さんを持つてゐることも判つて押し

たやうだ。従つて優生學上から、嫌な人は多い。中でも占部百太郎先生（英國憲法史）のお嬢さんは、断然三田派のピオラだ。誰が獲得の光榮に浴するか？虎視タシ／＼たるあたり、自信たつぷりなるあり、大げさにいへば、三田山上ために動搖するほど下馬評亂れ飛んだものだつたが、東大出の工學士に呉れちまつたので占部先生のうらまれたことつたら……」

S「情緒の街、熱海は松泉閣の息子さん峰岸治三教授のお母さん孝行は、人をして思はずほりさせます。留守する時などは逢ふ友達毎に、お母さんをよろしく頼むと頭を下げるのでみんなしんみりさせられました」

M「東原の差障録をかけて、それでも本を眼の前三寸ぐらゐに持つて来る。見かけからして神経質で試験の時平生の講義の何個も出席者があつたと「講義にはサボツテおきなながら……」と、玉石混淆、普段

眞面目に出た者まで巻添へを食つて極度

に點が辛い。反對に講義の時と同じ位しか受けない時は、素晴らしく甘いです」

T「若手では永澤邦男、島田久告の兩先生、島田さんは川崎市の大地主のお坊つちやんで、通稱島久で有名な塾の出身、奥さんは中津湯の娘で、その兄さんが島久さんと同窓だつたよしみか

ら、引力の法則について支配されたといふことだが、天機漏らすべからずとばかり一向公開して呉れぬ」

O「二臺の自動車をはる／＼使つて、在學中の弟と一緒に毎朝三田まで乗りつける。その位だから月給百三十五圓也（今ではもう少し多いかも知れぬ）などはポケット・マネーみたいなもので、月給日には政治科の

先生三四人と銀座あたりを夜つびて呑み

廻る。朝の三時か四時になつてもその日の中に使つちまはないと氣が済まないなどは、何んともうらやましい限りです」

L「自宅を訪ねるといきなり「お茶か？酒か？」と聞いて、素晴らしいウキスキーなど御馳走してくれますよ」

N「ドイツから歸りたての永澤邦男さんは先生ぶりがまだ板につかないね。刑法といふよりも犯罪學が得意で、「日本犯罪學は我輩が大成して見せるんだ」と威張つてるが、ベルリンの警察組織や刑務所など、その方面の調査はかなりやつて來たといふ」

S「助教、助手級で光つて居るのは今泉光太郎氏、宮崎澄夫氏、峰村光郎氏といふ邊でせ

う。富崎さんは大阪で検事をして居て塾に抜かれたんですが、帝大などでも、官崎さんは出来る
と評判が高い』

U「聲樂ならステイチに立つ自信があるといふ峰村さんはさすがに名講義だ。

うす曇りの今日この頃うつら〜と聞い

て居るととてもいゝ気持ちになつちまふ。總じて法學部は頭株がお雇だし、地味な先生の多い中
に、峰村さんなどは最も明るい一人だといへませう』

T「外人ではローマ法のステルンベルヒ先生、法政大學の方でも色々話が出ると思ひますが、
ナチス反對者で講義は英語とドイツ語です。皆目わからんが、わからんなりに毎時間出て居ると
Aを呉れます。友達と丸善へ行つた時、きたない外人が居たので、乞食みたいだなアといつた
ら、こちらを向いた。見るとステルンベルヒさんだったので、あわを食つて逃げ出したんです
が、何かいはれやしないかと當分講義に出なかつたことがありましたつけ』

S「最後に部長の西本武之助博士には面白い話があつたんです。本科二年と三年の試験の時
です。先生が三十分ばかり遅れて來た。さア學生が納まらない。「吾々が五分でも遅刻したら試験
場へ入れないではありませんか、先生が遅れたのに試験を受ける譯には行きません」と頑張つた

ところ、試験抜きで商法はみんな合格點をもらつたんです』

文 學 部

V「學部長の川合貞一先生、何しろ老獪ですよ。何か頼みに行つた時など、ウム〜と機嫌よ
く聞いてゐるやうだからしめたと思ふが、さて後で考へると、結局何一つ聞き届けられなかつた
形になつてる。よくいへば大事を取る家康か、頼朝の亞流ですかネ』

W「ニツクネームはキンカン、これは頭の形の直觀的形容です。倫理、論理を教へて居るせ
か、どうも格式張る』

X「だが何といつても塾の哲學を代表する人で、ヴァントの眞弟子だといふのが御自慢、理論と
實踐の統一など痴人の夢さとはかり

マルキシズムを眞つ向から攻撃するので

文部省などの受けは減法いゝ』

Y「人に逢ふと必ず笑つてる。先生は愛嬌がいゝですなと賞めたら、「いや世間の奴がみんな馬
鹿に見えるんだよ」とうそをふいてゐたが論敵に對しても、たとへば「大森義太郎君なんかはこんな

風にいつてゐるが……」と、相手に取つて不足だといはんばかりの素振りを見せ、決して正面から取組まないのは學者としてどうかと思ふ』

V「あれでもランゲの唯物論を譯したり、ヴントを振りかざして華々しい武者振りを示した頃もあつたさうだ。五反田に居た當時は、毎日ステッキを振りながら歩いて通つたが、奥澤へ引込むと共に、トタンに妙に納まつちまつた』

Z「一體慶應つてところが、極右も極左も駄目なんで、上品に上品にと英國型……むしろ小泉型といひますか

川合さんも偉くなるに従つてその色に染

まつたんでせう。豫科における先生の潜勢力は物すごい』

W「法科一年に居る息子さんが、親父教育は映畫からと、邦樂座へ引つぱり出したところ、初めから終りまでグーグー駈をかいて居たので、とてもアカンと匙を投げたといふ』

X「例のマジョリー夫人との離婚ばなしで名高かつた西脇順三郎先生は新潟の大地主西脇財閥の息子、學生時代にギリシヤ語からラチン語までマスターし、小泉さんの答案をギリイイで書いたといふから、秀才には違ひないが、オックスフォードに留學して、初め經濟を専攻して居たが、

やがて言語學に轉向し、その中に今度はマジョリー夫人に轉向したのが實家へ知れて、送金を絶たれ、確か卒業せずに引揚げて來た筈です』

Y「洋行歸りらしいコマチャクレたところがない。スケールが大きくて博識だから、批判する前に先づ魅せられる。西脇ファンは相當多いし、いはゆる人氣はある方でせう』

W「内容よりも表現の方法論がやかましい。感ずるものは悲しみ、考へるものは笑ふなどといふ話しが

總て理論的構成を取らずに繪畫的構成だ

そのコツを呑み込まぬ中は先生の講義はわからない。キザだと評する人もあるが、次ぎ／＼と新しいものを見付けて來る天才で、チャーナリズムの波に乗るといふか政治家的手腕といふか、學内行政にも自信があるらしく戸川教授を文學部から追出したなどは、策士いさゝか策を弄し過ぎるとの非難が高い』

Y「文部省のパーマー氏に「日本人で正確な發音の出来るのは西脇順三郎と小野健人ぐらゐだ」とほめられてうれしくなり、銀座裏へ泳ぎ出して女給にチェロリを持って來いとRを捲き舌にして命じたところ、これが煙草のことだとは、どうしても女給に通じなかつたので、トタンに腐つ

て仕舞つた』

X「風貌からしてバタ臭いや』

T「わざとバタ臭くしてるのさ。マジヨリー夫人の感化もあつたらうし……あれは一體どちらから別れ話を持出したんだらう』

Z「見てた譯でないし、烏の雌雄は誰もわからんが、まづ先生の方からパイしたことにしておこう』

V「今ではその後に來た日本人の奥さんと、仲が良すぎて、澁谷區宇田川の私宅を訪問するのは、僕等大抵遠慮して居ます』

W「萬年ボーイとか、とつちやん小僧とかいつて、腕に年は取つても顔に年は取らぬ人があゝる。三田でそのサンプルを見たかつたら、英文學の畑功先生だ。安部磯雄、セン片山などとほぼ同期で小泉、三邊、高橋の歴々が塾で講義を聞いたんだから正に國寶展ものです。坊さんの息子ですが奥さんが九州中津の産で福澤先生の遠縁に當るとか。

ボールのやうにはずみさうな重頭をよく

動かして、座談は實にうまい。いゝ氣持ちで聞きほれて居ると、頃合を見計らつて背後を伺ふ

と、床の間に大書されてある軸にはく華客は招けど來らず、悪客は押せども歸らず』

X「齒を磨かぬの口がくさいので、なるべく離れて話を聞きます。案外ガツチリして二時間以上休むとAを呉れませんが、やかまし屋の割に親切なところもあるんでせう。家には多勢書生をおいてゐます』

Z「ゲーテ研究では木村謹二と並んで日本の權威といはれる茅野儀太郎氏……世間では茅野雅子女史の夫君といつた方が通りがいでですね。三田新聞に寄稿してもらはうと奥さんを訪ねると、先生自ら取次ぎに出て來て「私、書くやうに申しておきます」などとすこぶるおしとやか、ゲーテもフェミニストだったのか知ら』

T「門柱には警視廳巡查部長何某の表札だけが掛けてあり、「オヤ違つたかな」と玄關へ行く」と先生のが出て居る。随分臆病だと思ふが

その獨思想的にはラチカルで、ゲーテの

新しき再批判を試み、最近ではナチス反對の抗議文を送つたり、目ざましいところも見せる』

W「講義に出席せぬと點が悪いが、それを承知で二三人しか出ない、學者としてはみな尊敬してるんですが、かたすぎるのも良し悪しですね。先生の方でも現代の學生の心理を御存じかどうか

か？」

Z「折口信夫先生……オリクチ・シノブと読むので、グチと濁つては叱られる。なるほど萬葉には濁點はありませんね。源氏物語の長期講座は人気をあふつたし、古典研究では専門家の間に信望がある。歌壇では「潮音」の太田水穂さんの夫人、四賀光子さんなど、ちよい／＼來ます」

X「坊主頭で眼の下に薄い痣があり、みづから童貞と稱して居る。常識を繪に描いたやうな小泉信三型のそろつてる三田にあつては先づ變りもの筆頭、學生を可愛がつて短冊など書いてくれますが

さて手を出すと欲しければワンといへ……

など來る。席を蹴つて歸つて來ると、あとで大笑ひをしてゐる。焼イモが好物で、遊びに行つた學生は、早速イモ屋の使ひをいひつかる」

Y「稱して藝術的講義といふ。映畫のフラッシュバックの連続みたいに断片的だ。わかりませんといふと、僕にもわからんとすましてゐる。しかしはいはく、萬葉が講義や解釋でわかつてはたまりませんよ。感じて判るんですよ。感じて……と」

Z「去年の試験に一字一句違はぬ答案が非常にあつたとかで、今年は同じ机に二人並ぶことを

許さず、一人づゝ別々にかけさせた。國文科受難の年です。しかし國文はまだしもいゝ。他の文科……例へば史學科の生徒などが受けに來ると、頭から君達に古典の味が判つてたまるもんかと、いやもう散々で、點の辛いこと辛いこと」

V「英雄は離れて見るべし。ヨネ野口がなぜ世界的なんだか、講義を聞いて居るだけではわからんね」

W「聞くだけつて、實はほとんど聞かないぢやないか。先達て二時間出て來たが、休講また休講で、體でも悪いかと思へばピン／＼して居る。學校の受もいゝし、學生の人気も百パーセントなんだが……」

Y「こんな固苦しい教室はいやだと決して教壇に上らぬ。窓際へ椅子を持つて來て、親爺が子供に話すといふ口調だ。日本で藝術家に勳章をやらんのは怪しからん。どだい

日本の青空は藝術家の住めるほど澄んで

居ない。近々にまたおさらばをするんだといつて居る」

X「バーナード・ショウが來た時も對等に皮肉のいへたのは彼氏一人で、日本の野口として我國においときたい氣もする。日本人ばなれのした長髪に眼光是炯々として自らイーグル・アイと

稱するが聞いて見ると驚の眼「わしの眼」といふ洒落らしさ」

V「岩佐又兵衛も北齋も僕が紹介したんだ。春信が過少に評價されて居るのは、可哀さうだから、何とかしろなどいっているが、浮世繪の蒐集にかけてはさすがの高橋さんも一步を譲つて居る」

Z「講師ですが、ギリシヤ語の村松正俊さんはかつて「種まく人」で鳴らし、思想的にはラヂカルだ。マルクスにも正統派にも眞理はあるし、自分は理論的にはマルキシズムを認めるが

周囲の事情からそれに飛込む勇氣がない

だからかうやつて無色透明で居るんだと宣言をした。今流行の轉向は村松さんを開祖とすべきだと思ひます。講義はあまり人氣がありません」

S「勉強の邪魔になるとの理由で獨身を續けて居るのが、東洋史と社會學の松本信廣教授、太つちよのくせに登山家だから人は見かけによらぬ。榎先生と肝膽相照らし今年も南アルプスへ行くといつてます。誰か、白象の山登りと評したが適評だ」

U「ニックネームを蕎麥屋といひます。蕎麥屋の出前持が掌に乗せて持つて來ますね。あれと同じ格好で掌を肩口のところへ上向けにし、その上に出席簿を乗せて教室へ來る。童貞でもある

まいが、獨身生活のせむか中性といふ感じで

菊池實をもつと甘つたるくしたやうな女

みたいな聲です。おとなしいのはいゝが聲を聞くとぞつとする」

T「間崎萬里教授はカフスから毒舌を引張り出します。かういふ風に袖口を引っぱり始めると、悪口毒舌が口をついて飛び出す。悪口にかけては故木堂だつて、おれの敵ではあるまいと自惚れてゐます。永くイガグリ主義だつたが洋行から歸ると綺麗に分けて居た」

V「割りに闊のない實力一點張の策動家型で、史學科は間崎、松本のコンビでガツチリと押へて居る。未來の學部長との聲もあるが敬遠する人が多い。それが一度個人的に自宅をおとづれると打つて變つて親切なお父さんといふ感じですよ」

Z「何しろ高知縣で何番目とかの大地主だし

澁谷の家の如き豪壯な書齋には文字通り

萬卷の書が詰つて居る。訪ねて行くと「オイ、フランスのブドウ酒を出して來い」といふ調子です」

W「兎に角大學教授つて商賣は、島田久吉先生みたいに、給料はその晩に全部呑んぢまふほど

の藝當が出来なければ勤まらない。將來は百萬長者の第二世か、大地主の養子ばかりになつちまふだらう。いはんや三田においてをやで、僕なんか逆立ちしたつて先生商賣は出来つこない」

T「日吉臺の豫科はつひに斷髮令が出ましたね。その發頭人、日吉豫科主任の小林澄兄さんは幼稚舎主任、普通部主任とトン／＼拍子に來た人、將來の豫科主任(豫科全體の)は間違ひなし。政治家タイプの策動家でないと、今の塾では出世出来ないから未來の文學部長は案外小林さんあたりぢやないでせうか」

X「ダルトン・プランを輸入し、勞作教育を唱へ、將來の塾スピリットもこの邊から出發するかも知れぬ。しかし講義(教育論)は本を読むだけで一向面白くない」

S「庭球部長井汲清治教授は自分でもラケットを握る。代々の塾長は庭球部長から出て居るかちやがて先生も……といつたらとても喜んだです」

T「色の白い久米正雄といふやうな微笑笑面で

スキーと山登りが好きで生粋の江戸っ子

できま舌の早口、氣に入らぬと馬鹿！小僧！とおよそフランス文學とは縁の遠いタンカを切る。鼻つばしの強いこと無類だが、逃げ足も滅法早い。五月の鯉の吹流し、江戸っ子の面目躍如で

す」

V「紅茶をガブ／＼と吞みます。カップ・オブ・ティではなくてポットル・オブ・ティです」

W「井汲さんとはいゝ對照の實力派は、柔道二段島原逸三先生です。生徒をちよつとなくつたつもりが力が入り過ぎて負傷させ、二ヶ月ばかり謹慎したり、澁谷では大工さんと立廻りをやり、アメリカでは巡査と取つ組合ひ、船の中でも武勇傳を演じた。某先生を講壇から引すり下ろしたこともある。大河内の丹下左膳ではないが、彼の行くところ忽ちにして起る殺陣の大渦巻……」

X「熱血的の禿頭で同じく光輝燦爛たる山田耕作氏とは中學で同期だつたのも面白い。若かりし頃は美少年の誇高く、首尾よく宮下牧師の

美しき令嬢を獲得したのは目出度かつた

が島原さんは無類の呑んべいだ。醉眼朦朧と歸館に及べばそこへおすわりなさいとばかり(汝悔いあらためよアーメン)と奥さんのお説教が始まる」

Y「それで宗教學、哲學を教へるんだからほがらかだ。直木三十五の文章みたいにポツリ／＼とど雨れ式口調で、最後は必ず「判つたでしよ、哲學つてつまりそんなものですよ」とむすぶ。十年一日の如き茶色の洋服です」

Z「佛文の後藤末雄教授は、かつて華やかなりし新思潮の實權を握り、谷崎潤一郎の原稿をボツにした思出を語る。谷崎といへば、その「青春物語」に先生のことが出て来るが、あの頃はどろでした？と水を向けたら、授業をやめて、追憶の涙を浮かべて一時間中その話ばかり。老いたるロマンチストはさびしさうでした」

T「助手には厨川白村の息子……厨川文夫氏が居ます、三田ツ見で西脇さんの弟子ですが、親父のやうな才人肌ではなく、チミな研究室タイプ。將來は期待されて居ます」

S「英國人といへば、紳士の典型のやうに思ふでせうがジー・エッチ・バーバンク講師と來たら、オックスフォード出身の詩人にも似合はず教壇に腰かけ、泥靴を机に乗せる

先生は行儀が悪いとすねといったところ

慶應へ來てから悪くなつたんだ。郷に入れば郷に従へといふことがあるとの返事に顔負けしたです。海外へのレポート、「英語青年」への執筆、それらの方面では有名です」

V「故元帥の御曹子、大山柏公爵もやつて來ます。考古學の資料豊富は驚くべきですが、あれは中隊長時代（今は豫備大尉）演習に行つては兵隊に掘らせたんだらうともいはれています」

W「その他では明治文壇のベテラン戸川秋骨氏、文學的ワイ談の高橋龍雄教授、家庭では奥さ

ん専制との評判ある板垣鷹穂先生、最後に今賣出しの友松圓諦先生……」

X「友松先生は主に豫科ですが、例の放送以來日の出の名聲で、公開講座などは女學生ががい、學外の人氣も物すごいほどです。在來の宗教學者としては型破りの精力で迫力満點、隱棲的なところが少しもなく、眞つ向から人生問題にぶつかつて行く。見方によつてはバーバルにまで迫力的なところがあの人氣を博したゆゑんでせう」

大
正
大
學

A 「早い話が友松圓諦の名を知つて居ながら大正大學を知らんヤツ……御免なさい、知らぬお方がある。佛教復興といはれる以上、東京で大正、立正、駒澤、智山、京都で大谷、龍谷あるひは高野山などの宗門大學がもつと世間的になつていゝと思ふ。去年も音楽部が演奏旅行したら、大正大學なんて學校があるか、僞學生だらうといふので田舎の警察に……、やつとその町の住職に證明してもらつたのですが、先生にはなか／＼大した連中が居ます」

C 「初め淨土宗學校といふのが芝公園に出來、明治卅七年淨土宗大學となり、同四十年には誰が考へたか

宗教大學といふ大袈裟な名前に

なりました。これが新義眞言宗豊山派の豊山大學「音羽護國寺境内に明治廿年創立」天台宗大學「上野東叡山境内」と三校合併して大正大學となり、巢鴨の現校舎で創立式をあげたのが大正十五年十一月です。もう二ヶ月もおくれたら昭和大學となつて居たでせう」

B 「三派合同だから先生が無暗に多い。生徒六人に先生一人の割合、採算は勿論とれないが、宗

門から補助がある。経費としての補助金は今年で打切りとなつたが、矢張り足りないところは宗門が負擔する。大森亮順、壬生雄舜、富田敦純、椎尾辨匡、渡邊海旭、權田雷斧、石原惠忍等、教界の大立物が集まつて設立した當時の意氣込みと來たら大したもの、佛教各派の聯合大學にしよう、そのためには學長も宗派の色彩がない人がよからうと初代學長に故澤柳政太郎博士を持つて來たのです」

D「澤柳さんが死んで渡邊海旭氏が事務取扱をやつたが結局第三者に適任がないので豊山派の長老權田雷斧さんが學長になり、何時の間にか

三派が順繰りに二年交代で

學長を出すといふ慣習が出來、三代望月信享（淨土）四代福田堯顯（天台）五代目が今の加藤精神氏（豊山）です」

E「加藤學長は唯識の學者として法隆寺の佐伯定胤管長と共に我國の兩權威權田雷斧師なきあと、眞言の第一人者でせう。權田さんは加藤學長を愛兒のやうにほめ上げた揚句「加藤は外國語が出來ぬので博士になれぬ、惜むべき奴だ」といつて居たが、加藤さんがドイツ語なんかしゃべつたら、かへつて變なもんぢやないかなア」

B「野猪だといはれ、ブルドッグといふ人もあるね。半生を喧嘩で暮らして來た。辻善之助博士が「弘法は傳教より野心的だ」といつたのに忽ち食らひつき、専門紙上で十回か論争を重ねたが、結局加藤さんが主張したなりで打切りになつた。自分では勝つた積りでゐるがさうしておかぬときがない弘法第一主義で、その中でも豊山派第一で

豊山派中でも自分の説が一番

エライと信じてゐる。前管長の肩書もあり、豊山派にいざこざが起ればまア〜と押へるべき宿老でありながら、自ら一方の將としてのべつ喧嘩の先頭に立つてゐる」

A「寫眞がそのまま漫畫です。何かに漫畫がつてゐたが、漫畫の方がよほどシヤンだ。この頃モーニングが多少イタについて來た……いや、永久につくま〜」

F「子供は佛教研究室にゐますが、その嫁さんが淺草の觀音さまの大森亮順師の姪です。嫁を連れてデパートを見て歩いてるところなどはいゝお爺さんで、給仕や小使に逢つても學長の方からおじぎします。學生にあつてもその通り、野猪も私生活では人間味たつぷりです」

E「望月前學長も小使におじぎしたね」

G「加藤さんのくせは首を振ると、あのチヨ〜歩きだらう。家ではチヤン〜コなど着て

回くなつてゐるが

教壇に立つと腹をたゞいて

お前等は佛教が判らんのだから……と、喧嘩の話、それも人を負かした話しばかり」

H「居眠り學生を見ると「エライ人になれんぞ」ヨダレなど垂らして何ちや」と頭をこつ／＼たゞく。前の晩お通夜なんかやつて来て、コクリ／＼する學生は相當あるです」

G「學校の歸りに商賣があると、コロモに珠數を爪ぐりながら、學校へ来る學生も多い。教練の時、和服に袴なんかだと怒鳴られるが、コロモか改良僧衣なら叱られません。面白いのは烏打帽嚴禁で、専門部はソフトや背廣もいかん。異彩を放つのは卒業式で、全學生が般若心經の合唱です」

D「講堂正面に、阿彌陀佛だけ、大日如來だけ大きな座像があります。印の結び方が珍しいので、國寶にも準すべき貴重品といはれてますが、毎週月曜十時から、この前で五百餘の學生が菩薩經を讀誦します。當番の先生が導師になり、校内にゐる者は必ず出なければならぬ。先生も洋服、生徒も洋服で、ゴーンと鐘が鳴ると合掌します。どんなモダン・ボーイもこの時だけは神妙です」

配属將校も暫く居る中にお經

を讀むやうになります」

G「宗門外の大學から見れば異色でせうが、大正大學としての校風はまだ完成されてない。三派の彩色がバラ／＼の處があるし、學生としても過渡期の悩みがあるのでせう。たとへば友松氏の講義を聞いて、來世の極樂否定に共鳴しても、家へ歸ればお寺の若様でお有難屋の善爺善婆に彌陀の淨土を説教せねばならない。髪ものばした學生とクリ／＼と半々ですし、本當に佛教原理研究の學園となり、三派一致して統一的な學風を持つのはこれからの事です」

A「學部は宗教學、佛教學、史學、哲學、國文、英文、支那史と別れ佛教學に眞言、天台、淨土などありますが、何といつても中心は宗教、佛教でせう。西洋宗教學をやるのが宗教學で、佛教學は主として東洋、いふまでもなく佛教中心です。佛教學の方はそれだけ組織的でないし、宗教學の方をやると世界中の宗教を知つたやうな氣持になる。もつとも

佛教學だからとて

西洋のことをやらぬ譯ではなく主に方法論の違いです」

G「佛教學は主任の椎尾辨匡博士學部長の矢吹慶輝博士、前學長の望月信享博士、この三人が

大物ですし、比較して見るとすこぶる面白い、椎尾さんは宗教運動家、望月さんは字引博士、矢吹さんは外交家だ」

B「望月先生は二時間授業の途中でキチンと十分間休む。その代り始まるのも終るのもベルと一緒に機械みたい。椎尾先生は中入りもなし、ベルが鳴つてもまだ続ける。矢吹先生に至つてはまるつきりルーズで……」

H「椎尾さんは記憶力の人で原稿を持つて講義した事がない。眼を半眼に天井をにらみつゝたう／＼とやり出す。それがそのまま名文です。文部省から視學が来て、そんな無責任な講義は困るといつたら「何が無責任だ、今日の講義を今一度やつてやるからノートを見て居給へ」と學生のノートを借りて來させ

自分は何も見ない

でその通り再誦したので視學が感心してあきれたさうです」

D「學生時代(帝大宗教科)に百二十點取り、口頭試験には教授の姉崎博士と朝の十時から午後九時まで「法」の解釋で激論を続け……椎尾さんは首席だったから一番に呼ばれたんですが、二番以下はそのため、試験が翌日に廻されてしまった。グルマの研究——法を實踐哲學と見る、法

を「生きる」と解釋するのが椎尾さんの獨創で、西洋哲學殊にギリシヤ哲學など二千五百年前に佛敎が発見した事を後れてしかも觀念的に繰返してゐるに過ぎぬ——椎尾さんにかゝつては佛敎が至上で最高で最大です……」

E「農村問題や、この頃は日本精神運動まで研究し、法は綜合運動なら

停止すべからず

と辨證法もどきで見得を切る。しかし文章は口ほどぢやないね」

F「議會では速記者を困らせ、學校へ來ては學生泣かせのスピードです」

B「先生早すぎます—といひたいんだが、それをいふ暇がないんだからなア。學生時代二十一日間徹夜の大記録を持つてるし、今も三四時間しか寝ない。いそがし過ぎてゴシップを撤く暇がないらしい。電車の中では無論、講堂でも人が講演して居る間は眠つて居る」

A「名古屋の名利建中寺の住職は今のところ名義だけです」

C「貧乏してるのも確かですが、あの講演料や原稿料はどこへ流れて行くのか。女でなし、酒でなし、學生におごるでなし、どこへどう消えたのか、大正大學七不思議の一です」

D「日大の座談會の時、ゴシップが少し間違つて居ましたね

恩師の令嬢に失禮

したといふが本當は先輩の妹……はつきりいへば故渡邊海旭先生の妹さんです。渡邊、椎尾、それから今一人大島泰信（大正大學教授）の三人は親友で、海旭さんはちよつと先輩が大島、椎尾は一高、帝大とズツと同級で、海旭氏の妹さんを争ふ段になつちまつて、海旭さんが二人に角力を取つて見ろといつた。よし來たと椎尾さんが飛出して、見事に負けて、發奮して博士になつたといふのは本當ですが、この話に三人の性格——すこぶる簡単に話をつけて、しかもこの後親交を續けてゐる三人の性格がよく出て居ます」

F「椎尾さんはやがて學長になる人だが、望月信享博士は前學長で、そして淨土宗のエンサイクロペディア、または群書類従です。お經の文句で出典の判らぬのを聞きに行くと、うむあれかど何百卷の大藏經の中からひよいと抜き出して呉れる。有名な望月佛教辭典の編纂者だが、先生自身の方が字引だ。漢譯第一主義で、時に思ひ出したやうに英語を書くとは大抵スベルを間違へる。佛教學者に

語學は苦手のやう

ですね。もつとも椎尾さん、友松さんなど例外もあるが……」

G「講演を頼まれると、私には信仰問題は判りませんからと一應断つて、まア佛教史の話でもしませうかと出て來る。子分が澤山あつて、自分の編纂所にゴロ／＼置いてある」

H「指方立相——例の友松氏が悪戦苦闘してゐる西方淨土があるかないかの問題ですね。あれは望月さんの方が先輩で、一時大問題を起した事がある。當らずさはらずに切り抜けたが淨土宗では可なり騒いだ。今も友松氏にはその意味で同情してゐるらしい」

E「田舎の爺さんが初めて背廣を着ましたといふ格好、井上哲次郎老博士に似てゐるが、あんなに垢抜けしてないし、夏でも冬でもステッキ抱へて電車で來る」

B「海旭氏とは宗教上對立した事があり、今でも「渡邊君はねエ、才子だつたけど學者ぢやないよ」なんていふ。そのくせ自分は

學生の人氣を氣に

する。短氣で直ぐ怒鳴りつけるがなか／＼面倒は見ます」

C「そこへ行くと矢吹さんはヌラリクラリと要領のよいこと天下一品、友松氏が賣出す以前、若い者の間に矢吹時代を作つた事もある」

A「姉崎博士の忠實な門下で、若し帝大助教授を續けて居たら、まだ五十五歳だし、姉崎氏の

後を襲つたに違ひないのだが、八方美人が反つていけない」

D「宗門人にはあるが寺は持つて居ません。鎌倉のある寺の住職に推薦された時、法衣がありませんから……とことわつたし、一度も法衣を着たことがありません。先夫人の操さんは至れり盡くせりの良妻でしたが、某著書が出版される二三日前に死んだ。そこで先生はこの巻頭に長々と追憶の辭を書いた事があります」

E「再婚をすゝめられた時の言葉にいはく、女教員上りと再婚者は絶対にいやだ。もらふにしても

長女が嫁に行く迄

は待つて呉れ……といふ譯でしたが、最近やつと娘さんが嫁に行つた。ところが後妻は先妻の延長ならざるべからずのスローガンで、今度の奥さんも同じ操といふ名前に代へるし、何から何まで同じにしないと承知しない」

F「昔からの宗乗學、宗門内だけの陳腐な研究を、科學的な今日の宗教學にまで引上げた功績は椎尾辨匡、宇井伯壽氏等と共に矢吹さんもその一人です」

A「萩原雲來先生は大した存在です。サンスクリットやパリ語：例の昔のインドの言葉で：我

國の第一人者で梵語で完全に會話の出来る唯一の人です。隠れた世界的の大學者です。木村月紀さんもパリ語なら話せるがサンスクリットでは萩原さんの獨壇場。マハバースの講義は世界中ほかで聞く事が出来ない。帝大教授連さへ聞きに來ます」

C「マハバースつてのは、世界で誰も知らない非常に

むずかしいお経

です。さういふ原典ばかり研究してゐるせいか風采もすこぶる原典的で、生きてゐる枯木、米粒のやうな男、肉の落ちたサンマ、荒木大將と尾崎行雄さんを二で割つて去勢したやうな顔、いくらいつても同じですが、ひげだけはヒンデンブルグみたいですよ。オーバーを着てるんでなく、オーバーが先生をくるんで居るんですよ」

B「ドイツでは渡邊海旭さんと一緒だつたから相當飲んだと思ふが、今は温厚篤實な仙人、海旭さんといへば面白い事がある。ドイツビールを浴びる程呑み歩いて、さて歸朝したら禁酒運動の親玉になつた。誰彼れの別なく禁酒を奨め廻つた揚句、これも先頃死んだ増上寺の道重信教大僧正に「私は禁酒しました。御前さまもおやめになつた方が……」といつたものです。すると天衣無縫の道重さん、ニコリ笑つて「それは結構です、序でに飯を食ふのもおやめになつたら……」

…」で、流石の海旭先生も二の句がつけなかつたといふ』

D「大震災の時萩原さんは、苦心して集めた大事な原典を投げ出して、きたない本尊佛を背負つて逃げた。海旭さんは外国で集めた稀観本を打ち捨て、帝大図書館から借りて居たやつだけを持出した。學者美談の雙璧とうたはれたものです」

G「萩原さんは小さいが子供はみな大きい。奥さんがずば抜けてデカイからです。

畫の方がお嬢様

するでせう。その奥さんにも子供達にも、まるで家庭生活は顧みない。寝てもさめても梵語ばかり。萩原さんマイナス梵語イコール零で梵和辭典を作つたり、自分も梵語が戀人だといつてます」

A「チット天井の一角を見つめて居るから、何してるんです？と聞くと、いや、あのクモの巢は一體何時ごろからあるのだらうか……と」

E「萩原仙人に對して福田さんには尼さんみたいだ、改良服に短靴に頭巾、決してソフトをかぶりません。謙遜そのもので、斷じて字を書かぬ。若し書いたものがあれば相當な値段でせう。天台の權威で、家では氣むづかしいといふが、人に逢へばどうして〜」

F「前學長ですが、就任の時にどうしてもウンといはない。海旭さんが使者に立つて、實際の仕事は全部引受けるから、まあロボット……そんな言葉は使はなかつたらうが、そんな次第で漸く承諾した。その就任の挨拶といふのがまた（みなさまのおたすけによりまして……みなさんどうぞおかせを引かないやうに……）と、あれはトーカーに撮つておきたかつたね」

A「今の中にトーカーしておきたいのが大正には澤山居る。殊に天台に多いね。淺草寺執事、長鹽入亮先生なんかもさうだし」

B「福田さんの家へ行くと

まアまアまアと

上座へ据えられる。女の客が來ると障子をあげ放して、寒い風にクシ、ミしながら話す。宣心といふか、増上寺の道重さんと似たところがある」

C「福田さんは坊さんらしい先生だが、これと全く正反對の壯士肌の先生に髯の河口慧海師が居ます。西藏通はいふだけ野暮、豪快無比で佛誕二千五百年説など、六年早いと最後まで自説を曲げなかつた。ある講演會で（先生は前後三回西藏に渡られ……）と高楠順次郎氏が紹介したら、やをら登壇した慧海先生、今の紹介は違つてゐるから訂正します。私は六回ですとやつた。

行くのが三度、歸るのが三度、入國も命がけだが、國境を出るのも大冒険だといふ譯です」

D「西藏から持つて来た三角帽子で豪放そのもの、講義、「先生辭典にはかう出てゐますが……」といふと、そんな字引は直ぐ訂正しておけ！」

F「西藏佛教といふのが、これがまたエロチック極まる講義でして、それを隣の教室まで聞えるやうな聲を張上げるのだからドアの外には小使や給仕が鈴生りになる」

A「先生が話すところでもグロになる。人を食つたといふより人を呑んだ先生、野人といふか變人といふか、兎に角他の學校には類がないでせう」

G「お次は宗教學科、大島泰信さんが主任で眞野正順、友松圓諦、加藤玄智、講師では石橋智信、宇野圓空といふ顔觸れ」

H「大島さんは椎尾先生のところで話題に出しましたが、オイ椎尾！と呼びすてに出来る唯一の人、野心のない人格者で、悪くいへば面倒くさがり。色んな事を知つてゐるが

自分から話さぬ

こつちがだまつてれば何時間でもだまつてる。海旭さんちよつと似てゐる、物をいはぬ海旭、だまり海旭」

B「海旭さんがドモリながらモリ／＼しやべると、大島さんはだまつて聞いて居た。同姓のよしみか増上寺現貫首大島徹水僧正と仲がよいが二人の對談は天下の奇觀、いや聞きものです。徹水さんが「あーのーなア」といふと五分間ぐらゐたつて、泰信さんが「うーむ」といふ。「それーでーなア」といつてる中に十五分位たつちまふ。原稿紙一枚分の會話ならザット三時間……」

H「平凡な偉人、縁の下の力持ち、各宗對立の大正に取つては柱石ともいへる。大震災で論文の材料を焼いちやつて、氣抜けしたみたいになつて、それから腹が出来たさうです。海旭氏の妹……泰信夫人が兄貴以上のシッカリ者ですから、女房天下は當然の結論でせう」

D「兄貴といへば眞野正順先生（宗教哲學）は我等の兄貴です。銀座の紳士、英國型ゼントルマン、遊ぶ事にかけては學園隨一、大抵の學生も三舍を避けます。カフェーへ行くとテーブルへ直ぐ足を乗せる。研究室でも靴の方が頭より高い。「オイ、今日は何人だい？」と研究室でコーヒーをおこつて呉れるのは先生一人です」

A「詩人肌だからまとまつて居ない。原稿を書くとき、頭の方は先走つて筆がまどろつこしいと、あまり書かない。書きかけても面倒くさくなるんだらう。」

増上寺の藝術部

など、情熱家で才人の面影をよく現してゐる」

C「眞理運動でも友松君とか友松とか呼べる身分、芝中學で、友松氏より一二年先輩だった。中學の上級生つてやつはつくづく恐ろしさが身にしみてるからね」

D「學校はよくサボる。家へ電話すると、大分前に學校へ出かけましたよといふが、途中で停電しちゃつて居る。演壇に立つとカラ駄目で座談だと他の者にしやべらせない。おこつてやらうと銀座へ連れて行つて、すつぽかされちまつた事がある。自分が金持ちだから人が困ることは氣がつかない。しかし何でもザックバランにいふしこちらもあけつ放しで相談出来る先生です」

B「酒つて呑むものぢやないね。手を洗ふものだつて事を今日發見したよ……と銀座から歸つて来ていつたのですが、その内容はさアよろしく御推察願ふ外ありませんね」

E「増上寺の智慧袋、否、淨土宗の智慧袋、敵が無いだけ椎尾さんより大ものになるかも知れなう」

F「奥さんは美人だが子供がない。今居る娘さんは洋行當時の國際愛の形身ですが、奥さんも自分に子供がないので可愛がつて居ます」

A「當代の人気者、友松國語先生は、慶應の時も出ましたが、こちらが本家ですから少ししや

べらして下さい。大御所級は別として、中堅では何んといつても大正大學のピカ一なんですから……」

C「あゝでもない、かうでもないと色々批評する人が、いざ講義を聞くと斷然魅せられちまふ。心を折りたいとむとか、何とかの丘を越えてなど、時には與太もまじるが、先づ日本一の名文句、名調子、二時間の授業がもう濟んだのかと思はれます」

B「學生時代から教室へ出ないで本ばかり讀んでた。講演旅行に行つても、たとへば京都の宿屋に着けば(さうどすえ)のアクセントを仕入れて来るのだから先生の話しは

言葉が非常に豊富

だといふ感じを受ける。熱情も熱情だが言葉を駆使する名人だ」

E「現代的海旭、風貌まで似て居る。海旭氏の角刈頭は左官屋を思はせるが、友松さんのは同じ角刈りでも幾分流線型で、さうだ、浪曲の壽々木米若をつくりだね」

B「焦茶のダブル・ボタンか何かで颯爽として来るが、着流しの時は株屋の番頭、エネルギーで迫力的で、獅子は鼠を打つにも全力を盡くすといふやうな所がある。ドイツからフランスへ行つた時、フランス語は片言も知らなかつたので、無鐵砲な奴が……と笑つてゐたら、半年たゝ

ぬにバリ滞在の邦人中で一番うまくなつちまつた。やらう！と思つたら、八百屋のお内儀さんでも路傍の乞食でも誰でも相手にしてめちやくちやに談じる』

A「あちらで交際した麗人から餞別にハンド・バッグを贈られ、始末に困るだらうと見てゐたら、横濱まで出迎へた美那子夫人に

洋行土産として

うやく／＼しく贈呈した……といふのは、某氏のゴシップなんです、友松さんなら如何にもやり兼ねない。きつと友松氏だつたらうといふところにこのうはさの意義がある』

E「……僕はこの頃腹具合が悪くつてねといふから、何をいひ出すのかと思ふと、いふ途中で大いに困ちつやつてね。デパートの便所へ飛込んだのはいゝが、猿股の紐が纏綿として解けない。顔をしかめていろ／＼やつてゐる中にヒョツと解けた。うれしかつたね。君、これが即ち「解説」だよ。紐の解けないのは即ち迷ひでね……實に比喩がうまい』

F「コハクの煙を吐きながら、君この頃は印税で景気がいゝからねなんて、ニヤ／＼するところはともいゝ。この間も教室へはいつて来るなり、この頃は君クモ飼つとくのかい？なるほど隅の方にクモの巣があつたです。ちよつとした事がこの調子で……』

G「やりつ放しのやうで細心な注意をして居る。顔はドイツ型だがフランス式の

デリケートな味

もある。佛教法制經濟研究所を始めた頃、反對して居た望月さんもこの頃は大きいにやれとけしかけて居ますし、當分は友松時代が続くでせう。著書には大學教授と書かぬ。それ以上と思つてゐるでせう。講座は佛敎經濟史』

A「神林隆淨教授は狐みたいな顔で、一寸見ると謹嚴そのものだがよく氣をつけて見るとチヨ、キの間から紐が出て居るといふやうな人、膝まで届きさうな上衣に小さなズボン、昔は非常に有名だつたが、この頃の宗敎學概論の傍ら豫科の修身なんかいゝ氣持で教へて居ます。カントの解説を一步も出ない。話しが長いので、綽名は牛のよだれ』

C「洋行した時丁度大戦が始まつて、ドイツで捕虜になつた。捕虜收容所で競々としてゐるうちに戦争は濟んだが、トタンに留學期間も切れてゐた。

牢屋へはいりに

ドイツへ行つて来たやうなものだ』

D「講師の池田澄達氏は、チベット語で河口慧海以上といはれますがこれも牢獄へ洋行した組

です」

E「石井教道先生（佛教學）は京都辯の講義、本にキアアてありますなどとやる。淨土宗のオードックスですが、先生のえらいのは修験僧のやうな生活をしてゐることだ。洋服は無論着ないし、袴もつけずに白足袋で校庭をブラリ／＼と歩いてゐる。十戒は勿論堅く守つてゐたが、獨身で寺にゐると兎角世間の口がうるさい。それならいつそ……と心機一轉して結婚した」

F「燃えるやうな信仰の人、去年の風害の時、豫定の列車へ乗遅れた。處がその列車が瀬田川で遭難したので、これこそ

佛陀の御力だと

涙を流して喜んでゐました」

G「大正大學切つての大男、鹽入亮忠氏（佛教學）は淺草觀音様の大番頭です。淺草寺の執事といふよりも天台宗の一番々頭、大森亮順僧正をたすけて、天台の智恵袋です。腹の出來てることと佛敎界隨一」

E「大男總身に……といふやうな顔をしながら、實際は鋭い。大きくたゞけば大きく鳴り、小さく打てば小さく鳴る。徹底的な佛敎國家主義でむしろフアン、ショに近い。正法護國會々長で、佛

敎護國團にも勢力があるし、防空演習には淺草寺防護團長として鐵甲で乗出す。そのくせ、見かけは大山元帥……いや吉岡彌生女史に似て居るな、身體がデカイといふだけで角力部々長をやつてます」

H「觀止の話をする時、テーブルの上にあぐらをかいたが、いや全くデカかつたね。ズボンの中からシャツがはみ出して居るので注意すると、あゝさうかい。ワッハッハ……」

鹽入主義の立場

から見た傳敎研究の權威です」

B「青年と話すのが好きでY談の大家、もつともこの鹽入さんが、顔負けしたといふ話もある。それは女學校から頼まれて講演に行つた處が相客が吉岡彌生さんで、待つてる間にその講話を聞いて居た。處が何しろ醫者だし、それに女同士の心安さから徹底的に性や衛生講義をやるので、聞いている鹽入さんが顔を赤くし、歸つてからは、吉岡さんて人は、君大したものだよ……」

B「友松氏のY談は用語が奇麗で、藝術的だね」

D「友松さんといへば學内切つての友松ファンは二宮守人先生だらう。諸君は釋迦なんか崇拜

する必要はない。現在の人に友松圓諦が居るではないかといふ。この人すこぶる悲憤慷慨屋で常に宗教界の墮落を絶叫して、八つ當りに當る。意あまりあつて言葉足らず、佛教界の現状が癢に障つてならぬ所へ、友松氏が

自分の思つてゐる

通りを流暢にしやべつて呉れるので、快哉を叫ぶつて譁なんでせう」

H「學力はあるが、表現法は上手でない。正面から論争するより、何んだつまらん！とそつぽを向いぢまふ。それだけ東洋的な風格もあります」

C「石原憲忍先生は前豊山派の宗務長です。すこぶる古典的な英語をコンサイス辞典片手に教へます。チャーリーといふから何かと思ふとタイラーだつたり、あまりに古典的な講義ですが、學校經營の手腕となると大したものですよ」

A「學者とはいへないが頭はいゝ。石原氏は加藤學長の腹心で、財團經營の手腕たるや定評があり、商會社か興行でもやつてたら小林一三氏以上になつて居ただらう。本も書かぬし、一向名前は知られないが、學校の財政に取つては柱石といつてよい。腹も出來て居る」

D「一度やり出したら

石に噛りついて

もやり通す。蛇のやうな粘着力だ」

E「ナマヅを細くして髭の数をよやすと先生になる。自分では支那の聖人型だといふが、人は貧乏髭だといふ。負けず嫌ひで、寒くなると教室へ座蒲團をもつて來るが椅子の上へ時々忘れる。先生座蒲團が……と注意すると、イヤ、明日も授業があるからわざとおいて來たんだよ。決して參つたといはんです」

A「先生の奥さんがまた大したやり手で、豊山派の婦人運動は石原夫人が動かなければ何も出來さうですよ」

B「豫科々長宮崎榮雅氏も豊山派では元老格です。佐渡の名刹清水寺の住職で

東京ではアパート

住まひ、豚が立ち上つたら、かうもあらうかといふ格好でチ・コ・コと歩く。受持は東洋史」

F「高師科々長中島眞孝先生は米國で皿洗ひしながらマスター・オブ・アーツになつた力行の人。特長は？、さうですね、これといつて特長のないのが特長でせうか。専攻は教育社會學です」

C「昨年汎太平洋大會で大いに活躍した全日本佛教青年聯盟、その理事長が大村桂庵教授です。陸軍士官學校教授を兼ね、謹嚴そのものゝ教育學者、この頃宗教々育に世間が關心を持ち初めたとき、自分の事のやうに喜んで居ます」

G「三角髭を生やして、ちよつとオッカナイが、近づけば實にいゝ。童心の人……理事長になつた時など、子供のやうにはしやいで居たし、よい意味の天真爛漫さがある。

青年運動の指導

者として、今後相當の足跡を残すと思ふ」

H「東洋倫理の權威、山口察常教授は、若い學生を親身になつて可愛がります。風呂へはひるとウロ／＼する程の近眼で、講議は懇切丁寧、鬼の糞みたいにポツリ／＼と、小さくまとまつたノートです」

B「新進でいろ／＼な意味で學生のためになる先生です。門下となると一身を犠牲にしても面倒を見る。なかんづく就職の時は有難いですな」

E「新進といへば福井康順さんは全く素晴らしい。齡は四十前後でせうが、一見まことに初々しい美青年です。ところがこの美青年たゞの美青年とは美青年が違ふ。八九歳で剃髪した時お師

匠さんに向つて、早速お小遣ひをおねだりしたといふやうな逸話もある」

D「戀された若い美僧——日光の旅館の娘さんとの情話もあつた

これが今の奥様

ですが、典型的の良妻です」

A「早大を出て二年間支那へ單身留學し、歸朝して一ヶ月たゞぬ中に赤ちゃんがおギヤアと生れた。家庭悲劇が起るんぢないかと、岡燒き半分に心配すると、御當人濟ました顔で、ナニいゝんだよといふ。聞いて見ると、奥さんが時々北平まで逢ひに行つてたんださうです」

C「動亂の支那へ度々行つて縦横に歩いた。支那の要人連を驚くほど澤山知つてる。道教の方面から見た佛教といふのが看板ですが、道教研究では我國の一流、講議はシヤガレ聲だが、馴れるとかへつて魅力がある。支那の僧院生活の話しや、その日／＼の時事問題を捉へて、まづ一席快氣焰をあげ、おもむろに本論にはひる。大正大學中で最も將來のある人、第二の友松はあるひはこの邊から生れるんぢやないかな」

F「晩酌もやるが、勉強もやる。支那で何遍も殺されかゝつたし、見かけはお坊っちゃんでも

慶應と三拍子

そろつた、先づ我國新進學者中の出色でせう」

G「外人ではプリンクレイ氏、父が明治時代に有名だつた先代プリンクレイ教授で、お母さんは日本人です。しかし自分は四ヶ國の血がまじつてるといつてます。見るからに堂々たる英國紳士ですが、日本語で駄ジャレもいふし、演説も出来る。その筈で、東京で生れて小學校に通ひ、中學以後はロンドンへ歸つて大戦には英國軍人として奮闘した。通辯や、翻譯のうまい人は他にもありませんが、本當にロンドン兒の生活と、江戸つ兒の心理とを心から體得し、魂の底から兩國の事情を知つてゐる點では氏の右に出る者はあるまい」

H「先生のロマンスを話して下さいといつたら、話し始めると三日位かゝるよといはれた」

E「葉上照澄教授は菊池寛の心の日月のモデルで有名だ。例の不滅衰傳導説の慶應の加藤博士の奥さんの妹さんが、葉上夫人で

小説と可なり似

て居ます。女學生向きなセンチメンタル講義にも似ず、柔道二段、柔道部々長です」

F「觀念哲學者の伊藤吉之助教授は、井上哲次郎老博士の門下で、神系質な小男、普通に居ると食ひつきさうな顔で、授業中にニヤリと笑ふと學生は初めて安心する。時間中に一度でも

笑へば、相當御機嫌な證據だからです。几帳面で、冥想的で、哲學小辭典みたいだ」

D「それでも桑木殿翼博士と一緒に「制服の處女」を見に行つて感心して居たから、あまり馬鹿にしてはいけませんよ」

B「最後にベルグソン崇拜者の北崎吉先生の講義は、ヒットラーと飯を食つたとか、林大將、荒木大將等の名前が毎時間出て來て愉快です。國家主義哲學といひますか、他の學説も、ほめるのはすこくほめて

氣に喰はなすの

はめちやくちやにやつつける。テキパキしてゝ面白」

A「以前三木清氏が來て居た頃隣合せの教室で、兩々相對してゐたのは壯觀だつた。そのくせ二人は仲がよかつたのですがね。北氏の聲は大き過ぎて、隣の教室に居ると丁度よく聞える。良かれ悪しかれ、自分で一個の哲學を組織して行くのは偉とすべきです」

G「時間がありませんから、後は名前だけあげます。理想主義哲學の佐藤賢順教授、指方立相を體得して、本當に西方淨土があると信じてゐる上品な宗教英文學者松浦一教授、マハヤナ學園々長の長谷川眞備教授、經濟院農村救済居士笠森傳雲先生、必ず改良服の今岡達吉氏、新宿をよ

く泳いで居る論理學の永野芳夫教授」

B 『松浦さんは西條八十に似てるね。十一谷義三郎や芥川氏を教へた事もあり、それで十一谷氏が一時大正へ教へに來た。長谷川さんは自家用車を持つてゐることで學内唯一だ。田島徳管教授はまつ子夫人（ペンネーム戸塚まつ子）を持つ事で光るし、石井教道（佛教學）石井俊瑞（犯罪心理學）兄弟が同じ大學に教鞭を執つてゐるのも面白い。佐山學順氏の傳道史、ドイツ語の坂戸智海氏も一權威です』

東京工業大學

A 「賣込んだ名前は有難いもので、東京工業大學といふと頭をひねる人もありますが、蔵前といへば、あゝさうですかと、娘さん達でも直ぐ呑込みます。大正十三年大岡山に移轉し、昭和四年昇格、留學生のための附屬豫備部はあるけど、専門部といったものもないし、豫科もない、純粹の單科大學です」

B 「高等學校出身ばかりの帝大工學部と違つて、専門學校（主に高工）出もあるし、私大の豫科、高等範師、檢定を取つたもの、勿論高校理科が多いが、まれには他の學部を出た學士さんも居るし」

お墨は實にまちくです

だから學風も、雑多でまとまりがないところに面白味があり、中村孝之助學長もこれをまとめて行くのは大抵ぢやないと思ふです」

C 「中村先生は、大正十五年、高工の校長になり、學校と一緒に昇格して學長になりました。運動會の豫算など、判をもらひに行くといつ／＼項目を調べて、ラインを引く費用が高すぎると

か、旗は一本三銭もしやしない。賞品の単價はもう一錢五厘ほど安くならないかね……といふ調子です。總額をとにかくいふ學長はあるでせうが、ピンの代まで調べるのはうちの學長、正に天下第一品です。専攻が電氣で〇・〇〇〇〇〇〇なんて數字でこまかく育つたせいでせう」

C「法科の學生ならいざ知らず、工科の學生はそんな理窟をこねるもんじゃないよ……といふのが口ぐせで、學生主事の法學士奥田寛太郎氏など君は法科出だから……と毎日のやうにやられて居ます」

D「海外からの留學生と一般の學生と、卒業式は別にやるのですが

間違へて留學生卒業式に

諸君は今後大いに我國工業界のために……とやつて、おしまひまで氣がつかなかつたなどは秀逸です」

F「定規や、何かは實驗室へ置つ放して、油でよごれた實習のナ、バ服のまゝ飯食ひや喫茶店に現れます」

E「大體學長がこんな調子で、純學者型だから行政手腕はゼロですが、そこはよくしたもので、事務官の石井茂助氏が、文部畑では若手の三羽鳥といはれるカミソリ男で、一切を切つて廻

す。文部省が移轉した時など早速出かけて、机や椅子の古いのをそつくりもらひ、文部省のトラックで、文部省の小使に届けさせるといふやうなあざやかな藝當をやります」

A「この石井さん、瓢箪池を造つたり鶏や山羊を飼つたり、ローリースケートやゴルフ練習場をこさへたり、農林學校の出身だけに、アンズやプラタの苗をもらつて来て、バラックの周圍に植ゑたのでどうするかと思つて居たが、本校舎が出来るときは立派に育ちました。今はガス、水道、電氣の自給策を立て

プールや實驗用水だけは

既に自給でやつてます」

G「その間にもう一枚、にくまれ役として學生主事助教授の奥田寛太郎さんがはひる。教授連はみんな科學者だから、浮世の事はわからない。わかつてもわからん顔をしてゐる。それで口だけは學生にあんな事をさせてはいかんぢやないかと學生主事にねぢこむ。學生は學生で要求を出すので、始終板ばさみになつて居るから、優柔不斷だといはれるのも止むを得ませんが、學生がおとなしいから、騒動などの心配は少い」

I「おとなしいのぢやないバラ／＼なんだ。出身校がまち／＼の上に、教室から教室まで二十

分もかゝる。校舎がバラ／＼だから、学生もバラ／＼になる」

H「早い話しが有名な記念祭——蔵前時代は東京名物だったが、大岡山へ来てから振るはない。それでも全校を開放して大騒ぎするから、紡織など若い娘さんで一杯になります」

B「眞面目で就職確実だから……来卒業の人もほとんど豫約済み……」

精選には目をつけられる

金持の一人娘なんかで、学生課へ頼みに来るのも相当ありますが、若手の助教授より年上の学生が多く、實驗室に自分の女房や赤ン坊の寫眞を張つてるやうなのが多いので、割りにまとまるのは少いらしい」

D「奥田さんはスポーツが嫌ひといふ譯ではないが一體に振はない。蔵前時代はボートがすごかつたが、今は洗足池の貸ボート位、一體蔵前時代は門限が無暗にやかましく、ボートにかこつけなければ外出が出来ないので、サボリたくなると我も／＼と向島へ行く。自然應援も盛んになり選手も頑張つたもんだが、大岡山ではねエ」

C「何しろ技術科は暇がないです。仕方がないから實習の片手間にやれるもの……機械科あたりは、役所の古の二十五年型フォードなどを頂戴して来て、修繕の上ドライヴする。免許證は大

抵持つてますし、飛行機なども可なりやつてる。矢張り古機械を買つて来て

大學新聞は自分達で印刷

するんです。寫眞製版など自慢ぢやないが大抵の新聞社には負けないます」

A「學校の名前も矢張り蔵前としたい。新蔵前などはどうかと石井さんがいつてましたら、傍らのある校友が、學校の前へ大きな蔵を建てるのが一番さ……と、これは實に名案ですがね、まア總論はこの程度で、各教授の月旦に入りませう」

E「共通學科から始めますが、先づ分析化學の永海佐一郎博士、蔵前の給仕をして試験管を洗つたりしながら、今の電氣科長加藤與五郎博士の助手になり、累進して教授になつた立志傳中の人、この頃の學生はアサスマメ（麻雀）と書いた家で碁を打つてばかり居る、あんなに勉強が嫌ひなら

學校をやめて浪花節語り

になつちまへーと叱るなど、世間知らずの堅人です」

C「浪花節は飯より好きで、ある時放送を頼まれてAKの控室で東家なにがしと一緒になつた。聞いて見ると浪花節の放送料は二百圓とかで、博士であり、大學教授であるところの永海先

生は三十圓、それから後は不勉強な學生を見ると、浪花節語になれと怒鳴る癖ができました」

D「一グラム何十圓の藥品など浪費する代りに、浪花節を習つて何百圓も儲け、その中二十圓位で生活し、残りをみな寄附して浪花節大學を造れ！と先の先まで注意して叱りつけるので、サボ學生連大恐慌です」

H「自分の定性分析は世界一だと稱し、一度び實驗にかゝれば、去年の大晦日にも夜中すぎまで、足かけ二年間ぶつ通してやり、學生は年賀状が書けんと大弱りでした」

I「町の錢湯へいゝ氣持に浸りながら、この中に博士が入つてるとはお釈迦様でも氣がつくめエとひとり言、どういふ氣持でいつたのか分りませんがね」

B「十九の年から自活して來たのが御自慢で、講義中はお茶をガブ／＼飲む

それが汚ない缺けた茶碗

なので見かねた卒業生が買つて上げたたら、それは直ぐどこかへやつちまつて、相變らず古いきたないのでガブリ／＼。しかし化學は暗記ものでない、數學と同じに推理の學問だと新しい化學の體系を造り上げたのは先生の功績でせう」

C「物理學教室の主任教授木下正雄博士の格好と來たら大變だ、油染みたボロ服に、汚ないハ

ンチング、それでオートバイを飛ばしてどこへでも行く。学校の附近でもあれが博士先生ですか？と初めは首を傾げたもんです」

H「木下先生は歐洲に永いことゐて、大戰ではドイツからイギリスにのがれ、そこで金髪美人を奥さんにした。日本語が下手だから本を書かないし、講義も英語が半分以上だ。五十五、六になりますかね。あちらには三十年以上ゐたので、機嫌のいゝ時は

ドイツやイギリスの女性に

大いに持てた話が出ます」

G「アチラの學生は休戦記念日には、古い大砲など町中引つ張り廻して、ドンチャン騒ぎをする。日本の學生諸君は何故そんなに取り濟まして居るのか？といふ譯で、従つて自分が先頭に立つてメートルを上げます。ビールが大好きで、記念祭の時などみんなのビール券をもらつて歩きますが、飲み切れなくなると、今度はそれをくれた學生達を集め、券をバラまいてみんなに拾はせ、キャツ／＼とはしやいだりするんです」

I「いはく、學校は勉強の仕方と、その心構へさへ覚えればいゝんだ。若い時は二度とない、諸君大いにオシャレをすべしといつて

試験の時にも監督をしない

どの参考書を見てもいゝから、兎に角書け、わからなければ教員室へ聞きに来い、但しお互に相談してはいかんよと言ひすて、問題の説明だけ済ますと、どん／＼引き上げて行つちまひます。だから學生の人氣といつたら、旭日昇天の有様です。寒くなると首巻したまゝ講義しますし、學生にだつて首巻を取れなんて野暮はいひません」

K「同じく物理の助教授竹内時男博士を、吾々はキートンと申上げます。つまり横顔がそつくりなんです。鼻が高くて小男でそれで聲自慢で、放送や講演を頼まれることが何より好き、留學した時

あちらの學者の喜ばかり賭

つて歩いたといふのも變つてゐませう」

J「木下さんを評してはいはく「大きな聲ではいへないがね、木下さんは日本の文字をタンと知らないんだよ、この間も妙チキリンな字を見せられて弱つたよ」なんていつてますが、さういふだけに竹内さん自身は漢文口調のなか／＼名文を物します」

I「數學教室では主任の渡邊孫一郎博士が世間的に一番有名でせう、數學の先生は商賣柄みん

な碁が強いが、その中でも矢張り渡邊さんは主任教授だけの事はある、確か三級位です。キネマ俳優のやうに表情たつぷりの講義で、一句々々の終りに

天井を覗んで大見得を切り

ますが、ちよつと言ひそこなふと忽ち處女のやうにはにかんで、「いやまことに済みません」と頭をかいて、ニヤ／＼ツとする。あそこがたまらない魅力だと喜んで居る學生もあります」

H「數學の助教授久末啓一郎氏を因数分解すると、野球プラス麻雀プラス酒といふ答へが出る。中でも野球は部長として、それも普通の部長と異つて試合の時は、自らベンチにすわりサインを送る。その作戦はすべてカンで行くんです。麻雀をやつてもその通りで、オヨソ數學的でない、カン第一主義の打ち方です」

E「先生がベンチにすわると試合に負けさうで、一同ハラ／＼するんですが

先生は勝てば自分の作戦が

良かつたやうな事をいひ、負けた時は、作戦は良かつたが選手が駄目だつたといふのです。まことに愛すべき自信力です」

K「中等講座で力學の講義を放送した時も、打ちました／＼とアナウンサーもどきで野球の例

を引いてみました。が、教室でも何かといへば直ぐ野球です。球の速力をNとし、これがバットに當ると……

説明は堂に入ったものです

久末といふ姓が類が少く、時々久米と読み違へられてはクサツてゐます」

N「物理化学教室の田丸節郎博士は、どの本にもないことだけを講義する。僕は書物に出て居る事はいはん、あとは本で勉強し給へ……といふので、従つてノートも簡単に、學生に喜ばれます。さて共通学科はこの位にして各科別の各論に移りませう」

染料化学科

A「染料化学の實驗室は一番外側、狭い通りに面して居ます。こゝに放列を向けて放水する通行人が多いので、學校は便所ぢやないぞ、よく取締り給へと交番へ怒鳴り込んだ學生もあつたが、朝などはお花通ひの妙齡の乙女も通ります。シャンだぞ！と一人が叫ぶとみんな窓にかじりつく。先生に叱られると、女を見てるんぢやありません、着物の染色を研究してゐるんですとかく口が減りません」

D「染料化学の科長は眞島利行博士で、上野繁藏教授、菱山衡平、林茂助教授がゐます」

C「眞島さんは大阪帝大總長の呼び聲もあつたほどで今は仙臺をやめて工大と理研と阪大との掛持ち、大岡山へは一月に一度位講義に來ます。いゝお爺さんですが

帝大のボート選手だつた

だけに今でも體軀すこぶる頑丈です」

B「上野博士は、日本染料、理研などを経て教授になつたいはゞ立志傳中の人物ですが、世間知らずで孤獨を楽しむといつた風です。最近奥さんを亡くして、一層さびしさうなのはお氣の毒です」

D「染料の實驗で、インヂゴを作らうとしたある學生が、原料のアントラニル酸をいぢくり廻して居る中に、みな使ひ盡くして仕舞つたので、「仕方がない、自分で買つて來よう」と菱山先生に買ひに行つてもいゝでせうか」と聞いた。ところが先生はたゞ一言「君、いつそインヂゴを買つて來給へ」と答へたが、菱山先生はさつとこんな人です。藏前の教員養成所出身で、大の酒好き、そのため胃をこはして晝飯を抜いてゐます」

B「薩摩琵琶は素人離れとみづから稱し、何かの會には

必ずペロペロンとやります

かつて堂々と素人大會に出演した事もあり、あとで奥さんに誰が一番うまかつた？と聞いたら、モチあなたが一番でしたワといつたさうで……兎に角、つき合ひいゝ先生です」

D「林さんは眞島先生自慢の愛弟子で、眞面目一方の學徒、染料は先づこの程度です」

紡織科

A「命短し戀せよ乙女、同じ戀するなら紡織科の書生さんに、四季の衣に苦勞せぬ……といった唄を歌つて紡織の實習はともほがらかです。烏口を引つぱつたり、面倒な精密計算をやつたりするのと異つて、實習の時間でも口は空いて居ますから、レヴューを論じ映畫を語り、とてもとても大變です。先生にしたつて鹿爪らしく

オホンと納つてる人はない

その典型が科の齋藤俊吉教授です」

C「オイ、テメエ、ナニシテヤンデエと來るから學生はまごつく。生粹の神田ッ兒で、機械科の老大家關口さんなどにでも、テメエ、イマカラ、ケエッテナニスンダイ？といふ調子、學生は

オヤチと呼ぶし、他の先生もオヤチといふ先生の前へ出ても矢張りオヤチで通します」

B「ポト部長で、古い藏前出身で、紡織學界切つての大親分、隣の染料化學まで手をのばして就職の世話を焼く。女子大の講師をしてゐますが、アルバムを二冊持つて居て、一つはお嫁さん用、一つは婿さん用、暇があると見くらべてはこれとあれと、あれとこれと……」

A「名譽仲人として高砂やアをやるのが、少い月でも五六回

これは書入の時期で

すから、講義よりその方でいそがしい。部下の助教授や助手、卒業生などは大抵先生が世話しました。家へ歸ればいゝバ、さんですが、世間的には親分の一語に盡きませう」

B「今年六十二歳、工大の教授中博士でない唯一の人です。おれが教へた弟子が博士になつて居るのに、おれの論文を一體誰が審査しようといふんだい？といつた見暮です。就職の世話をするにも、頭を下げて頼んだことはない。おれがお辭儀したら世の中は暗だいいと威張つて居ますが、それでみな片づいて行きます。紡織の齋藤であり、齋藤イコール紡織ですから他の先生は割愛しませう」

窯業科

D「学校ではオカマといふ。窯業とはガラス、セメント、煉瓦、耐火煉瓦などを造ることだとさへ知らないで、はいつて来た学生があるから愉快です。ボールミルの騒音、ガラスを熔かすお

かま
實際は嘘々言ってますから

どんなに大聲でオケサヤドドイツをうなつても味噌のくさる心配はない。結論としてみんな唄がうまいです」

E「科長近藤清治博士は三十五、六になつてから十八歳の奥さんをもらひました。もう五十を越したでせうが、相變らず睦まじい。植木がすきといつても手入れのことではない。夜店で、値切る、その値切つてる間の駆引がすきなんださうです」

F「田園調布から横濱までビールを飲みに出かけます。何時でもタバコをくはへ大掃除など、シャツ一枚で飛廻つてますが、あれで窯業では我國の第一人者です」

E「面白いのは助教末野佛六氏でこの頃の学生は茶目氣がなくなつていかん。昔はもつと感

勢がよかつたのだが……と皮肉の歎を漏らして、眞つ先に

鍋島屋あたりへ突進します

赤坂のスケート・リンクへ水谷八重子が来て居ると聞いて学生を連れて圓タクに分乗し、途中でミカンを二箱買込んで、運轉手があきれほど車内で大騒ぎをやつたのは去年の冬のことでした。體が弱いのでスポーツは下手ですが、横すきといふ奴でせう。ボートでも野球でも何でも飛出します」

應用化學科

G「以上は大岡山獨特のものでしたが、應用化學は本郷の工學部と對立です。主任の田中芳雄博士は本郷と驅持で一週間に一度だけ、群雄割居でまともにくい科ですから看板に大ものを借りて来たのでせう。染料化學者なども同様のことがいへます。東大では、石油、石炭ですが大岡山ではゴムが専門、この不在科長に代つて實際上統率するのは松井元太郎博士です」

I「松井先生のカメラリは有名で何か氣に入らぬとガラガラピシヤンと来る、来たかと思ふともう晴れ渡つて居ます」

早呑み込みて頭が早

く、相手に頓着せず、自分獨り呑み込んで話します」

H「清水誠助教授は一風變つた農學士の肩書です。ナメシ革の研究を終へて、最近ドイツから歸つたばかり、堂々たる重役タイプはドイツ・ビールで一層腹が出て來ました。この間もウナギを何貫目かを買つて來てその皮をなめして、シースを造りましたし、魚の皮やら時には雛子は何百羽もつぶしたり、必要なのは皮だけです。から實驗室は晝飯のおかずに不自由しません。工學士の金丸誠助教授は人絹纖維の研究に今ドイツへ行つて居ます」

電氣化學科

K「主任教授は加藤與五郎博士、ほかに武井助教授と、瀬谷、川崎舎、浦野、富山、連水の各講師が居ますが、全然加藤さんの獨裁でタヌキ親爺さんだといはれます」

L「他の科の連中はさういふが、親しく教はつて見るといふにいはいはれぬ味がある。時に大風呂敷は擴げるが、細かい事をほじくらないのがいい」

N「席次では中村學長の次ぎにえらい。學内行政では素晴らしく幅が利く

パテントの敷を持つてゐる

のも學内第一だが先生のパテントはどうも實際に工業化されなう」

M「それでも何しろ敷が多いから酸化磁石とか、それを應用して汽車などの中でやる小型の碁、將棋盤とか、いくらかは金になるものもあると見え、戸越町へ行つて加藤さんの邸と聞けば直ぐわかるほど豪勢なもんです。金持ち教授の兩大關は電化の加藤さんと機械の關口さんです」

N「武井武助教授を我々は兄貴と呼ぶんです。兄貴といふ言葉が實にびつたり來るんで、自宅へ行つて御馳走になつたり、喫茶店をねだつたり、もつとも藏前の先輩で、東北帝大を出て理學博士になつたんですから、經歷からいつても立派な兄貴分です」

M「講師の瀬谷準造氏は勤続三十何年間、學校中で一番古い。高工時代に一べん教授になつたんですが、昇格すると、また講師に戻りました。電氣鍍金の權威者です」

L「あとの講師は大抵大會社の重役か技師長どころで、小遣ひ稼ぎでもありますまいから、献身的に教鞭をとつて下さるのか、それとも經歷を飾るつもりか、そのくせみんな電車のつり革にぶら下つてやつて來ます。川崎舎恒三博士は大同電氣製銅の重役かなんかではるく」

名古屋から毎週一回御出張

です。御苦勞さんな事です」

N「だから何れも重役タイプで、校内では小心翼翼の先生振りですが、若し俗世間へ遊びに連れてつてもらへば……減多に連れて行きませんが……とても素晴らしく、しかして面白いです」

機械工學科

P「主任の關口八重吉教授は古い蔵前出で世間的には有名だし群雄割據の機械科ををさめて行く上の重石です、次席教授の淺川權八博士とは蔵前で同期、途中で淺川さんはドロップして卒業が一年遅れたばかりに今でも月給が二十圓ほど違ひます」

B「關口先生は實にいゝお爺さんだ。生徒を孫のやうに可愛がる。自分の科の卒業生二十五、六人の名を大きく書いて、部屋へ張りつけ、就職がきまると

月給の高まで明細に書入れ

て行く。後から申込みが来ると、何しろ御覽の通り満員ですから……と一應断つて、しかし条件によつては、となか／＼商賣がうまいです」

T「早く申込まないと、賣り切れますよと半年も前から會社工場へ警告狀を發します。これが

矢張り乙なんです。就職したあとまで面倒を見て、なに？ あいつまだ高等官になれんのか。よし商工省へかけ合ひに行つてやらう……」

S「ある學生がワイフをもらった挨拶に行つたらしばらく待たせた揚句、あたふたと出て来るや否や君、君、二つあるんだよ、樺太と朝鮮だがどつちへ行く？ といふので、學生眼を圓くして、先生違ひます、今日は結婚報告に上つたんですよと、答へたところ、なんだ、それなら早くさういへばいゝのに……。早くいへといつたつて先生のは相手に物をいはずひとりで吞込んでまくし立てるんだから愉快です」

S「關口、齋藤、近藤、木下とこの四人が工大の「顔」の人です。従つて何々會長などは。幾十といふほど引受け、月下氷人も澤山やる。例の結婚解消が大流行した頃の話、第三番目の解消事件が、先生の世話した口だったので、あればかりは見損つたよと講義半ばにこぼす事、こぼす事……」

T「アメリカではハットン教授に師事し、歸朝當時は一時間に八十何回ハットンが出たので、つひにあだ名が「ハットン」になりました。とたんに講義中の引例に重さの八トンが出て來たので、教室中はさア爆笑の渦巻、爾來八トンとか二十八トンとか、さういふ引例は断じて使ひませ

ん」

R「學問的といふよりも、圓滿な政治的手腕、社會的な世渡りの手腕、卒業生賣込手腕などが

和製ハットシ先生の眞價で

もし先生が居なかつたら、群雄割據の機械科は、我もくくと、全く納まりがつかないでせう」

P「間口の廣いハットンさんに對して、淺川教授は奥行が深い。軍需景氣は行く所まで行つた、これからは精密機械だ、諸君そのつもりでやり給へと時間毎にいひます。木炭自動車で有名になりました」

R「大變若い二度目の奥さんをもらつてから、どうも妙に衰へが見える」

S「松本容吉教授（工博）は早大理工科から來た人で俳句がうまい。少くとも本人はうまいつもりで、文藝部長をやつて居ます。ところが俳句以外には文學はあまりわからず。雑誌の檢閲をやつてゝ初めてイデオロギーといふ言葉を知つたといふ。平素は謹嚴そのものです」

T「しかるに一度杯を手にすると、とたんに四疊半的氣分に顛落し、三味線が戀しくなる。すつかり酔つばらふと、誰彼の見境なしに背中をつねつて廻るといふ珍藝を發揮します。銀座あたりをいゝ機嫌で、學生とのして歩きながら、ねエ君、東京は不便だねエ、ウキンカベルリンなら

カフェーが外から見えるんだが……」

U「石川政吉博士は、帽子を取ると俄然ふけてしまふ。几帳面のなんのつて、机の上のインキ壺が十分の一センチほど斜になつて居ると、もう一日中御機嫌が悪い。助手は氣骨が折れるので參つてます。しかしキッチンと片づけてさへおけば、とても親切です」

S「石川さんと今一人の教授山田夏之助博士はどちらも典型的の英國型紳士、おとなしいから人望もあります」

R「助教授中では佐々木重雄博士は大ブルジョアで、靴はカンガルーの革、タバコは一番悪い時でホープですが、その割におこつて呉れません」

P「海老原敬吉博士は、ついこの間歸つて來たばかりですが、職工のところへまで歸朝挨拶に廻つた。ちつとも威張らない、先生ぶらないところが人氣があります」

電氣工学

W「主任は中村孝之助學長の兼任ですが、アスタ、ハツズサンズツブニ、カナラジアチマルコトてな調子ですから、そのまゝ書いたら大變なノートが出來上ります。郷里東北地方の凶作で

は大變氣をもんで居られました」

V「だが聲はいゝんです。英語になると俄然流暢です。だから講義には英語が多いのも止むを得んです。學長の科目一つで苦勞する學生が相當ある程、點の辛いのも有名です」

X「これも秋田産だが山本勇教授はちつともなまらない。電氣の先生は大抵光頭ですが、山本さんはその上にビリケンといふ形、學生の氣分も親切に考へて呉れるんだが、その氣分たるや御自分の學生時代……明治中葉の學生を標準にするもので、時々勝手が違ふ

苦學力行でのし上げた立志傳中

の人です」

W「奥さん孝行では張出大關位、もつとも東北帝大時代に陰陽電氣の法則から火花を散らし合つた仲なんで……」

Y「山本ビリケン先生に對して、福田勝教授のデボチン頭、何しろ黒板は半分から下だけしか使へないといふ小柄で、そのくせ頭は超弩級です。先生のY談たるや、相當膽力のある學生でも顔負けして逃げ出します」

Z「講義たるやまた縦横無盡の快論鋒で、いづれくはしい事はプリントにして渡すといふ。そ

のプリントを試験の終つた四月頃に呉れたりします。去年は三年の試験の時、問題だけ出して

サツサト二年を連れて見事に

行つちまつた。どうせカンニングする人はするんですねエと、何にしろ憎めない先生です」

V「電氣自動車では我國切つての權威で、貴重な存在です」

X「學生を無暗に可愛がる、相談にも乗つて呉れるし、何となく打明けて話すことが出来る。要するに一番信頼される先生でせう」

Y「鯨井恒太郎教授、東大兼任で一週に一回、温厚だからゴシップはまかないが、ちつと聞いてると實によくわかる、黒板一杯に書きまくるチョークの字が全く麗筆です」

Z「助教授古賀逸策博士は、去る七月十日ドイツへ立ちました。魚屋のアンチャン式の角刈頭が、歸朝の時にはどう變つて居るか今から懸賞募集の價値がありませう。二十何年一日の如く水晶の研究を續けた几帳面居士で、アルバイトを出すに五分遅れても叱られます。出發の前

初めてレヴェューを見に行つた

といふので一大センセーションを起したといふほど、その日常は定規みたいですよ」

V「電氣工學の役得はリーグ戦シーゾンの實驗室です。レンジャーの借出しが斷然ふえ、アン

ヘアやボルトのレコーディングと同時にスコアをレコードします。この時ばかりは電工科はいゝ
なと思ひますね」

建 築 科

P「主任の前田松韻博士は大男、谷口忠博士はその半分もありません。重役タイプの小林政一
教授、秀才型の田邊平學教授、見るからにスマートな谷口吉郎助教授、何れも伊東忠太博士とそ
の門下佐野利器博士の系統でかたまつて居ますから、僕等は伊東さんの曾孫弟子です」

R「建築科に女の聴講生が居て、これが毎日谷口（吉郎）さんを待ち合はして一緒に歸るとい
ふうはさがあつた。勿論デマですが、如何にもさういふうはさの立ちさうな色白の好男子です。
谷口さんに匹敵するのが同じ助教授の二見秀雄氏です」

Q「講師として美術を教へに来る洋畫壇の大御所南薫造氏に美しい娘さんがありました。ゴル
フの取持つ縁かいなで、これが今の二見夫人ですが助教授、助手あたりで大分がっかりした人が
あつたさうです

奥さんの美しい事では断然二見

さんです」

P「前田さんは常識的で平凡な講義、變つて居るのは田邊さんで、人間が几帳面なせいでせ
う、分類がやけに多い。一二で分け、ABで分け、更にイロハで分け、第一款、第一項、第一
目、第一……とノートの最初の二ページ位は見出しだけで埋まつちまひます」

S「ドイツに居た頃は例のマルク暴落で、他の連中は酒だ女だとはかなき成金振りに酔ひまし
たが、田邊さんは無暗に旅行した。それも言葉のわからん國でなくては、エトランジェの氣分が
出ないとスペイン、ポーランド、東歐諸國等をタマゴの繪や、ニハトリの繪を描きながら、手眞
似旅行をやつて歩いたです。奥さんは同志社かどこかの女法學士で、この前辯護士試験(?)か何
かに落ちた知らせを聞いて、先生が便所へ入つて泣いたといはれる」

R「講師では伊東、佐野兩オン大に、東大の關助教授、前にいつた南薫造氏などが大物です
が、矢張り、伊東さんは面白い。淡々とした名人藝で、天氣のよい午後などはついうつら／＼と
なるほどうまいものです」

T「で、最後に、今のオール大岡山を代表する先生といへば、齋藤（紡織）近藤（窯業）^加佐藤
（電化）山本、福田（電工）關口、淺川（機械）小林、田邊（建築）眞島、菱山（染料）の諸氏でせ

う。この人々を中心に新らしい大岡山スピリットがやがて作り上げられるでせうが、今のところはバラ／＼です

制服も帯大と同じになったし

傳統の藏前精神が失せて、新大岡山の學風はまだ完成しないといふ過渡期です」

U「巡查が来て、この學校は認可を受けちよるかねと、私立かなんかと間違へたこともありま
すし、夏休みに田舎の驛で割引證を出したら、こんな學校があるのかい、とさん／＼聞かれたり
矢張り藏前の名前はなつかしい。一つ石井事務官が洗足池畔に大きな藏を建てゝ呉れるといゝで
すね」

立教大學

記者「試験でいそがしい中をわざわざ有難う御座いました、早速總長シ・エス・ライフスナイダ
1 先生からザックバランの批判を願ひませう」

A 「總長は六月十四日にアメリカへ歸りました。夏休みが明ける頃また來るでせう」

B 「大學、中學を一緒にした立教學院、そのオン大が總長なので、大學は學長木村重治氏、中學は小林茂雄校長に學務一切を委せ切り、まア總長は海外との聯絡……つまり金集めですね、その意味で現總長は手腕満點です」

C 「宣誓式などには日本語で訓示するが、朝鮮の飴賣りなんぞ足もとにも寄れぬほど流暢だ。夫人はアメリカで有名な人の娘ださうで

息子さんはコロンビア大學

に居る。今度歸る時久し振りで息子の顔を見るのが楽しみだといつてたが、外人としては非常に家庭的だ、經濟的にはこまかいが……」

D「日本聖公會東京地方部監督……つまり日本を十の教區に分けてありますが、その中の一つの大將です。大僧正とでも譯しますかね」

記者「學内の信仰問題は……」

E「全く自由です。宗教的雰囲気が残つて居ない譯ではないが、日曜の禮拜なども無理にはすゝめません。同志社、青山學院などくらべてミツシヨンの色彩は一番薄いやうです」

C「明治七年ウイリアム師の創業以來、ミツシヨンではあつたが、最初の目的は英語を教へるにあつた。神學部はあとから出來たもので、發生史的には文學部が第一でそれから神學部、最後に經濟學部といふ譯です」

F「築地時代はスゴかつたつていふぜ。血樓團とかの親分、子分、羽左衛門の息子を初め、役者のせがれも多かつたし、サトウ・ハチローなんかも居た。亂暴もの、變りもの、一方には燃えるやうな

信仰もあつて生氣瀰刺だ

つた。それが神田の英語専修學校を合併して池袋へ越して、やがて大學になつて、今ぢや平凡なサラリーマンの生産工場だ」

G「學生課長排斥問題や野球部問題などでは角力部あたりが氣勢をあげたが、大體にテロは少いし、紋付に顎髭の東洋豪傑も居ない。平凡に平凡にと進化(?)して來て、だから學校としてもクリスチャンリベリズムの宣揚より野球で賣り出さうとして居る」

C「その流れを代表するのが『タヌキ』事木村重治學長だ。官僚的でおしやべりが好きでちよつとした挨拶にも一時間位はキイ／＼聲で聴衆を悩ませます」

F「人口問題を講義して、諸君はすべからず海外へ發展しろ

民族的實際的に日本の土地

にしてしまへばいゝ、なんていふところを見ると、幾分ファッションヨカナ。ヌラリクラリと體をかはして、尻尾をつかませぬ技術は堂に入つて居る。去年の騒動の時など、その眞骨頂を發揮したものです。學生の人氣は……さアどうですか……」

G「長崎高商校長をやめて浪人してゐたのを松崎さんが引つ張つて來た。學長で居られるのは、全く松崎さんの力ださうです」

A「校友會長松崎半三郎氏の學内の勢力は物すごいです。明治二十何年かの卒業生で、森永製菓をあの大屋臺に仕上げた人物、理事會は七人ですがその中日本人は松崎専務たゞ一人ですから

ね。教職員で暮夜門をたゞく人が多いとか少ないとか、現在の立教は松崎専制ですが
それだけ學校としては誇り
です。森永へは毎年三人位入れて呉れます」

經濟學部

記者「では各論に移つて經濟學部から……」

B「立教の立教たるところは、文科、神學科で經濟は添へもの……といつても學生は多いんですが、まア特色は少い。學部長は木村學長兼任で、その下に經濟科長の河西太一郎さんと商學科長須藤吉之祐教授」

D「須藤さんは中學時代以來笑つたことがない。何時も眉に皺を寄せて居る謹直居士、時間が迫つてもうやめて下さいといふと「僕は教へることが何より好きなんだよ」とおつしやる。出席さへ缺かさなければ點は甘いです」

C「色が黒くて銅像みたい、人間も堅いし、要するに人格者だ。一體立教の先生は、牧師上りか牧師下りか、坊さんでなければ幅がきかないところで、今の木村さんは違ひますが昔は「長老」

でないと學長にせぬといふ内規さへあつた。科長になる位だから須藤さんも勿論牧師です」

G「そのくせ、實務家肌もある。明治二十七年だつたか、確か松崎半三郎氏と同期位に母校を出て、アメリカの神學校へはいつたところ

あちらの景氣が馬鹿によく

なつたので經濟に轉向した。歸朝して臺灣銀行に入り相當のところまで進んだが、そのための實際家肌でせう。息子さんは森永に勤めて居るが、松崎さんの世話で美しい細君をもらつた」

B「交通學交通政策の伊藤重次郎教授は、小僧からたゞき上げて山下汽船で課長級まで進んだガンバリスト、今も百貨店聯盟の理事長やら、山下汽船時代のネタで海國讀本を著したり六十に手の届く年をして、世間的になか／＼やつて居ます。講義は不定期船の問題が得意ですが……」

A「商品學、經濟地理の坂口武之助教授、この人も六十の坂をとづくに越して居るでせうが、エロの話が實にうまい。論文に藝者買ひの詳細な描寫を試み、商品としての藝者論を高唱して、百點もらつた學生もあります」

F「經濟科長の河西太一郎氏、この先生は立教のピカ一だぜ。ちよつと後に續くものもない。四十幾つの若さで農業政策なら我國屈指、講義はわかりいゝし、學位もその中取るだらうし……」

こいつア少しほめ過ぎたかな」

B「神経痛で眼のふちをビリ／＼させて居ますが

教室へ来るといきなり上衣

を取つてさアやらうぜと元氣一杯です。學生時代はナツバ服着て騒ぎ廻つたこともあるとかで、唯物論的ではあるが、左翼ばりといふ程ではありません」

G「男つぶりも相當で、今二三寸背があつたらなアと、自分でも残念がつて居る。神経痛を治すんだと氣合術を習ひ、學生が頭が痛いなんかいふと『やア！』とかけて呉れるが、さて御自分はいつまでたつても眼の廻りを矢張りビリ／＼させてゐます」

A「竹村豊太郎先生……ホウタロウで通つて居ます。苦學して慶應を出たといふ立教にしては變り種、この人、相當うぬぼれ屋で、俺の細君は非常な美人だと大騒ぎしてたが、行つて見たらそれほどでもなかつた。僕の文章は天下に比なしといつてるが讀んで見ると、なか／＼意味が通じない」

H「僕の英語は外人にも眞似の出來ぬほど奇麗なんだぜといふ口の下からソサイエティと發音します。何時ぞやアメリカから來た學生に發音を直してやつて、反對にそれは違ひますと、こつ

びどくやり込められてからはあまり自慢しなくなりましたが……」

C「細君に決してオイなんていはない。奥さんにリードされてか

日本趣味で訪問すると古風

な大きなお茶碗に底の方へポツチリついで呉れる。酒もタバコもやらないし、苦學生あがりによくある融通の利かない性質で、金融と英經、經濟原論を持つて居ますが、決して試験の範圍をぢめたりしない。研究室では親切に世話して呉れますが、世話をやき過ぎて敬遠されます」

H「山下英夫教授（經濟史、經濟學史）も將來えらくなるだらう。實に熱心だ。子供さんが病氣した時でも、學生の質問には徹夜で調べて來て呉れた。難をいへば京大出身のせむか、参考書として京都派のものばかりをあげる」

A「坊主頭で四十位「白猫のクシャミ」といはれる通り、色白で寸のつまつた顔です。カンニングの防止なんて初めから出來ない相談だよと

嫌め問題を出して試験場で

は用意して來た答案を書き寫させるだけです」

C「色が白くてポチャ／＼してるのは大塚久雄先生（工業政策）もよく似てる。本位田さんの

弟子で、學校へ来てまだホンの二年目の書生さん臭い先生、小石川の下宿へ行つて見ると大變で、古本屋の倉庫だつて、あれほどはないでせう。すわる場所だけがやつと開て居るが、夜はどこへ寝るのだらうと人事ながら心配です」

D「初めて學校へ来た時、どうしてかう學生が騒ぐのだらう。若僧だから甘く見てるんぢやないかつて憤慨しましてね。僕等大塚さんの時間だけ、特に騒ぐんぢやないんですが、先生神經質なのです。少しガタ／＼すると、講義そつちのけで、生徒を叱る方が専門になつちやいますよ」

B「立教にカボネが居る……と投書をしたら、警視廳大狼狽でせうが、ニツクネーム「カボネ」事外人教授のポール・ラッシュ氏は。全く瓜二つですが

この先生ヨタモノ氣取りで

學生と銀座へのしたり、本牧なども通だとの評判。歐洲大戰にも出たし、野球ファンで、選手には減法點が甘い。選手を見かけるとニコ／＼して話しかけますが、カボネ先生日本語が出来ない。選手の方はベラ／＼は不得手と来てゐますから、頭かき／＼逃げちまふ」

F「カボネはいゝよ。實に愉快なんだ。部屋へ行つて見たところがね、總長の寫眞とターキーのプロマイドが仲よく並べてあるのさ。代り目毎には必ず行く。行けばターキーとターキーと臆面

もなく我鳴り立てる。對アメリカの財政工作になくてならぬ人物で、大抵百圓札ぐらゐのポケットに忍ばせてゐる……と、これは評判倒れです」

G「運動場なんかで逢ふと、ゲンコツをニユツと突き出して、やア——と肩を引つばたく。教授のつもりなんだか、友達と思つていゝのか」

F「元學長の婿が二人居ます。杉浦前學長の愛婿中根不羈雄教授と、その前の學長故元田作之進氏のお嬢さんをもつた松下正壽氏、松下さん（國際法）の方は立教始まつて以來の秀才と謳はれ、謹嚴さを買はれて大學に残り

學長の娘と學位を兩手に

花の幸運兒、眞面目な勉強家といふのを一枚看板に出世したゞけあつて、酒も、タバコもやらない。ところがフロリダだつたかな、いゝ氣持ちで踊つてゐるのを學生に見つかつて、逃げ出したといふ話もある」

D「中根さんは信託法、手形法などですが、その破産法は痛快千萬だ。いはく

諸君なるべく借金せよ？

借金した以上は返すもんぢやない、そのために破産法といふものがあるぢやないか、お望みなら

返さないで済む方法を教へよう……」

C「剣道部長、将棋部長、囲碁部長と懲張つた上、水泳もなか／＼やる。碁は初段の免状持ちで學内随一、競技會なんかも必ず出て来る。送別會などには十圓札ぐらゐをほふり出して二次會に行つて來給へなんかとすこぶる太つ腹だが身なりは汚い」

A「出身は帝大、朝鮮の信託を研究して論文を書くんだといつてますが遠い將來の學部長は中根、松下邊から出るんぢやないでせうか」

G「民間で一番早くスキーをやつた人、労働法の星野展雄教授、金持の労働法だと蔭口きかれろのもその筈で

渡邊さんと深い關係があり

フランス留學にも援助してもらつた。必ず十分ばかりおくれて鼻唄まじりで御入來だ。稿のモニングといふ變つたなりで、パリ仕込の若造り、もう五十に手が届くんではせうが……」

E「商法の三橋久美、民法の竹田雪次郎兩氏とも控訴院とかけ持です。竹田さんはタバコをのみすぎで、聲がすゝけちまつた。大きい聲だが古レコードみたいで聞き取れない。授業時間中が待ち切れず途中で十分間の中入りをやつて、うまさうに一服吸ひつけます」

G「三橋さんは「自分はかう思ふ」と自説萬能、自分が扱つた事件を材料に

生きた講義をして呉れます

が、聞いてると商法といふものを三橋さん一人で作つたみたいです。いふまでもなく先生の説を書かなかや點を呉れません」

A「刑法の江刺喜四郎先生は牧野博士の弟子で、本職は辯護士ですが、遊びに行くとき大喜びで、ダンスホールなどへつれてつて呉れます。經濟は先づこの邊で……」

文 學 部

M「ニックネームのある先生は少いが、文學部長小島茂雄、史學科長小林秀雄の兩先生は別格です。小林さんがオヤヂ、小島さんがヒゲダルマ」

N「小島ひげをともいふし、ひげのをぢさんでも通る。馬の毛みたいなのがところ嫌はず生えてちよつと菅原傳代議士……政治家型の顔だね。頭は可なりうすいがひげに見とれて氣がつかない。碁は初段です」

O「水戸師範に居たころ、校長の悪口を新聞に書いて退校されたのださうな」

R「戀愛小説を書いたためだともいふぜ」

P「水戸魂の溢れた蠻カラの親玉、立教中學校長を兼ねて居ますが授業中に口笛でも吹かうものならひつぱり出してぶんなぐる」

聞く前には用意周到に眼鏡

をはずす。先生が眼鏡を取つたらオツカナイですぞ。してその後では「愛するが故になぐるのだ」と、生徒にだか自分にだか必ず言ひ譯をします」

M「大學では？」

N「流石になぐりませんね」

P「教練は生きた修身なり……といふのがモットーで、だから上智や何かは問題を起しても、立教の教練は都下有数の折紙付きです。日露戦争に通譯かなんかで出征して、俄然教練が好きになつたさうです」

O「今の禮拜堂主任牧師高松さんと立教の學生時代一番を争ひ二人の間では必ず英語で話す約束が出来た。帝大宗教科を姉崎氏が代表したやうに、過去において立教宗教科を代表した人で

R「中學では修身か何か持つてゐるが、大學では今講座を持つてゐません。次の學長候補……といふより、本當はもう學長になつてゐるべき筈が、今の木村學長に油揚をさらはれた形です」
S「學長もさうだが、小島部長も學生の建言なんか相手にしない。たゞ小島さんの方はどうせ容れないにしても一應話だけは聞く。それだけ學長より人氣もある譯で

政治的手腕なら立教唯一だ

全國中學校長會など一人でガツチリと押へてゐる」

T「小林秀雄史學科長は評論家に例の同姓同名がゐるので三日に一度位間違へられる。髪をのばした文士の卵が玄關へ來ると、あゝ君は違ふよ。こつちぢやないよ……と、馴れてるから一目見ればわかるさうです」

S「ひどい近眼で、一日にバットを七箱から八箱、一本吸つてゐる中に次のへ火をつけて準備工作をする。相手を煙にまくといふわけで談論風發、應對振りは手に入つたものです」

R「小林さんの豫科長時代はよかつたね。佐々木邦氏の次男坊そつくりのあの脱俗的風貌で、ポツリ／＼話すのが何んともいへない。五十五、六になるだらうが、若い者同様唯物史觀も理解するし、徹底的のリベラリストだ。西洋史、ギリシヤ、ローマの史學をやつて、前には國學院に

も行つてたが芳賀矢一博士と喧嘩して立教専属になつた」

O「大學時代、好いて好かれた

ロマンスの仲を割かれたと

いふ話もあります。そのブローケンハートがあひげもちや仙人たらしめたんだとの説もあります」

P「白鳥庫吉氏の息子で白鳥清先生、名前は浪漫派詩人だが、これが東洋史専攻で支那の民間史の權威「東洋學報」に三年連続で「龍の研究」を載せて大當りを占めた。王道主義だから、勿論マルクス絶對反對」

N「シヤリコウベで酒を呑まじなひだか儀式だか支那の一部にある。これの研究に手を染めた時、いくら考へてもわからぬのでつひに永久に考へ込んぢまひました……といふのは、先生の頭は胴體に對して六十度位に曲つてゐるのです」

M「天徳寺の坊さんが蜂に……と唄にまで唄はれた芝愛宕下の名利天徳寺の和尚さんがミツシヨン立教の先生なんですから一寸愉快でせう。日本史、古文書學の藤本了泰さんです」

S「酔つばらへば労働者とチャカチャカ、チャンチャンもやるし、見るからに南都北嶺華やか

なりし頃の僧兵、朴齒の足駄に薙刀持たせれば、正に小型辨慶です」

O「このミニチュア辨慶さん、端唄なんかもうまくて粹人ですが、寺へ歸つたが最後斗酒なほ辭せず」

M「今日はあるから……と白い着物で、コロモのはいつたカバンを持つて學校へ來ます。あれとは

學校の歸りに法事か葬式へ

廻ることを意味するです」

T「お布施がタンマリはいるとおこつて呉れる。しかし何時でも池袋附近で、大抵は紅茶か、せい一杯奮發してビール位です。東大出身で頭は鋭い。何か一つ當れば友松圓諦さん位には名が賣れるでせう」

R「子供さんには絶對放任主義で、従つて無暗にヤンチャで、この間も子供に案内されて初めてエノケンへ行つたといつてみました」

P「駒井和愛……カヅタカとかカヅヨシとか讀むさうですが名は體を現すで實にコマイ男、どッ見ても子供です、専門が考古學ですから多分發掘の時なんかの便宜に寸法をちよめたんだらう

との學説が一致して居る」(笑聲)

S「ロシア、ドイツ、それから支那語もやつて去年學術研究團で滿洲に行つた時も、五尺足らずのやせこけた五體から、四六時中各國語をしやべりちらすので、外人が、あの子なか／＼ませてるよ……」(笑聲)

N「二十九や三十にはなるんでせうが、どうしても先生とは見えぬ。自分よりも大きなカバンに一杯本をつめて、持つて歩いてますが、史學科では最も勉強する一人でせう。女學生みたいな、いともやさしき口調で

そのくせ講義振りは流暢明快

必ず教壇に爪立つてゐます。もつとも腰かけると見えなくなつちまひますので……」

O「獨身で、芝居や、映畫や、酒の方も味はふ事は大好きと見えて學生を連れて泳ぎ出しますが、二三杯で酔つちまひます、これは入れ物が小さいせいで、稱して物理的法則といひます」

T「十河佑真先生は青年時代がなかつたと、何時もこぼしてゐる。二十四で早大を出たが、卒業式が三月で、六月にはもうパパになつちやつた。獨身者の氣安さで絲の切れた風船みたいに遊び歩く氣持は、今になつてもつひに理解出來ないと歎じてゐます」

S「文學青年肌のロマンチストで學校へ來たばかりの頃、學生にいちめられ、おれはもうやめると休んぢまつた事もあります」

P「奥さんをもらふ時などは心臓がよく破れなかつたものと、大いにお察しします。英語の譯し方で生徒と喧嘩して、しまひに泣き聲を出したのは氣の毒だつたが、純情といふ點ではこの上なし、學徒として一つの上き典型です」

R「何れの國のどの歴史も、世界史の一連環に過ぎぬ。日本史の研究には須く世界の動靜を探らねばならん……といふのが、毎時間の初めに必ず中村勝麿呂先生の唱へるお題目です。日本近世史をやつてますが、ロシアの東方經略とアメリカの太平洋政策とがぶつつかつて日本開國史は出來た。で、米露兩勢力の衝突を知るものは、北千島からカムチャッカに住む銀狐である。銀狐の手さはりは、赤の安物とは全く違ふ。銀狐の毛皮に指を觸れて瞑想すれば、幕末開港史は聞かすして明かになる……と毎年三越の毛皮展覽會に學生を連れて實地教授に行き、デパート・ガールのいやな顔など問題にせず、小一時間は開國史の幻想に耽ります」

O「彦根武士の血をうけた大日本主義者、いはく

國防は滿洲にあらず支那

大陸なり。またはいく戦ふは方に今なり……といふ超念進論で、東郷元帥國葬の日は、東郷禮讚で時間を終りました。帝大史料編纂所とかけ持ち」

N「先月二十七日に古稀の祝をした漢文の本庄桂介先生はひげの小島先生を教へたことがあるといふ學實的存在、小島さんの留學する時、本庄先生の老子論を持つて行つて、あちらで譯したのが逆輸入されて博士になつたんです。本庄さんはおれは學位を取つたやうなもんだと威張つてます」

M「興がわくと教室で易を立てます。毎年元旦には笹竹を握つて一ケ年の運勢を見るのが吉例ですが、昭和六年の正月には「大事件あり」と現はれた。即ち滿洲事件を立派に豫言したと自慢するんですが、それを發表したのは事變以後なんです」

R「後からいつたのでは人は信用しませんよといつたら「馬鹿をいへ、徒らに豫言などして衆愚を惑はしてはイカン、ひとり胸中に疊込んで、なるほど當つたなと自ら満足」するのが本當の易堂だと申しました」

S「熱心なクリスチャンの辭にチャン／＼酒を呑む。新宿のたから亭などが宿坊で、確か先生の詩が掛つてる筈です」

道樂氣を出して英語を初め

たんですが、矢張り漢文は漢文で、一人一業主義の方が、先生の貫祿を落とさなくていいのに、と他でヒヤ／＼して居ります」

N「たつた一度だけ洋服で出て來たことがあります、あまり珍しいので寫眞が立教新聞に載りました」

M「といふ譯ですから、自宅は勿論見越しの松に北山丸太で……と思つて訪ねたら、驚きましたね、赤煉瓦のモダン作りです。この先生にこの家だけは、相對性原理でも割り切れません」

S「歴史哲學の田代秀徳先生は立教切つての笑はぬ男といふ程度です。これで史學科を終り次は英文科と行きませう」

A「英文科のオン大、否、我國英文學界の大御所岡村先生、令兄は美術界の大先輩岡倉覺三氏で、息子は新築地の演出史郎君、お嬢さんは藤森成吉氏に嫁いで居ます。だから繪もわかる、小話も好きです」

B「平家ガニとか何とかのニツク・ネームが示す通りの御面相だが、築地も見に行く、トーキも聴きに行く、新しいものが好きなんだね」

先生を稼ぎ、横濱へ来て外人とつき合ふやうになつてから轉向して帝大英文科へ入つた、國文を一通りやつたものでなければ、本當の英文學はわかるもんかといふタンカを切るが、講義はあまりに文學的だといふ評判」

C「一時間に二十回位鼻をつまんだり、ネクタイをいぢつたりする。平手でかう頬の邊から撫で、来てツルリと指と指の間へ鼻が頭を出したところでおもむろにその鼻をつまむ。同じモーションで一時間二十回です」

D「江古田に家を建て貸家まで持つて堂々たる出陣身氣です。近頃は英文學界などに相當出して呉れます」

E「日本語も英語のやうに語法を統一しろ……のスローガンを掲げ、かつてのローマ字論から、今度は日本文法論で大童です」

F「高垣松雄教授こそ心の随までプロフェッサーだと思ふ。博學で、一つの例を示すにも六十冊ばかりの参考書名をズラリとあげ、時計など完全に無視してしまふ。自分が出来るものだから點は辛いし

うつかり半端りの羽織など

しよものなら、それは誰のなんといふ本の第何ページ何行目にありますか？と来る」

B「講義は聞いてるとかたいが、家へ歸つて読み直すと脅調子だ。豫習せずに行くとかわからんが、よく下読みして聞くと非常に面白い。みがくほど光るダイヤモンド講義です。文學を社會との關聯において唯物史觀の視角から見ようとする人で、社會學講座も立派にやれる力があります。惜しいかな胸を病んでツシから通つて居ますが、若し體力と經濟的餘裕を充分に與へたら、素晴らしい仕事をするでせう」

A「女子大講師としては非常にもてるさうですし、奥さんはとても美人です。學長は立教の學實的存在だと賞める。雜誌部々長で學生を連れて映畫見に行つたり……これは有名な小説の映畫化を見るためでせうが驚いたのはあの堅人の先生が、流行唄をよく知つてゐるんです

唄はせると調子外れですが

數は實によく知つてる。不思議に思つたら、實は自宅の隣がカフェエで、每晚レコードが不可抗力的に聞えちやうんだつて……」

C「富田彬先生は大正十二年（？）かの東大出身で十一谷義三郎氏と大の仲良し、先生の方が

一年後輩です。現代文學をやるにふさはしい文學青年で「お嬢さん」といふニック・ネーム、この奥さんも高垣さんの劣らぬシヤンでいらせられます」

D「岡倉オン大と年齢では肩を並べる大久保彦左衛門事英語學と會話の根岸由太郎老、よつちやんといふ方が早わかりです。一言居士で、相當な精力家で外人との交際がすきです。その語學は文法なんかどうだつていゝ、何しろわかることが第一だといふ徹底實踐主義で、従つて翻譯も澤山やつてます。息子が映畫監督をしてるせむか北村小松君のものを譯したり、シナリオの翻譯を手傳つたり

續料の方が遙かにサラリ

より多いんぢやないか」

E「杉浦前學長が學生時代に彦左老の通譯で、神學講義を聞いたつてんですから大したもんです。年の功といひますと、外人關係の就職など、よく世話して呉れます」

F「現在は辯論部長ですが、頼まれれば越後までも卓をたゝきに行く。知人は政友に多いやうですが、民政御座れ、同盟御座れ、たゞ左翼は大嫌ひで、常にいはく辯論は技術を學べばいゝので、思想とは別だ。僕が政談演説をやるのは健康のためだ。辯論はスポーツの一種なり……と

ちよつとした挨拶にも一時間位スポーツを續けますが、先生の健康のために聞かされる方こそ、いゝ面の皮だと思ふです」

G「英語演説を始めると、その傍若無人さに外人の方が壓倒される。今一つの癖は人の通譯するのを傍から必ずけなす。何時かあちらのエライ人が来て、帝大の市河三喜博士が話して居たら、市河君は英文學はわかるが、英語はわからんらしいとつぶやいて居ましたが、

おれならもつと上手に通譯

して見せるが……とはいひませんでした」

E「先づ英語で考へてそれを頭で日本語に直してから話す。だからおれの日本語は手間取るのだといふ。驚いた時とか、あるひは寢言に英語が出る。冗談を英語でいふ岡倉さんと好一對です」

D「岡倉さんも高垣さんも酒もタバコもやりません。もつとも高垣さんは昔は煙で埋まるほど吸つたさうですが……」

G「帝大へも學習院へも行つてゐる人で長澤英二郎教授、この人は必ず學習院のあの制服でやつて來ます。貴族的な風貌、物腰が一異彩です」

B「外人もあれやこれやと多いですが、アメリカ人のスミス氏とフランスタッド氏、カナダのスコット氏、英國のスパックマン氏が代表的です。ミスター・スミスはコロンビアとオックスフォードを出た三十がらみの明朗な先生、奥さんと一緒に

よくフロリダで遊んでみます

苦學した人ださうで、日本で就職して、奥さん（あちらの人）をもらつて、初めて自由になつたのが愉快でならないんでせう」

A「日本人としきりに交際したがるですが、外人教師中、一番シマリ屋との評判もあります」

D「スコットさんは子煩悩だ。日本人以上です。奥さんはスラリとしたフランス美人だが、いつ見ても子供を抱いて居る。日本の骨董品を集め、日本語を研究するために、夫婦で図書館に通つてますが、子供を放すのは図書館へ行く時だけでせう」

F「スパックマン氏の奥さんはソプラノ歌手、御兩人ともヒョロ高くつて驚みたいに首が長い。何か會をやるとミセス・スパックマンは必ず一席唄つて呉れます。毎度のことでもみんな敬遠の居眠りを始めますが、スパックマン先生一人だけ

首を伸したり縮めたり

眼を細くして聞きほれて居るのは、齋藤前首相あたりに見せ度い情景です」

E「スパックマン氏若かりし頃、藤村操式のユウウツの虜となり、瀧の代りに修道院へ……と決心したトタンに今の夫人が現はれた。年を取つても仲がよいのは、さういふ故事來歴によるものといはれます」

G「どうも奥さん評判記みたいになりましたが、スパックマン夫人は上品で聲のよきこと鶴の如く、ミセス・スコットは美しくして子供を可愛がること雉の如く、スミス氏の奥さんは肉體美で夫婦愛のこまやかなこと……さア何にたとへませうか……フランスタッド氏は獨身です」

D「ダグラスが夏やせしたやうな勇敢で、へうきんな面魂、ピアノは玄人藝です。折々萩野綾子女史の伴奏をうけたまはつて、何時の間にか完全な萩野ファンになつちまつた。金使ひが奇麗でよく學生におごつてくれます、極めておとなしい、そして親切な先生です」

B「科長菅園吉氏は豫科長兼任で、奥さんは日本女子大の井上秀子女史の娘さん。この奥さん哲學博士ですが、耳垢をピンへためるのが何よりの趣味で香水の空瓶四本へ一ぱいになつてさうだ。菅さんがあの顔で、奥さんの耳へ耳かきを突つ込んでる風景……は如何に考へても哲學的解釋がつきませんね」

E「菅さんはモダンボーイ(?)だが、金時計を教壇にガチャリと置くなんざア、いさゝか嫌味ですね。講義は懇切丁寧です」

D「田部彌太郎教授は、飯田橋職業紹介所顧問で職業教育の權威

落第坊主のお母さんなどに

泣きつかれると、自分が先づ涙ぐむといふ人情家、ニック・ネームはお醫者さん」

C「牛島義友さんは動物心理學の權威(これは我國で研究してゐる人が少い)で休みは必ず山へ行つたが、四月に奥さんをもらつてからピタリとやめました。島で育つた十六娘のやうにすぐ頬をそめます。今年の春は定めし二人で赤くなり合つたことせう」

K「辻莊一先生は立教音樂部の指揮者、美學と美術史と音楽心理學ですが、モンタージュ型の先生で一通りは何でも心得てる。頭の格好は和製ベートーヴェン」

A「これは文科でいふべきだつたかも知れませんが、ドイツ語の番匠谷英一先生は、獨身教授美望的のです。文句なしに立教隨一の奥さんだ。三高時代に想ひ思はれて共に死線を越えた仲

畫畫は奥さんの手料理を女中

が届けて來ます。奥さんを賞めると授業そつちのけですが、借りた参考書など、お宅へ返しに行

きませうといふと、いゝよ、いゝよ、家まで來なくてもいゝよ(笑聲……)そのくせ行けば矢張り奥さんの顔を見せたがるのです」

F「同じドイツ語の石川練次教授は最初の奥さんに死なれ、滯獨中は某文學女史にモーションをかけられたが、今は二番目の奥さんと睦まじい。御兩人共蛇がすきで、座敷の中までニヨロニヨロさせて居たが、今は犬に轉向し、大きいのや、小さいのや四、五匹も居る。犬嫌ひの學生はとても訪問出來んです」

H「落合吉之助科長は神學院長を兼ねてゐます。英語は元より、ヘブライ語も日本で何人とかいはれる、黒田雅子さん問題で、エチオピアから來た文書を譯して呉れと外務省から、頼まれたが、ヘブライ語とはまた違ふのでさすがの先生もペンを投げた」

I「先生に途中で逢ふと「君イ」と尻上りに呼びかける。だまつて行き違ふと二三歩行つてから「キミイ、キミイ」と熊谷もどきに呼び返す。呼んだものゝ用はないから、「君イはどこへ行く、僕は停車場へ行くところだよ」といつた工合で、先天的社交家といふんでせう」

B「山縣雄三先生。オトゾーと讀みます。が、日本野球史の第一頁……いな野球史にも載らぬほど古い、グローブもミットもない頃で、築地の外人と素手で試合したがそれにもあきてや

めちやつたら、しばらくして日本野球史が始まつた。今でも空地を通ると

子供試合のアンバイヤを買

つて出るが、大抵ボールにしちやうので抗議され、ムキになつて子供と大立廻りをやつたり……先生をうまくおだてたら、神宮球場七十餘歳の老嬢を提げて、フレイフレイ位やりかねないんだがなア」

O「お父さんと一つ屋根の下に住んでた頃、父子は口をきかずに、お互に用事があれば紙に書いて相手の机へおいておく。返事もその通り、學校でも笑ふのは一年に一度きり、何時笑ふかといふと學年試験の時です。むづかしい顔で問題用紙をくばつて歩く「先生むづかしいですなア」といふとウフフと陰性に笑ふ」

D「今は子息二人と寡暮らし、羽織袴で風呂敷下げて、八百屋、魚屋へ買ひ出しに行きます。何時だつたか空巢に一切合財持つて行かれてスツテン、教會の連中が氣の毒がつて着物をこさへてあげました」

K「呑氣な辭に皮肉屋で、かつて省線へ乗つた時、何しろ羊羹色の紋付に洋傘をかつぎ、兵隊さんのやうな縞シャツがのぞいて居るので、ジロ／＼と視線が集まる。先生ムカ／＼としたらし

かつたが、折よく乗合せた總長の傍らへ行つて、ベラ／＼と立板に水の會話、驚く乗客を尻目に顔をなで、居ましたつけ」

便所掃除の罰則を度々喰

G「日本宗教史の飯田寛一教授は、若かりし日の修道院生活で、無言の行がどうしても守れずつた。相手が一言に對して自分は三時間といふ主義、一昨年フランス留學を命ぜられてドイツへ行つちまひ、歸りがけにフランスへ申請的に寄つて来たといふ豪快な先生です」

A「口角あわを……いや唾を飛ばすので、聞き手は後へ／＼と下る。映畫もどきの試験別居を實行し、お子さんは田舎の中學に、先生は小石川の下宿に別れ／＼の生活です。理由は勉強し度いからといふ。しかし先生が勉強するには別居よりも言葉のない國へ行く方がいゝでせう」

E「村尾昇一先生は一年中説教に歩いてゐます。東京に居れば、奥さんとレヴェーを見に行つてます、おしやべりでは飯田先生が折紙をつけた程なんです」

K「中學を途中でやめて……丁度山陰線の敷ける頃でしたが、叔父さんが工事を引受けてたので

現場監督かなんかを手傳ひ

再び大阪の桃谷中學校にはひり、川口から二里の道を毎日テクつた。四ツ橋まで来るとグツタリして水の流れを見て憂鬱になつた。立志傳中の人です」

F「場面は一轉してカナダ、トロント大學の留學から歸り其名望家の令嬢をもらひました。奥さんの従兄がPCLの専務で、奥さんはキーキーのファンで、そんな事から二人でいろ／＼と見て歩きます。新しいものなら、何でもやつて見なければ気が済まず、銀座へ出れば夫婦でコリントをやり、先生の方が必ず負けます。相當博學で新しいものなら清濁合せ吞みます。そこで子供さんは東京オンドがうまいです」

H「最後に小林彦五郎氏、古い古い神學博士で、これはけだし歴卷です。若い頃信者の家を訪ねたら「今日は結婚ですね」といはれ、怪訝な顔で「誰の？」とたづねたら、「先生あなたのですよ、何をぼんやりしてらつしやるんです」。そこでアツと氣がついて間一髪、式場へすべり込んだ。お葬式を忘れるなんか今でもお茶の子で、殊にリーグ戦の日は大抵忘れれます。授業も野球の日は早く切上げてくれます」

C「三年間先生の研究室で勉強し、論文も先生に出して小林門下の愛弟子のつもりでゐた學生が、道であつてコンチは……をいつたら「どなたでしたつけ？」といふ御挨拶

呆氣に取られて名刺を出し

先生の御指導によつてこれ／＼と説明したら、初めて思ひ出してあゝさうでしたか……」

A「傘を何十回となく忘れて来て奥さんに叱られます。ある日歸り途中で氣がつき、また叱られては……と傘屋へ寄つて、同じやうなものを買つて歸つた。ところが奥さんびつくり、今日は傘を持つて行かなかつたのに、どこから持つて来たんです？……」(笑聲)

D「終點で先づ電車から奥さんが降りた、續いて先生が降りたんですが、奥さんは振り返つて大いに驚き「あなた坊やをどうしたんです？」先生頭を撫でながら、エ、と、確かに抱いてた筈だが……と、あわてゝ電車を追かけた傑作もあります」

F「しかし非常な人格者で、立教女學校々長を兼ねてますが立教の名を知らなくても、小林彦五郎の名を信用して、娘を入れる父兄もあります。海外に友人が多く、國際手紙外交……日支事變當時など、何千通の手紙を出して

個人的に日本の立場を理解

させるに骨折りました。外務省あたりから、大いに感謝されていゝ人です」

明
治
大
學

法 學 部

學生尊敬の的

A「法學部長水口吉藏博士に、先づ敬意を表さうぢやないか？」

B「さうだ、われらが明治の大先輩であるし、法學部諸教授中の最長老だしね」

C「商法殊に手形法、保險法の泰斗で現大審院判事、文句なしに學生の尊敬の的だが、風采は甚だ上らない」

E「先生のまたの名はトツチャン小僧と申上げる。身の丈四尺豊か、見上げるやうなステッキをついて、肩をふつて、グツと反り身になつて、省線御茶の水驛から駿河臺の學校まで三町足らずを、無慮十五分もかゝつて、歩いてくる姿は相當なもんだ」

F「式でもある時はこれは偉觀といふもんだと思ふよ。襦袢みたいな燕尾服……といつて色彩ぢやないんだ。燕尾服はみんな黒だからね。とにかく、後から見たらズボンは見えないんだ」

おやさしい先生

E「判決を申渡しつけてるせゐか、聲は莊重そのものだ」

F「盗い聲だ。浪花節にはいゝと思ふんだが……」

H嬢「男子の學生たちはどうか知りませんが、私たち女子學生にはそりや親切ないゝ先生ですわ、孫をいたはり教ふるといつた風です」

E「ホホー、あのいかつい、ちよつと見たらこはいやうな爺いさんですか？」

I嬢「お言葉のお癖でも……それでネ、手形はネ……とおつしやるあのおやさしい響をもつた「ネ」が一時間に二百幾つある位ですもの」

H嬢「女子部の方では、先生方はみんななどなたも御親切ですわ」

岡朝先生萬歳！

B「つぎは岡田朝太郎博士に敬意を表さうぢやないか。法學部の學生は、みんなこの先生が好きだと思ふが……」

E「法科ばかりぢやない、一般的にみんな岡テウ先生萬歳だよ。刑法の大家としてばかりでなく、支那通として誰知らぬ者のない位社會的に有名な學者をとらへて、岡テウなどは以ての外だが、しかし同じく刑法の岡田庄作先生と手ツ取り早く區別するためにも、またみんなをワァーッと笑はしておいてサツと授業を切り上げるあの先生には、どうしても岡テウでなくつちや親し

みは出ないよ」

A「講義中事毎に引例が出るので、聞いている刑法が日本のものやら、支那の刑法やらわからなくなつてくるね」

I嬢「さうですわ、先生が支那の奥地にゐられた時には、不便なので何から何まで——お産婆さんまでなさつたお話まで出るんですものね」

講義の終り

F「しかし明治の學生は岡朝さんがゐるんで勉強するやうなもんだよ。先生がいつもいはれる——ワシには大變美しい娘がある。諸君のうちで誰でも勉強して高文の司法官試験を一番で通れ、さうすりや、娘にノシをつけて差上げる——これだよ、この言葉あるがために、みんなが我こそと馬力をかけるんだ」

G「先生は落とし嘶がうまいからなア。學生は逆立しても彌次にかけちや太刀打できないよ」

E「精間の研究もしてるといふし、酒は底なしだから、一升、二升といふ量ではいはず、一日飲んだ、二日間飲みつゞけたといつて計量する位だから、固つくるしい學者とは學者がちがふよ」

G「満洲國立法院長趙欣伯博士の恩師だよ。先生も鼻が高いといふもんだ。先生が歩くときは、片方の肩を五寸位はそびやかして歩くがそのせいかな」

臺に入つた川柳

B「ありや昔からだよ。岡朝先生ぐらゐ、ものに構はぬ人はないんだよ。どこかである嚴肅な式に参列した時、ズラリと並んだ鹿爪らしい面をよそに、途中食つてきたお汁粉がこぼれて、フロックの汚れた個所を一生懸命にもんちや唾をつけ／＼してゐて、見てゐるはたでヒヤ／＼したといふ位だからね」

A「先生の川柳こそは隠れなきものだが、人情の機微をうがつて悟脱すると、あゝいふ風に光風霽月酒々落々になるんだね」

F「川柳では三面子と號し、酒を飲んで踊り出す藝とは、同じ先生の藝でも藝の品が違ふ釣り革の娘はむこい苦勞をし」

車中所見一句だ。どうだい三面子正に八面六臂だ」

地球の引力關係

G「講義が面白くて、何時間聴いても厭きず、一時間中に一度も笑はせずゐることのない先

生といへば、他に赤神良讓教授がゐるよ」

F「第一聲が一風ある聲でね、ちよつと寄席へでも行つてるやうだ」

A「社會學を講じられるんだがみんな稱してナンセンス社會學と名づけてる。ひと頃三原山心中盛んなりし頃だ。先生の説に従へば、三原山上の噴火口から飛込むのも、またビルディングの屋上から飛降り自殺をするのも、ありやみんな地球の引力の關係だ。すると引力といふものも個人的なもので、僕には一向に作用せぬと見える。その證據には僕自信は飛び込んだり飛び降りたりしたくない……と詭辯をまことしやかに弄したり、またいふことが一々逆説的だ」

B「しかし先生が洋行中フランスで便所がどこかわからず、とう／＼靴をぬいでその中にやらかしたといふ話は、そのまゝ受けとつていゝ眞實だよ」

隱し藝をもつた人

B「三面子岡朝さんの川柳は別格としても、教授中には随分優秀な隱し藝をもつた人がゐるから、一つ隱し藝に敬意を表さうぢやないか？」

C「森山武市郎教授の安來節はどうだい？相當なモンどころぢやないぜ。なにしろ本場は出雲の松江育ちだ」

F「オイソレとはなか／＼出さないさうだ。その代り一たびヤスキーイーイーと歌ひ出せば、空かけるカリも翼を止むるといふ」

A「教室において先生が債權を講じられる音吐もまた馴れたるものだ」

F「控訴院検事、鋭すぎる位頭のいい人だ。こんど理事になつたが、あゝいふ正しい人で、しかも大腹中の人にわれ／＼の明治を立派にしていたよきものだね」

年中モーニング

A「こんど理事をやめた大谷美隆先生は、隠し藝のことは一向聞かぬが……」

B「年中モーニングで来る人は多分ないだらう」

B「大谷先生は明治大學の先輩で、本學最初の海外留學生で、非常な秀才だつたんだ。しかし身體が脂肪ぶとりするのに正比例して、學問研究より學校行政などに興味を持つてきたんだ。段々わからない講義になつてきたらしいといふことだ」

ズー辯の都々逸

E「冠木精喜教授も素晴らしい隠し藝の持主ださうだね」

G「こちらは森山先生のやうに朗々流ではないんだ。粹向きの四疊半もの、都々逸だ。たゞ恨

むらくは、少し訛の入つたズー辯だ」

F「スンズウだてスンからけふまで盡くすたけれどチンシヤンか?」

野球の名字?

A「森吉義旭教授の野球批評などは隠し藝の中に入らないかな」

B「さうだ、昔は批評を頼まれて堂々と発表したこともあるさうだし、大投手だつたともいふぜ」

F「いまは神経衰弱でね、ちよつと投げられないが、またそのうち投げるといつてられるよ」

E「大谷さんも、その昔アメリカでは大いに野球に凝つたといふことだが……」

F「留學中あちらでは、よくホームランをかつとばしたさうだが、日本ではまた一本も打たないさうだ」

B「森吉先生のイタリアにおけるムッソリーニとの會見談には吹き飛ばされるね。先生この頃はすつかりファッショになつて、陸軍省囑託で講演して歩いてられる」

身の入る講義

A「親族法の野田孝明教授には狂歌があるよ。まだ作を拜見したことはないが……」
B「女子部の方では野田先生が一番人氣がいゝんださうですね」
H嬢「エ、一年で第一ですわ。お教室は聴講で一杯ですし……」
E「非常に勉強してられるさうだ。だから教室でもあくまでも真面目に、汗を流して講義してくれるので、聴いてゐて、授業がすんで疲れを覚えるのは、あの先生の時間だけだ」
F「若いだけに僕等若い者の氣持もよくわかつてくれるしね」

綿名五郎さん

F「岩本勇次郎教授のイビキは隠し藝のうちに入らないかい。そりやすごいもんだよ。カン聲雷の如しといふが、先生と汽車で寝臺を上下してゐると、ぐわう／＼たる汽車の響にまぎれず、アザヤカなイビキで、眠られないといふからなア」

A「民事訴訟法の講座をもつてられるが、また明治の野球部長で會我廼屋にソツクリの體つきから——五郎さん——といふアダ名で親しまれてゐる親切な先生だ」

藏書家で有名

G「法制史の尾佐竹猛先生は、珍書古書の藏書家であることは世間一般周知のことだが、珍畫

の蒐集家だといふことも聞いた」

B「ローマ法の佐伯好郎先生は和製バーナード・ショウといった調子の皮肉屋の老人だが、専門のローマ法以外、景氣の研究では世界的の學者だ。これこそ本當に見事な隠し藝だらうね」

商 學 部

不老長壽の藥

A「諸君、われ／＼法科の諸先生隠し藝論も、こゝらで商學部の方に譲らうぢやないかい？」

P「待つてましたツ!!」

C「われ／＼の商科の先生といへども、隠し藝その他奇行奇癖にかけては、あへて遜色はなしぜ」

J「先づ商學部長志田輝太郎先生に敬意を表するとして……この老來益々カクシヤクたるおぢいさんの、不老長生の秘藥は何か知つてるかい？」

K「なにしろ、先生は大へんな金持で、一の官の邸宅は門を入つてから玄關まで、道に迷ふほど豪壯なものだといふから、蓬萊にありと傳ふ不老長壽の藥でも、金にあかして探してゐやうぢ

やないか？」

J「ところが、それが金五十錢也の鰻井だよ。先生は雨が降つても風が吹いても、晝飯は鰻井ときまつてるんだ」

O「あの向ふ意地の強いところも、そこから来るのかな」

L「いつだったか、一の宮から通ふ毎日の電車で、一の宮驛は兎に角顔だから、改札はツイと通つて来たが、乗つてからの檢札に、パスを忘れてゐたさうだ。するとその車掌が、新しい車掌でね、困りますとかなんとかいつたのに先生スツカリ腹を立て、一の宮の志田を知らんか——と怒鳴りつけたさうだよ」

K「一の宮商業學校長でもあるし、一の宮の開拓者だからね」

M「野球に負けると、教室でかん／＼に怒られる」

N「さうだ、この前慶明戦に負けた時は大憤慨で、みんな怒鳴りつけられてね」

P「商法と保険學の權威者で、將來明治の學長たるべき人だ」

詩吟が大得意

N「太田黒敏男先生も野球がすきだね。自分でもやるが、セカンドなんかうまいもんだ」

P「先生の一番お得意なのは、高等學校時代からやつてる俳句よりなにより、詩吟ださうだ。毎晩風呂に入つては、うなつて悦に入つてるとか……」

J「殊に昨年博士になられてからは、一段と聲にハリが出てきたさうだよ」

スポーツ先生

P「春日井薫先生のあらゆるスポーツに通曉してゐることは驚くべきものがあるね。野球こそ、水泳こそ……、もつとも水泳は水泳部長だから殊にだが……ゴルフでも何でも……」

M「いや口だけだよ」

O「さうぢやないよ。ホントにうまいんだよ。その證據は先生のあの顔の色だ。眞つ黒ぢやないか？」

M「ありや生れながらの黒さだよ。スポーツマンは色は黒いけれども、逆は必ずしも眞ならず……」

Q「あの先生のヒゲの生したては、チツとも氣がつかなかつたよ。ヒゲの黒さと顔の地の黒さと同じだね」

L「ヒデーことをいふナ」

K「勉強家で眞摯な學者だよ。いつも新しい材料で、新鮮な講義をしてくれる」

ヨウ商工大臣

N「商學博士田中實先生といふよりも、代議士田中實氏のホラはデカイネ」

M「工業政策、商業政策よりも民政黨の政綱を聞かされる方が大部分だよ」

K「教室に入つて教壇に立つなり、オモムロに銀時計を出して、咳一咳……先生スツカリ商工大臣にでもなつたつもりだよ」

教授野球團

P「どこでもさうだらうが、殊に明治には野球ファンの先生がそろつてるやうだね、六大學リーグ戦に明治が負けでもしたら、毎時間來る先生、來る先生に、やれ練習が足りないの、やれ應援が悪いのと、代る代る囂鳴られるが、しかしあれもうれしいものゝ一つだね」

M「明大教授野球團まで出來てるんだからね。なにしろそろつて野球は飯より好きだし、批評だけは微に入り細を穿ち高等戰術までにも論及するんだが、一旦、身自ら試みるとなつたら、骨は硬し、手足は進退思ふにまかせず、結局餘興として笑つちまふことになるんだ。しかしそこへゆくと「瀧さん」なんぞは、本格的だよ。先生チームのピッチャーは勿體ないくらゐだ」

米國そだち

J「松本瀧藏先生かい？」

H「あの人は當り前だよ、故あつて米國育ち、日本に歸つて廣陵中學に入り四番を打つてたんぢやないか？明治に入つて野球部から教授になつた人だからなア」

N「アメリカ生れの瀧さんに一番困つたのは國語ださうだ。およそオレたちとは反對だなア」

O「奥さんも向ふ生れなんだらう？」

K「さうだ。モダンで奇麗な奥さんだよ。それに瀧さん、また親切なんだ、向ふ流にね」

J「この前米國野球團が來朝したときなど、瀧さん夫妻が大いに東京を案内して、得意満面だつたんださうだ」

N「日頃からあれで落晰は堂に入つたもんだからなア」

O「専門の廣告學も、アメリカで發達した學だ。それに先生は世話すきでね。アメリカ歸りや郷里の者などいつでも先生の家には二人や三人ゴロ／＼してるよ」

M「さういへば田中實先生も世話すきだよ、いつだつたか野球部で名古屋に行つたとき、先生一人で走り廻つて世話して下すつて全く感激したよ」

K「話しは飛ぶが、前野球部長の内海弘藏先生は我國野球界の恩人ともいふべき人なんだが、あんなタバコのすきな人は見たことがないね。ピクニックに行つて、渡舟から川へ落つこつても、葉巻だけはくはへたまんま浮き上つて出て來たつて話しだよ」

O「徒然草の研究では日本一だといふが、學内人望もけだし隨一だらうね」

J「豫科長小林秀穂先生も、シェークスピア研究では第二の坪内逍遙といはれる人で、校の外に信頼が厚い。學生が遊びに行くと「ヨウ來たか」とばかり心おきなく話しをしてくれるので實にうれしね」

N「一パイ聞召せば切々たる追分が出るし……」

M「俳句もひねくるし……」

O「ひねくるどころぢやないよ空々と號して、初雁誌上では俳名さく／＼たるものぢやないか

?

いくつになつても詩人の感覺は新しいね」

P「詩人といへば松本玉喜先生は、英國で教育をうけて來た人だから、講義もガツ／＼してゐないよ。教室を「詩の國」にしてしまふといふのはあの先生のことだ」

J「クリスチャンで、情熱そのものゝ人だ」

K「情熱家といふよりもむしろ火の玉の如き男といへば、こゝに應援團部長太田重徳先生がゐるよ」

O「かつて一高時代の名應援團長だつた人だよ。當時のドウ猛以て思ふべしだ」

M「先生が一度び應援演説で壇上に立たんか、舌端火を吐く如くその火の玉のやうな情熱を叩きつけるが、あれでお家にかへれば十を頭に十一人……」

N「よせやい、それ程ぢやないが、兎に角子福長者で、しかも地みちな數學の先生とは、一寸思へないね」

P「野球ファンといふよりむしろ狂の字に近いのは瀬戸彌一郎先生だ。見てるのがジレつたく

て、ドレワシにかせ……とばかり飛込んでくるんだ」

K「そして先生は誰がなんといはうと頑としてサードをやる。そのくせ球はファーストまでは決して届かないので、どんな脚ののろい打者でもサードに打ちさへすりやセーフだ」

M「先生のかどやかしい球歴において、ヒットは無慮一本、しかも二塁打だ。それといふのも實を申せばね、かつて先生が敵軍をヘイゲイしてボックスに立つた時だ、偶然ボールが来てバットに當り、カツ然として左翼に飛んだんだ。處が運のいゝ時にはね、その左翼手といふ人が喉がかわいたんで、試合中をもちからずアイスクリーム屋かなにかを呼んで食つてたんで、レフトは人あれどもなきに似たりサ。瀬戸先生歡呼の聲に送られて夢中で走つた〜、二塁まで来て、そこでバッタリヘタバッチやつてこゝにかどやく大二塁打とはなつたといふ話サ」

P「先生の球場における阿修羅の如き姿に引きかへてシンミリした端唄は、またスバラしいもんだぞ。お出なさいといへばいつでも歌つてくれるよ……目を細めて……」夕暮に……「いゝ聲だ」

キャッチャン

M「こゝにまた一人誰が何といつても、キャッチャーしかやらぬといふ先生がゐるよ。経営経

済學を講じて、學生の人氣の最高峰に立つてゐるキャッチャン事佐々木吉郎先生だ」

N「先生の生活は、眞しな研究とそして野球、それで全部なんだ。キネマは新馬鹿大將當時一度見たつきりといふからなア」

M「先生の中で、本當のヒットを打つた人はキャッチャン先生たった一人だ」

O「キャッチャーをやるのもみづから任ずる如くキャッチャン一人だ」

ハニカミ屋

P「同じ佐々木先生でも帝大から来た佐々木道雄先生はおとなしいね。童貞の如くハニカミ屋だ」

L嬢「お講義をなさる時は、いつでも教室の四隅ばかり御覽になつて、決して私達をマトモに御覽にならない方ですわ」

K「いや女の學生を前にすれば、ある特殊の人を見るべからずといふ不文律があるんぢやないですか？」

L嬢「でもチ、とも見て戴けないと、淋しうございますわ」

監督の被面

Q「瀬戸先生の端唄、小林先生の追分、その他諸先生の名吟美音もさることながら、商業英語の小此木爲二先生の琵琶は玄人はだしどころか、けだし朗々天衣無縫だ」

G「いつか僕は送別會の席上で聞いたんだが……萬里をかける鷗も、水には翼折れぬべし……ト、チチリチリトン……満座の人、シハブキ一つする者もなかつたぜ」

P「すなはち天よりは神々を下らせ、地よりは鬼を呼び來たり、神人合一、雨乞ひなどには是非一曲、先生にお頼み申すべきだと思つた」

政 經 學 部

アメリカ張り

R「まづ部長の西村文太郎博士から……一體學者としては本を澤山書き散らすのがえらいのか、書かぬ方にえらいのがあるのか、西村先生は斷じて書かぬ方の大將です。一昨年博士になつた人で、年は四十二三、新進としては資格充分です」

S「あのキミイーやつて見給へ、キミイーの尻上りのアクセントは氣になるね。アメリカのハイスクール出身が鼻の先きにぶら下つて居る」

H「レデイに對して失禮だからと、女子部では夏でも上衣をお取りになりません」

T「だからアメリカ張りだつてんだ。男の教室ではシャツ一枚になる」

U「あれで若い時は衣は肝に至るの紋付姿で、インキ壺を袴の紐にぶら下げて通つたといふから、變れば變るもので、今では押しも押されぬ米國タイプの紳士、眼こそ小さいが堂々たる格幅です。教授會などでも押しは利くが、學生には個人的の世話は一向やかない」

モダン補助先生

W「監事で外交史、國際法を教へてゐる米田實博士、學識の方面では、たれ知らぬ者はありませんが、見たところ上半身が大きく、なかんづく頭が圖抜けて大きい。ニック・ネームをモダン補助といふのですが、學校へはいつた當時これが有名な米田博士かと眼を見張つたものです」

S「しかし學生にはよくおこつて呉れるし、講義も新鮮なので好評噴々たりです」

武士道第一主義

T「劍道四段で拳闘部々長の關未代策教授は、學生時代は辯論部を牛耳つて居たが、何時の間にか武士道第一主義になつてしまつたんです」

U「訓示といへば、肉を切らして骨を切れの一點張りで、あの明大拳闘部獨特のラッシュに次

ぐ猛ラッシユの突撃、玉碎精神は、先生の影響が多分にあるんぢやないかと思ふ」

R「隠し藝がまた先生らしく、自作の「近藤勇」といふ勇敢極まるレヴュー式剣舞をやる。學者といふタイプではなく、いゝ先生といふ感じですね」

お兄いさん先生

V「なんでも大将、小島の憲さん……といつて社会政策の小島憲教授は、頼めばなんでも部長になつて呉れます。酔へば自作の「シヤム皇帝戴冠式の歌」を唄つて、いとも奇妙な踊りが始まる。最近まで獨身主義を奉じて居り、夜先生に逢ひたい時は新宿のモナコへ行けば大抵ジョッキをなめて居たものです」

I嬢「もしも學校を休むなら、構はないから僕の時間に休む緒へと、いともおやさしい先生で、先生といふよりお兄さんとお呼びしたいほどです」

L嬢「持病の脊椎カキエスのせりもあつたでせうが、お母さんの氣に入る女の方でなければ結婚しないとおつしやつてそれで獨身だつたのです。とても親孝行で、よくお母さんをお連れして、新宿など歩いてらつしやいました。で、女子部の人達がとても嫉妬して、その中の誰かのお世話で學生の〇〇さんをおもらひになつた筈です」

T「農業政策の三神修教授は、自説を固持せぬといふのが口ぐせで、答案でも誰の説を採つてもいゝとおつしやる。先生自身も女は日本人が世界一だと主張してゐたが、留學から歸る時には、美しいドイツ人の奥さんを連れて來た」

小男の好一對

W「土屋番雄氏——帝大では助教ですが、明治では教授です。今の世の中で子供を無暗に造るのは馬鹿だ。自分は二人しか作らぬ。その方法も希望なら教へよう……」

S「多分その方法論の材料で一杯なんでせうが、何時も大きなカバンを提げて、身體を左右に振つて歩く。身體を振るのは背の低いのを多少でもカムフラージュしようといふのでせうが、効果は反對になる」

W「好一對の小男は北崎進教授で、教壇から首だけが出て居る。越後節が得意ですが、口の悪い連中にいはせると、さらし首が越後節を唄ふんださうで……」

和服黨の旗頭

V「青木得三講師の教育連鎖ぶし……青葉しげれるから始つて、男兒志を立てゝの詩吟に終る、流石に教室では聞かれませんが、何か會があると必ずこれです」

R「和服黨に村瀬武比古教授が居ます。縷ひ紋の羽織かなんかで粹な姿を現します。先生は待合などの空気もすきだとの説もありますが、實は痔が悪いために洋服が着られないといふのが真相です」

U「二時間の授業を必ず一時間で切上げる。休講もすこぶる多い。授業料の単價が一番高いと不平をこぼす學生もありますが、サボりくせのついた連中には、正にオアシスです」

平民的なお殿様

W「最後に越前のお殿様、松平廣昌侯爵、ちつちやな自動車を自ら運轉しての御出勤ですが、さうでない時は奥さんが自動車でお迎へに来る。奥さんは徳川家達公のお嬢さんですから、留學中など奥さんへの招待會の方が多く、自分はまるでお付きみたいだつたと何かの拍子に話しましたつけ……」

V「質屋の番頭みたいなモチリを着て來たり、講義も極めて平明で、一切がすこぶる平民的です。しかし趣味は鬮魚蒐集だの、自動車だのと、流石に平民とは違ひます」

R「私財一千萬との評判で、學校の自動車部は先生の自宅にあり、部長もして居るんですが、殿様といふものは不自由なものらしく、ポケットには五十錢位しかない時が多いやうです」

文科

まだ歴史が浅い

X「文科……まだ文學部になれず、創設滿二年のヒョッコですが、部長尾佐竹猛博士の下に文藝科、史學科、新聞科とがあり、中心は何んといつても文藝科でせう。將來大いに文壇へ送り出さうといふ意味から、文學といはずに文藝と名づけたところが味噌ですが、先生に借りものが多いのは歴史の浅い悲しさです」

Y「石原純、土屋文明、豊島與志雄、今日出海、畑耕一、里見諒、舟橋聖一、横光利一、元帝大總長の息古在由重とポスターバリエーは鉦々たるものですが講師が多い。その名聲から考へてどんな名講義、あるひは奇想天外の講義が行はれるかと考へるでせうが、たとへば畑耕一氏にしても、講義ぶりはすこぶる平凡なんです。教壇は「文士」を「先生」に還元させる魅力を持つらしい」

答えて風呂焚き

Z「變りものでは小林秀雄教授、タバコをのまぬと講義が出來ぬ。腰を下すと先づ「諸君も大

いにのみ給へ！」といつて、自分は二時間に二箱ぐらゐ。時によると三十分位一言も語らず生徒とにらめっこしてスバ／＼やつてます。伏見直江論で一時間もぶつぶつぶしたり、専門は戯曲ですが、試験問題までシネマです」

Y「大分前の話しですが、答案を家へ持つて歸つたら、女中が知らずに風呂へくべて仕舞つた。仕方がないから全部六十點をつけた……中には答案も出さなかつた者まで六十點だつたといふ話がありました。見たとしてもあまり答案なんか抱泥しない方です」

キツクをキスと

X「佛文の辰野隆教授は、毎時間必ず野球の話しから始める。慶明戦の翌日など各新聞の戦評を比較検討し、若し自分をして監督たらしめば……と悲憤慷慨して時間を終つてしまひましたが、講義には熱があり、けだし名調子です」

Z「御愛嬌なのは吉田甲子太郎先生の早合點で、馬と家間違へるなどは毎度のこと、いつぞやは「彼は彼女を蹴つた」と譯すべきを、キツク(蹴る)をキスと早合點して……兎に角面白かつたです」

X「今年は来てませんが、山田耕柞氏が講座を持つてた頃は秀逸だつたなア。なにしろ講義に來る時の條件が

(一)教室でY談をやつてもいいか。(二)着流しでもいいか。(三)氣が向かなければ休んでもいいか

といふので、教室の賑やかなこと、法科や商科の連中まで一杯聴きに來て、講義なんだか、漫談會なんだか……」

簡明至極の問題

W「故石川千代松先生の試験は有名だつたネ。講義も簡明だが、試験問題と來ては何しろ一分間で書けるんです。僕の受けた時は「人間の生殖體はいくつあるか」といふ問題で、七十四とたつた三字書いて出したら優を呉れましたつけ」

V「作家研究の水野亮教授は文科切つての几帳面さで、そのバルザック論は相當認められて居ます」

休まぬ山本科長

Y「しかし他の先生は實によく休む。その中で休まないのが水野さんとそれから山本有三科長、あの作品に現れる通りの眞面目さで本家の伯父さんといったやうな四角四面の講義です。始

中央大學

業式に科長として訓示した時、誰かど手をたゝいたら文字通り頭髪を逆立て、「馬鹿者ツ！」と、あれこそ烈火の勢ひといふのですな」

W「史學科は科長が帝大史料編纂官の渡邊世祐博士で、以下帝室博物館の後藤守一氏、東洋文庫の石田幹之助氏と大物は大てい借りものですから、批評はやめませう。教員志願者が多いやうで、全體としても文藝科にくらべて精彩がありません」

明大の一特色

V「新聞科は兎に角明大の一特色です。文藝科、史學科は來年にならぬと第一回卒業生が出ませんが、新聞科は今年第二回が出ました。大學専門學校卒業生を入れて一ケ年修了、學部ともつかず、専門部でもなし、高等専門部といふ鶴的存在ですが、去年、今年の卒業生合せて七名が全部一流新聞へ入れたのでこの處息はすこぶる荒いのです」

X「ほとんど全部が講師で中央公論の島中社長、婦女界都河社長、文藝春秋を代表した格で佐々木茂索氏その外一流新聞の編輯局長、政治部長、經濟部長がづらりと十數名並んでるのは兎に角壯觀です」

Z「科長は帝大新聞研究主任の小野秀雄先生で、つまり借りもの科長ですが、今に見ろ、十年

たつ中には早稲田の牙城をくつがへして一流新聞雑誌の中堅は全部明大で固めて見せると、小野先生の意氣たるや相當すさまじいです」

商科が大いに躍頭

A「で、最後に總論として文科はまだ山のものとも海のものともわからない。明大を代表するものはかつて法學部だったのですが、近來は商科がむしろ中心の傾きになったのではないでせうか」

B「例の騒動にしても一面から見れば、卒業生が勢力争ひを起すほど多くなつた。つまり學校としての勢力がそれだけ大きくひろがつて來たからではないか……と僕等は見て居ます」

中央大學

A「今年は創立五十周年で、記念圖書館は既に出来、記念講堂を今やつて居ます。御承知の通り前身はイギリス法律學校で、今でも英法が中心です。經濟學部、商學部と三つに分れてはゐますが、法科が斷然優勢です」

C「創立の精神からして實用主義ですから、高遠な理想といふよりも、現實的に役に立つ人間を作る。たとへば高文合格率なんか非常に多い。従つて質實剛健といふのが學風で、宣傳とか廣告とか、派手なやり方とはおよそ縁が遠いです」

B「その意味で現學長原嘉道博士は實によく學校を代表してゐる。いふまでもなく法曹界の大御所で、樞密顧問官、私立大學の學長中で勳等は恐らく一番上でせう。學校のためとなれば實に熱情的だ。明治二十何年から學校に關係し、昭和四年學長になつてからは講座を持ちませんが、學校生を抜きで輸入學長でないところが學生の信頼する理由の一つでせう」

A「若い時奥田義人氏の世話になつたので、その没後は故花井卓造氏と二人で涙ぐましいほど、奥田家のために盡くしたし、また花井氏の亡くなつた時の話など、實に人情敦厚の人である

ことを思はせます。學生のいふ事もよく聞いて呉れます」

D「理事の河野秀男氏（會計検査院長）は明治二十九年の中央出身で、林頼三郎氏や海軍の山田法務局長と共に、二十九年組の三人男といはれてゐます「質實剛健」そのものゝやうな人で身を持つること謹嚴、それで朝か晩か一日に必ず一度は學校を見ないと家へ歸れぬといふ熱心さです」

C「同じく理事のト部喜太郎氏はあまりにも有名です。花井氏が亡くなつた時の弔辭は、言々句々涙を浮かべさせる名文で熱血漢ト部の情熱に吾々一同打たれたものです。理事はまだ大勢居りますが、教授を兼ねて居りますから、その方で話すことにして先づ法學部から始めませう」

法 學 部

F「學部の機關雜誌法學新報は今こそ教授の機關雜誌になり、獨法、佛法の系統もまじつて來ましたが四十四年前の創立當時、更にその前身法理精華の時代を回想すれば、英法學派を代表して法典改正問題を中心に、獨法派と盛んに論戰を交へ、發賣禁止さへしばしば受けた華やかな歴史を持つてゐます。この傳統の法學部に現在部長としてのぞんでるのは林頼三郎博士で理事の一人

です」

D「刑事訴訟法と刑法各論を持つてゐるが、眼鏡をのべつ取つたりはめたり、鈍重な講義振りだ。刑訴では

何んといつても大敵だから

學生はオド／＼するといふ程もないが、突つ込んだ質問などは氣遅れしてしまふ。それをさせまいと氣を使つて、何時もニコ／＼してる。先生として會へば實に和やかで檢事總長とは思へな

31

G「講義は折衷説で、どれにも片寄らないが、採點となると非常に片寄つて甘い。散歩がすきで十分の暇にも神田通を散歩する。夜分神樂坂などよく散歩してゐるが何時もキチンと袴をつけて居る」

E「金曜日には午後十時まで講義があるが、そのあとは靴を提げたまゝ必ず校内を一巡見廻る。法學會々長として忙しい中を會合にも出てくれるし、就職の世話も、一旦引受けたら絶對的にやつてくれます。けれどし名部長ですね」

A「同じく理事で土方寧博士、あの白ひげは實にいゝなア、この間寫眞をうつしに行つたら寫

眞屋がほれこんで、店へ飾るのだから是非もつと寫させて下さいと、何枚も何枚もとられたつて……學校創立にあづかつた一人で、講義を続けること五十年、七十幾歳の今でも一週三回の登校時間が、三分と狂つた事はない」

C「狂はない筈だ。番町の自邸からいつもボク／＼と歩いて来るんだから……、その几帳面さでやるもんで點は無暗に辛い。法科で落ちる人の大部分は、土方先生に落とされる。三年連続して落第し、今年はまだ卒業させてくれるだらうと思つてゐると、また落第する。先生はいく、學問の出來ぬ者が卒業して何んになる……と、これも一理あるね」

B「昔の學生は亂暴でね。吉原から赤い鼻緒の草履で高文を受けに來たりしたが、そんなのがかへつて出來たのだから不思議だよ、など、入齒の口から

ボツリ／＼遠い昔の話をして

くれます。今の者は細君をもらふのが遅くてかはいさうだねなんて、妙な同情もしてくれます。

趣味は射撃と中禪寺のマス釣り。いつも葉巻をくはへて紫雲を棚引かせ、典型的英國紳士です」

G「會社法の片山義勝教授、この人も理事で朝鮮銀行に永く居た人です。運動部長として五大學リーグには必ず出かけます」

A「實用向の講義、會社のアナを教へる講義です。教室ではあらかじめ問題を出し、學生を教壇に立たせてこれをやらせ、その後から先生が訂正したり批評したりするんですが、學生にやらせて居る間、自分も學生の椅子にかけてニヤリ／＼して居るところ、實にいゝです。映畫と芝居がすきで、野球部選手を集めて劇談を戦はしたりします」

F「も一人の理事で、高喜喜八郎博士、講座は商法、明治三十年頃の母校出身です。學藝部長で、その著した判例集は實務家の虎の巻です。講義は平凡だが暗記力たるや驚くべきもので、條文を一々空んじてる。自分が暗記してるもんだから、學生も暗記してるに違ひない、否全部暗記しろといふのですがこれはちつと無理ですよ」

D「加藤正治教授は海商法、破産法で、圖書館長を兼任、信州はサイカハのほとりで育ち、犀水と號して俳句、俳畫は一家をなして居る」

E「加藤さんは帝大出だが、中央生え抜きの名物教授には片山金竹先生が居る。商業學校を出て中央の經濟科へ入つたが、法律の講義ばかり聞いて居たといふ變りもの

昭和二年ドイツから歸つた

F「ドイツ民法の權威、何とかベルグといふ蝶飾りの後についた留學時代の帽子を後生大事につけ

てゐる」

A「碁、將棋、映畫、麻雀なんでも来い。リーグ戦の頃には一時間半野球の話をして残りの三十分で超特急の講義をする。もつともこれは水を向ける學生も悪いんですが……」

B「風貌も、しゃべり方も悠々として迫らず、満洲國大官といふやうなのが法律哲學の柴田甲四郎教授です。『わしもマルクスは一通り讀んだがノウ』とつかみ所のあるやうないやうな顔付きで『さうかノウ』とそり返る。満洲國協和會顧問で王道主義を唱道して居ます」

G「四十六、七でせうが、最近二十六だかの美しい奥さんをもらつた。學生にひやかされてもちつとも感ぜず『欲しくもなかつたが、矢張りもらはんといかんさうでノウ』といつてる」

D「海商法の森清教授は日本郵船顧問で四十臺だが頭は光り輝いてゐる。とても達筆だ。前田直之助先生は國士の風貌のある謹嚴な大家、何でもツケ〜いつてのける。お前達は行儀が悪いぞ〜と叱りながら、自分はこんな格好に机へ肘をついて居ます」

E「銘酒に有各本白麴といふのがありますね。あそこの養子になつたのが井本重孝教授、拳闘部の会長ですが、氣前のいゝ事つていつたら、何か會のある時、うまくおだてれば

白麴の一本位は弄んで

くれる。そのくせ自分では吞まないが、氣分はおすきと見えて、時々銀座裏あたりへ泳ぎ出すさうです」

G「法制局第一部長の種貝三教授は、中央を出てから更に京都帝大を出たのですが、得意は海商法「目黒のサンマ」といふ落語など引つばつて来て、實にわかりいゝ講義です」

B「次ぎは寺田四郎博士、講義の調子は明快で、時々ユーモアを織込んで、學生を飽かせません。點はいくらか甘い方です」

E「それに先生は絶対に怒りません。おまけに親切ですから、學生に非常に慕はれます」

B「法科は判検事の先生が多いが平井彦三郎教授も大審院検事、檢察制度の何んとかいふ博士論文は大變いゝものださうだが、あんまり膨大なのでちよつと手が出ない。實情は、諄々と説く。秋霜烈日といった氣分は、少くとも教室では見られない」

A「反對に、見るから検事型は民法の藤村久教授、中央出身で、そして美男子で、某教授が「おれがもし女なら早速吉田にほれる」といつたほどですが、講義を聞いてると、どうやら自分が被告になつて峻烈な求刑でもされて居るやうな錯覺を起しさうで

なにしろ典型的硬骨漢です

C「故卓藏博士の養子花井忠教授は親譲りの刑法です。角の取れた圓滿なお方、圖體が大きく、象のやうに黙々としてゐますが、あれでなか／＼映畫ファンです」

D「控訴院判事の前野順一教授も中央出身だ。肥つてゐるから背の低いのが一層目立つ。もう五寸あれば日本一の色男だがなア……としよつちう背を氣にしてゐる。民訴研究会では自分の家へ學生を呼んで来て御馳走したり、随分可愛がつて呉れる。大學も高文も確か一番で、その受験時代には圖書館の行き歸りなど若い女を連れて歩いてるのを見ると、癪にさはつて／＼、今に見てゐる」と毎日友人に鬱憤を漏らしてゐたさうですが、パスして任官すると

奥さんには

もらつて家庭圓滿、奥さん孝行、そして非常な子福者です」

B「保険法の三浦義道先生は、確かに光頭會々長の資格があります。鼻の穴が大きくて、ちよとノンキナトウサンみたいです。授業時間の短いので有名です」

F「ドイツ學會々長でビールが大すぎ。學生の人氣は百パーセントだし、何か決めるにも學生の意向を一々聞いて、さてその通りにするかと思ふと、何時の間にか先生の思ひ通りになつてしまつてゐる。さういふ點は名人です」

E「中村武教授は東京區裁判所の判事、控訴院へ行くと勉強が出来ぬと、何時までも區裁判所に頑張つてゐる。苦學した人で、その後ドイツへ留學し、金髮美人と國際結婚しましたが、奥さんの方が一尺位高い。夫人の腕へぶら下つて歩く格好たるや、幼稚園の子供が先生に連れられるやうで……」

奥さんはドイツ語學會で

語學の特別講義をやつてます」

A「國際法の松原一雄教授は精悍なこと、正にアザラシといふ感じだ。もつとも顔は漫畫のジグスそつくりだが、國際法では我國切つての重鎮、私立大學教授で高文試験委員になつた最初の人です」

C「佐々穆教授……ボクと讀まれたり、ヤワラとも讀まれてゐるし、この間放送の時にはアナウンサーが困つたさうです。野球で名高いあの大社中學を出たゞけで法學博士になり、教授になつた力行の人、山陰なまりが残つては居ますが、座談は正に天下一品」

C「八東博士の息、穂積重威教授は家柄で光るし、高橋勲教授（ススムと讀みます）も穂積家の一族です。最近亡くなられた正木義太中將の息で口八丁手八丁の正木亮教授、この人は帝大出

ですが、中央の學生が實にすきだと、口癖のやうに言はれます」

H「原學長の辯護士事務所で育つた小林俊教授（物權法）も人氣があるし、新進では民法の戒能通孝先生、僅か二十八歳で教授です」

歌人はまだ見ぬ景色を讀む

といはれますが、先生は洋行したことがないのであちらの話が何よりすき、英國式のテーブルをかこんで語るといふ師弟關係が理想らしく、よく喫茶店へ連れて行つてはいろ／＼参考になる話を聞かして呉れます。滿鐵調査會の囑託です」

C「英法の二上兵治教授はあくまでも英國風に、何時もモーニングかフロックコートで端然として居ます。先づうや／＼しく風呂敷を開き朗々として講義しますが、非常にいゝ聲なのでうつとりとなる。一節毎にユーモアを交へて自分から先づ薄笑ひをします」

B「その薄笑ひたるや實に何んともいへぬ薄笑ひなので、我々には脇の下をタメキの尻尾で撫でられるやうに身體中がわ／＼として實になごやかな笑聲が教室中を占領するのが常です」

G「最後に瀧川政次郎先生、今年の二學期は休講でしたが日本法制史を背負つて立つ一人です（奈良の大佛は奴隸の汗の結晶であるかないか）といふ天平時代の奴隸存否問題では

學界に大論争を捲起して

先生は勝つたと思つてゐるやうですが、公平に見ていまだ結論に達してゐないのではないでせうか」

F「身體が小さくて聲は筧棒に大きい。日本史の暴露方面がお得意で、吉原のオトリサマ縁起など獨特の快辯でまくし立てると、教室は立錐の餘地なしです。人形淨瑠璃のファンで、酔へば義太夫のいくさりもうならうといふ日本趣味です」

經濟學部・商學部

A「經濟學部は出來てまだ日が浅いので本學出身の教授が少い」

B「先づ第一に部長の山崎覺次郎先生だが、學士院會員といふ學者最高の肩書を持つてゐる人でありながら、學生にもよく接してくれます。まあ、むつつり屋の方だが、時々皮肉をいつて笑はせる貨幣論の講義も仲々親切ですな」

C「今年の講義の初めに、僕の貨幣論は古典的だと評する人があるが、古典的といふことには二つの意味があつて、その一つは古臭いやつ、他の一つは

永久に光を失はぬやつて

僕のはつまり後者なんだ、といつてましたがネ」

D「白髪を染めてゐるネ。齋藤實盛と仇名されるゆゑん！」

A「酒も飲まんし、少し固苦しいが善良な先生だといふことになるネ」

B「國際法の天野徳也先生は本學出身だが、先生の書いた「法學通論」は日本十の良書だといふ評判だ」

D「あらゆる本の内容があの本に納められしゝるんで、つまり自録のやうなものさ」

B「この頃は神道の研究に没頭してゐるさうぢやないか」

C「うむ、さういふ立場から瀧川政次郎教授等の日本歴史の解釋と衝突することになるんだ」

A「背が低くて、髭を天神さんのやうに生やしたところは、相當な老人に見えるな」

D「航空經濟學の榎崎敏雄教授は文學士で、經濟學士で經濟學博士で……。何しろ變つた先生だネ」

B「航空經濟學なんてものをやるのからして面白い。歐米にはあるさうだが、そんなこと研究してゐるのは日本ではたゞ一人だ」

- C「學問は固苦しいが、本は流暢に名文で書いてある。文學士だけあつて名文句を吐くネ」
A「經濟學方法論の松浦要先生は福田門下の逸材といはれたんだが……」
B「とにかく弟子を養成するのは偉いもんだ」
C「ちよつと老獺なところがあつて、

眞向から人に反對するやう

なことはないね。いつも白足袋で着物だ」

D「釣りが天狗で、若い教授や講師を引卒して出かける」

A「講義は相當難解だが、それでゐて點はあまいから助かるよ」

C「政治學と植民政策を教へてゐる河原次吉郎教授は吉野作造博士の門下だつたな」

A「うむ、博士の主宰してゐた明治文化研究會の會員だよ」

B「奥さんにロマンスがあるんだ。何んでも千葉縣の素封家の令嬢で、先生が講演に行つた時チャームされちやつたんだ」

C「正月に行つたら二人で追羽子をついてゐたつけ……」

D「經營經濟の黒澤清先生は學者としてはレベルの高い人だね」

A 「學者としても中大随一、美男としても中大随一、そして奥さんの美しいことも中大随一、おつと、それはどうかね。」

B 「文學士であつて經濟學士で、肩書をつける時もちゃんとその二つをならべないと機嫌が悪い。すべて、きちんとしたことが好きらしいな。原稿などを見ても、楯の中へとても几帳面に字を入れて書いてある」

A 「會社法と信託法を教へてゐる栗須勉夫教授は、興業銀行に勤めてゐるんださうだね」

C 「さういふ話だ。銀行の人だけに明朗な人物で、いつもニコ／＼して人ずきのいゝところなんかはちよつと學者とは思はれないな」

B 「しかし信託法では日本の草分けだ」

D 「商權、金融の島田徳先生は本學經濟部出身で、更に米國のコロムビア大學出身。マスター・オヴ・アーツといふ肩書の持主だ」

A 「何といつても我野球部の育ての親で忘れてならん先生だ。野球は飯よりも好きださうだよ」

B 「そればかりでなく、兎角經濟學部が法學部に壓倒されようとするのを、何とかして守り立

てゝ行かうとする熱意は涙ぐましいものがあるよ」

D 「全くだ」

あらゆる機會にその熱意が

ほとばしる。喧嘩しても思つたことを押し通す熱血漢だ」

C 「先生の教室には平常は二三人ぐらゐしかゐらないのに、學年試験になると、二三百人も出るので先生すつかり憤慨して、ふだん出席しない奴に點はやらぬと怒つたことがあつた。しかし結局は一人も落第はさせなかつた……」

A 「先生よく學生にオゴルな」

B 「うむ、オゴル。酒も一人前には飲む。最近夫人をなくしたが、まだ在世の頃銀座などでしきりに飲んだが、夜遅くなると必ず家へ電話をかけて夫人にあやまつてゐる。それ程家庭にもあつたゝかいんだ」

D 「商用英語と貨幣論を講ずる三輪末彦教授はどうかね」

C 「大正九年のパニックで没落した高田商會にゐた人だよ」

A 「その前に米國のエール大學とコロムビア大學に

七年間も勉強したといふ

んだから商業英語は確かなもんだらうな」

D「それがさ、演説となると飛んでもなくテンポがのろいぢやないか。イット——イズといふ
工合にね」

B「學生と酒を飲むのが好きで、色々就職の世話までやつてくれるのは有難いよ」

C「市場論の和田清教授は腰の低い先生ね」

A「でつぶり太つてゐて会社の課長さんタイプといふべきだ。必ず頭を一つ下げてから話しを
聞くところなんか……」

B「商大を出たんだつたな」

C「貨幣論と英語の丹後愛二郎先生はどうかね」

B「地味な篤實な學者といふだけだな」

D「面白くもかしくもないといふ顔をしてゐるよ」

A「では世界經濟を講ずる大野信三教授はどうだ」

B「この人は面白い。第一頭の上に二錢銅貨大のハゲがある」

D「そのハゲが年毎に大きくなつて行く傾向があるよ」

C「つらいのは講義があまり熱心すぎて、授業時間が終つても、まだ十分も十五分も何かしや
べつてゐることだ」

C「しかし他の教授もいつてゐるぜ。あゝいふ先生の居ることは藥になるつて……」

C「試験場へ大きな洋書を持込むね」

A「うむ、あれをのぞくと念いで隠すんだ。種本を見られるのがいやなんだね」

B「この先生は立大出身で

卒業するとすぐ立教の先生

になつたんだから相当秀才なんだらう」

D「それがどうしたのか赤の嫌疑で立大を追はれたといふんだから、あすこの出身としての異
色のある人だ」

A「統計學の田井要助先生は中大出身で、松浦要教授のお弟子さん」

B「ちよつと見たところ、三井、三菱あたり的高级社員みtainなタイプだな」

C「あの女性的な聲からしてさういふ感じだね」

D「緻密な計算がお家の藝だけに、小さくつて度量がないやうに見えるが、割に氣持のいゝハキ／＼した人だぜ」

A「田中阿歌麿先生はどうかね」

D「何しろもうお爺いさんだね、湖沼學者としては日本一。子爵さん」

B「趣味を本業にしたなんかは羨まれていゝんだらう」

D「だが、その講義たるや、ばつとしないな。學生も至つて少い」

B「僕の下宿してゐる近くに邸宅があるんだが、よく神樂坂のとある食堂で先生を見かけるんだ。ビール一杯をグツと飲んでチョンと十錢玉をおいて、黙つてすた／＼と出て行くんだ。なかなか面白い風格がある」

C「高宮誠先生は赤十字の関係でフランスあたりへ永く行つてゐたんださうだ」

A「いつも」

ゲートルをはいて杖を持つ

て歩いてゐる圖はチト妙だな」

D「あちらから持つて來た趣味だが、高踏的で、ちよつとつきあひにくいよ」

A「格好はをかしいが、いゝ先生だ。個人的に話して見ると分る」

C「瀧川政次郎教授の後を襲ふべき人物に長谷川謙治先生がある」

B「うむ、確かに長谷川さんの經濟史は將來性があるよ」

D「若いのに大變な能書家で、俳句もうまい。どこかで習字の先生をしてゐたといふ評判もあるが……」

A「大した日本趣味で、すべて膳立が日本の流儀にかなはぬと酒も飲まなければ字も書かぬといふ始末だ」